歸省

歸省

宮崎八百吉著述

明治二十六年六月十版

本書に關する各新聞雜誌の批評

國民之友批評

語に曰く、雛鶴の聲は老鶴の聲よりも清しと、吾人は湖處子の新著「歸省」を讀んで、此語の眞に吾を欺かざるを知る、此書や其着眼清し、其理想清し、其文章も亦則々さして清し、而して作者が年少にして無邪氣なる感情は、恰も幽屋深谷の水、未だ俗界一點の塵を着けざる者の如し

此書は分量よりすれば、二百頁に其四分の一を缺ける一冊子なり、その事柄よりすれば、作者が故郷に還りて其見聞感想を叙せる隨筆なり、未だ之を以て明治世界の妙著逸と云ふ可からず、未だ之を以て文海萬疊の波瀾を捲起すものと云ふ可からず、未だ之を以て天下の耳目を聳動せしむる日星河嶽の大文章と云ふ可からず、然れども尙吾人をして一讀、再讀、三讀、已む能はざらしむるものは何ぞや、眞氣の人を動かすもの有ればなり

我邦詩道の振はざるや久し、漢詩和歌に論なく、格調の爲に壓迫せられ、編倚なる、鄙俚なる、浮靡なる、輕佻なる黒想に束縛せられ、遂に我邦民をして、空しく其の清白なる幽懷を洩すに所なからしめんとするに至れり、此書の如きは精巧なる英文の調子を以て、縱横自在に和漢の文字を使役し、その目に映じ、心に感じたるものを、水の石より落るが如く、雨の天より降るが如く、春風花枝を拂ふて落花片々たるが如く、極めて眞實に寫し出したる者にして、乃ち之を名つけて一種の無韻詩と云ふも不可なきなり、然り詩若し理想を人間の生活に應用する者なれば、此小冊子は即ち詩なり、詩若し人間の生活を批評する者ならば、此小冊子は即ち詩なり、高妙の詩か、超逸の詩か、天使諧ひ、星文舞ふの詩か、吾人之を知らず、然れども其眞詩にして僞詩に非ざるは、吾人慥に之を斷言し得るなり、詩の事たる、事物を其儘に寫すに非ず、自己の眼球を反映せしめて其影射したる物をば寫すなり、而して詩人の妙は、其反映せしむる着眼の極めて眞なると、高さに在り、吾人は此書の着眼極めて高しと云ふを得ず、然れども其清く、溫に、且眞なるは、吾人敢て之を許すを吝まざるなり、滔々たる文學の世界、宛もボンヤ

ン天路歴程の虚榮城中に避びたる想あり、然るに今この小冊子に出遇ふ、吾人が之を嗟嘆し、之を欣賞し、且その多少の缺點あるも之を宥恕し、愛誦已む能はざる所以のもの又宜ならずや、

竊に世上を觀するに、浩大なる思想を有する者は、多くは懷疑的となり、宛かも天堂より墜ちたる天使が、暗黑混沌の翼に乘じて宇宙を飄ふが如く、その依る所を知らざる者あり、此の一關を踏破して、萬物皆空の解脱界に驚入する者あり、解脱の跡高からざるにあらず、然れどもその冷眼寒膓は、失望、落膽、窮愁の氷結したるものなることを知らざる可らず、然り彼の大悟者は、要するに是れ悲觀者の進化したる者に過ぎず、而して世或は此等の境界にすら一歩を蹈み込むと能はずして、たゞ眠り、食し、語り、笑ひ、働くを以て一生を了する者あり、又た他の眠り、食し、語り、笑ひ、働くを摸擬して、文學の能事を做す者あり、想ふに「歸省」の作者は、何れの領地に戸籍を有する乎、吾人の見る所を以てすれば、作者は別に一個の乾坤を有するが如し、何ぞ、基督教希望的の理想即是なり、

惟ふに此の小冊子には、悲喜の情横溢せり、開巻の首句「去年の秋吾最愛の父斯世を去りしより」既に一滴の涙を湛へたり、巻末の結句「車を停めて願望すれば、吾故郷も亦幻影となり、暫らく見へて亦消へぬ」一誦黯然魂消せんと欲す、その中間又た無數の涙あり、而してその都會を以て村落と比較し、文明を以て天然と對照し、進取的生活を以て退守的生活と併觀し、常に彼を棄てゝ此を取るの傾向あるを見、彼是商量し來れば、或は吾人をして作者が悲觀者の一人なるかを思はしむると雖ども、萬峰屏立の中、恒に一條の活路を發き、滿目幽闇の裡、恒に一片の天光を望み、恰も四十餘年アラビヤの沙漠に彷徨するも、尚ほ眼前髣髴に迦南の樂土を忘却せざるが如きを見れば、(吾人が作者を評して其督教希望的の理想界に呼吸するの人と云ふ亦大過なかる可きか、然らば則吾人が此の小冊子を讀んで、恰も空林の中、十年來の友人に邂逅したるの想あらしめたる、豈に故なしとせんや、豈に故なしとせんや、謂ふ勿れ、此の書摸描する所、尋常一樣の事なりと、知らずや古へ名工あり、神像を彫刻せんとす、天下の

珍木奇石を蒐集して、その鑿を試みたり、改作々々一も意に適するものなし、倦憊慚悔交も至りて覺へず假寐す、夢に人あり謂げて曰く、汝が竈下に爛へ殘りたる薪片を採り、汝が意の浮ふ儘に之を彫刻せよと、詩の材料何ぞ必らずしも、徐福が三神山の如く、穆王の西王母の如く、之を遠きに求むるを要せん、苟も詩眼を以て之を見れば、萬物身邊、悉く是詩料ならざるはなし、それ唯だ身邊の事のみ、身邊の物のみ、故に人之を讀んで恰も自家の境遇を映出せられたるが如く、自家の胸中の秘密を發かれたるが如く、覺へず點頭するに到るなり、眼前の景、口頭の語、總て詩人無盡藏中の一物なり、吾人は作者が幽淡平雅の別界に、立脚の好版圖を占めたるを悅ふ、

作者の着眼は既に略々評せり、其手胸に至りても、亦一言せざる可からざる者あり、作者は人の品性を描寫するに於て、多少の伎倆を現せり、例せば「吾家」と題する一章中には、その父、その母、その二人の兄、その二人の妹、その一人の弟の性質を參差として畫さ、宛も眼前、史記合傳を讀むが如き想あり、之を拙手の畫工が寫出せる骨骸の如く、首より以上は百人も千人も皆同一人なるものに比し、三文小説家が、一篇の中或は女とし或は男とし、或は客とし、或は主人とするも詮する所異名同性實の人を寫出すると同日の論にあらず、是れ彼の寫す所は虛にして、此の寫す所は實物あるが故なりとは云へ、又た作者が、平生目慣れ、心熟し、鏡を以て物を照すが如しとは云へ、兎に角品性繪畫者としては、作者決して拙技の名を受る人に非ず、

風景を叙するに至りても亦見る可きものあり、その寫すや作者は毎に綠彩を用ゐたり、又た毎に軟筆を用ゐたり、又毎に濃抹を用ゐたり、去れば滿幅の雲煙筆底に涌き、咄々として人に迫るが如きを無く、又た鮮麗赫奕目を眩するが如きもの無しと雖、穆秀園妙その上乘なるものに就て之を見れば、宛も應舉の畫に發するが如きものあり、蓋し一篇の中、その景色を寫出すの妙は、「山中」の章にあるべし、

而して更に作者の勝場は、景と人と已とを打て一丸と成し、之を自家の眼中に映射したるものを寫出すに在り、想ふに作者此點に於て、既に其室に入れり、若そ

れ廻て止まずんば、他日堂に上るが如きこと有らん、例せば「山中」に左の句あり

微かに痴き唐碓の響きに、吾躰は悠然として眠る同時に、靈魂は戸外に忍びぬ、天上の月を採らん爲に、地上の星を拾はん爲に、清き流を掬めん爲に、圓かの夢を捉ゑん爲に、

是れ何等の好句ぞ、清想ぞ、捉へ來りて水晶盤裡に盛るも、亦以て澄賞と云ふ可らず、

更に特筆すべき事あり。此卷の題目多しと雖、終始を貫くものは、亡き父と活る戀人なり、若し賓主の點より云はゝ、亡き父は主中の客にして、活る戀人は客中の主なり、亡き父に關する記事の惻々として人の心牌に入るは、感、中に動けばなり、且人間誰か其父を愛するを耻る者あらん、父を愛する者は孝子の名を獲るに非すや、人誰か孝子たるを耻る者あらん、唯男女の愛情に至りては、絶世の才人妙士も、幾度か筆を把りて筆を抛つなり、適々之を遂るも、或は物に托し、或は殊更に其文字を婉曲にし、毫も其深情を的皪として明珠の如く寫出す者あるを見す、而して此篇は優に之を寫出せり、「戀人」の章を一讀する者は、以て之を知らん、凡そ斯の如く事を寫す、他人に至りては驚心駭魄の事なり、而して作者は平々として、宛も小說家が他人の事を寫出すが如く、有りのまゝに、傍若無人に、大膽不敵に、自家胸臆の秘密を寫し、而して更に毫も腥き、穢はしき所を見さるは、之を作者の妙腕と云はん乎、抑亦たその樂んで淫せざるは、所謂思邪なきが爲なりと云はん乎、

凡そ人の品性を見る者は、その明所を見、又その暗所を見る、今作者の品性を寫すを視るに、暗所を寫すは三にして、明所を寫すは七なり、而して適々他の暗所を寫出すも、毎に其一方の活路を研り開けり、その嫂を寫す、その伯兄を寫す、その叔兄を寫す、その酒屋の主婦を寫す、質屋の叔父を寫す、その山中の目に一丁字なき叔父を寫す、皆然り、是れ品性繪畫者としては未だ悉さゞる所あり、然れども詩人たるの資格として、恒に温柔敦厚の資を備へざる可からざるの點より云へば、所謂その過を見て仁を知ると云ふの外なし、我邦の文學は、都會の文學なり、東京の文學なり、その文學者が寫す所のもの、多くは東京人士の生活のみ、その解剖し批評する所、多くは東京人士の性質のみ、その小說に現はれたる主人公は、某學士に非ざれば、某女學校の卒業生なり、官吏に非ざれば、紳商なり、藝妓に非ざれば、新粧の佳人なり、下宿屋に非ざれば、温泉場なり、而して偶々田舍の事を記する者あるも、都人士の眼孔を以て觀察したる者にして、恰も彼の泰西人士が日本の風俗を觀、之を奇とし、之を怪とし、之を一個の笑柄として記述する者にして、其眞味を解したる者に非す、而して所謂田舍人の眼を以て田舍の消息を寫出したるは、是亦た此書の特異の性質と云はざるを得す、肥料場の檐の瓦には、大なる南瓜顧かり落ち、雷の如く座はれるあり、山路に客と對話する老婆あり、饗應の下物を取らんとして自ら薯蕷を堀るの叔父あり、愛郎を饗せんと欲して自ら後園の梨を落すの戀人あり、是豈に都人士が夢にも知る所ならんや、而して其死に垂とする老翁が、手巾の贈物を見て繪絹と斷信し、之に珍客の書を乞ひたるが如き、田舍の若者が桑苗商法に失敗したるが如き、若くは士族の農夫と成りたるが如き、其畫家が迫々財產を失ひ投機に手を出し、更に失敗したるが如き、皆是れ今日田舍の實狀を描き出したる者にして、吾人は之を讀み來り、宛もゴルドスミスが荒村感懷の詩を誦するが如く覺ゆるなり、概して云へば、此の小冊子は、幽溪小壑なり、奇峯千丈の峭を見る可らす、斷橋淺水なり、長風紫瀾を捲くの壯を望む可らす、野溪の秋花なり。鬱々たる喬木の偉を期す可らす、然れとゝ近時の著作中、若し之を讀んで人の性情を涵養し、兼て人をして樂ましむる、健全無毒なる小品文學を需めば、吾人は先づ指を此の小冊子に屈せさるを得す、

吾人が觀察したる所のものは、多く作者の長所なり、吾人その短所を看出さゝるに非す、然れども言ふに遑あらざるなり、その好む所に阿れるの咎ほ、吾人甘じて之を受けさる可らす、詩に曰く、鶴九皐に鳴て聲天に聞ゆと、作者今妙齡、若それ藪澤に棲遲する無くんは、其聲天に聞ふるの日も、未た必すしも期す可からざる空想に非ざるなり、

國民新聞批評

御作「歸省」滿車中にて拜讀仕

り殆んど豫想外に敬服仕候折から全車中に老衰の病者乘合ひ看護婦に介抱され漸々に其腕に凭り居りしが眼は窪み頰はやつれドテラの上より貝殼骨の高きを露はしたる樣如何にも憫然にして月明に白張提灯の凄みを添ふる事にもや一ト月の外にあるまじと思ほず涙ぐみしが幸も開卷第一行日曜日の外に聖日を生じたりとありたりしを拜見して此境遇に落ちるもの一人二人遠からぬ中に殖ふるならんなど考へ申し尙ほ又瞑目徐ろに五歲の折分れし亡母の事思出し人知らぬ五月雨を袖にそゝぎ申候

兼てよりヂービンゲを御愛讀の由承及候ひしが此一篇も何處となくアービンゲの調子有之樣に思ほれ候如何にもいみじき御手際にて發幾升御殺しなされて斯る御腕前を得られしものかと竊かに嫉ましく相成り候誠に小說にも紀行にもあらぬ一種のスケッチ樣のものを鬼角古典に拘執し源氏八犬傳以外に眼の眉かざる現代の文學社會に出さるゝ事先つ御勇膽の恐るしき相見へ申候夫れば かりか詩論喋がしき時節柄に和文家連中の誤なも御忘憚なく幾多の御作を擧げられしほ御然心のほと誰しも敬服致すべしと存じ候但しアービンゲの詩は一向に存じ不申候故兄の御作と比較して果して如何なるかを知らず又散文とても較や疑ふ處有之候是等は追て兄か御教示を乞ふて惑を晴し可申候

殊に御交際を辱ふしたる我身に取りて最も面白く思ひしは一言一句の中の清容ありゝと見ゆる心地して讀了りて左ながら兄と對座し口角沫を飛ばす御有樣を眼前に現じ申候愈じて傑出の作(傑出ならざるも)には自然著者の現るゝは數の免かれざる處なれば珍らしけに兄の御作に就て申すにあらねど最高の著者は外物を借りて其理想を免する樣に思ほれ候アービンゲは米國に於てこそ第一流にもあれ英國產出の人に較すれば第二流寥ろ第三流に候得ども夫れすら其スケッヂ若くはフレースブリヂ、ホールを御覽あらば御發明に相成るべしと存じ候尤も是等は御承知の事なるべければ別に御卓說有るべしと推想仕候愚かしき胸奥をもて淵量するは甚だ恐縮に候得共百五十四頁迄讀して折々に吃驚し又折々に嘆息致し候中にも第四篇は部鄙を御比較ありし御論を拜讀せし折は初め憎くなり後可愛くなり又

淺ましくなり最後に卷を膝に閉ぢて車窓に嘯き申候何故なるかを我身自ら悟り不申候が兄能悟り給ふや如何

晉子の句に「すびつさへすごきに夏の炭俵」とあるほ是れ兄が御論を評したるものゝ生か友某曾て申居りしか今度初めて心付き申候仝し人の吟なる「芋苅や鼻の先なる歌がるた」は最もよく兄が御文字を評し得たるものゝ考へ候殊に生平兄に親炙して聞く處を全評すれば「滿月に不斷櫻を味めばや」の十七文字にて盡ふべしと存じ候是も仝し人の作に候

なほ拜眉の節はいろ〳〵御教示を雲むるべき覺悟に候まづは不取敢拜讀致せしまゝ申上ぐ萬々敬服

七月七日　　不知庵

湖處子樓觀北

東京新報批評

詩境の大小文情の高下、陶淵明大なるか杜甫大なるかゴールドスミス高きかミルトン高きか予嘗て友人と之を論す予曰く陶淵明、白樂天、ゴールドスミス、アーヴヰンゲ憲然たる和氣には不足なと隣崖千尺光焰萬丈の勢に至りては彼等夢にも知らず絕代の文人は矢張り杜甫ミルトンなるか友人曰く然り併し彼のミルトン杜甫滿腹の不平憂悲天地を悲み宇宙を恨む是尙小なり低し、四子は憂悲の境を過き不平の極に達し天地を小として微塵に物言ふも愚なりとし宇宙を低しとして汚物を爭ふも面倒なりとし天地宇宙の外に於て別に一境を求む是其高大なる所以なり若し夫れ「パイアル」と「中庸」とは別に一境を求めんとだにせざる聖人の深意を獲るに足れりと是亦一說なり今此言に依りて今人の文を觀るに此頃發行の經濟雜誌は報償論と題し掲載せる敬宇先生の論文はエマーソンの報償論に出でたれど趣意文辭ともに原文に勝りて「パイアル」「中庸」の境に近し次は即ち湖處子の此著にして湖處子の詩文がゴールドスミス、アーヴヰンゲに髣髴たるに二子の文章に得る所多りて然る者なるか兎も角も淵明の風を慕ふほ等中各章の發端に掲載せる古句の大抵淵明の詩文中より以てしを以ても知らる乍去詩境文情ほ次第に變遷する者には違ひなけれど杜甫一進せざれば淵明たる能ほずと謂ふにあらず各人の天分に不平多きあり和氣多きあり纖密なる辣豪なるあり種々樣々の異同あり此天分の範圍內に無數の段階ありて大家

と凡手の別生す湖處子は則ち和氣清廬の天分に富める者なれとも未だ直に之を以て湖處子を大家視するを得ざるなり此著には淵明アーヴヰングの境に於て許容せざる詐僞と誇張の分子夥多なり和氣精慮は正直眞率と相待つて絶美の文學を現出する者なるに湖處子は多く僞言を吐けり六年以前に其時代には作られまじき新體詩を作れりとのと等是なり及太く誇張の語を成せり故郷か目に見ゐたりとて、思はすも車を飛び下りて其土に接吻したり、といふの類是なり是恵し處子が年尚ほ壯にして文末だ老ひす名譽を求むるに急なるより或は流行の法螺を吹き或は奇怪の語を吐き世人を瞞着せんとするなり處子若し此一病を去り古句を濫用して柔色絢爛に過ぐるとを避け正直眞率を後盾として和氣精慮の天分を利用せば明治の文學界に淵明ゴールドスミスを觀るの望なきにあらす妄中の詩歌も總向は勿論押韻にさへ餘程苦心せし者と見へ悉皆二重韻を用ゐたるは敬服々々我邦の詩歌に若し韻脚を用ゐるとすれば二重韻三重韻を用ゐざる可からざるは識者能く知る

女學雜誌 數年前、日本情交史を細評して著者の才を賞揚したるは吾が女學雜誌記者のみ、今進化したる同著者の手に成れる散文の評を讀み、淺からぬ緣故に因なみ、一層の贊辭を呈したきは山々なり。文体の一種異樣にして宛ら翻譯文を讀むが如く、嚙み切れる西洋料理を呑むが如きは面白かられど、想像に豐かなると聯感の細やかなるとは非凡と云ふべし。此を以て、意至りて言はざる所きのみならず、意至らざるも感の通ずる所ろ尚ほ言ひ及ざるとなし、蜿々として蛇のはふが如く、轉々として煙の環の連なるが如し長所此に存す、故に短所も亦た此にひそむ、譬ば

此世に彼がいつくしむ　迷ひチにおくそのなごり
繪にも入りてや身にそしむ　泣かむ許りの目のくもり。

の如き措辭既韻あり、此れ抑そも歌と云ふとを得べき乎。然し乍ら、其の歸郷、關門を入らんとするに近つき、

車夫は猶ほ食後の吹煙を取れり、而る後ち草鞋を代へ店主に辭して而る後ち拭きたる後の顏を拭き、其手巾を頭に結び、而る後ち蝶を取れり、輪は旋り初め

の如き妙所もなからす、兎に角此上一皮の尚ほむけざる、今ま一修練の未だ足らざるを憾むのみ、湖處子獨得の文藻は既に已に其の微光を發しつゝある也

經濟雜誌批評 本書は曩に我社に「國民之友及び日本人」と云へる一篇の論文を寄せて能文家の名を博したる愛郷學人の作なり、十三日發行の國民之友には蘇峯先生の精細周密なる論評を掲ぐと云へば、平素經濟の事を談して文學思想の淵乾せる余輩亦何をか云べき、唯た明か本書を讀みて感したる所を述べまくのみ、余輩は著者の基督教臭味の爲に俗殺せられんことを恐れしが、之を讀むに左る臭味なくして、文の趣味多くして田野の樂を談する殆ど陶家の詩卷を讀むが如し、讀て第七章山中の一篇に至り益々文の妙なるに感服せり、佐田村は是れ宛然たる武陵桃源、明治の朱陳村、桑間犬吠雞鳴の趣掬すべし、新家の家族より著者を招待して饗應する宴席に衆客集りたるも互に遠慮して、談未だ興に入らざる時の形狀を左の如く述べたり、

早や半時間餘立たるも、會話は唯た冒頭より冒頭に移り、一個の東京疑問は、他の東京疑問に打消されつゝ諸人の心全く解けす、何となく圭角ありと覺へられたり、我謂へらく、是れ我が田家人たるの足らざる故に退等の心未だ開けすと云々

村夫野人が東京歸りの著者に對して、而煩なる形狀躍然として紙上に顯ほる、都人士の田舍に遊び村夫野人に接したるものは必ず此の文の妙なるを悟らん、然れとも是れ叙事の妙なるなり、同章中左の文字あり、

我嘗て謂へり、エデンの生活は迦南の生活より平和に、無何有郷の民は神農虞夏の民より安穩に、無爲の世界は文明の世界より快樂なりと、今や吾叔父の境遇を觀るに及びて、亦窮に無識者の生活の智識者の生活よりも幸福なるとを覺しなり、孔子曰く「疏食を食ひ水を飲み、肱を曲げて之に枕するも樂亦其中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と、蘇東波も亦曰く「人生字を知るは憂を知るの始め」と、蓋し世は學を學びて智識に入り、智識より空望に入り、空望より失望に入り、失望よ

り不平憂愁の門戸に迷ふ、吾人若し字を知らずば學者たるの望なく、字を解かざれば智者たるの慾なかるべし、吾人誤りて智慧を以て幸福の憧衝とし、智識を以て快樂の標準とせり、然れども我見る處を以てすれば、智等智識の探究も、亦是れ金錢の穿鑿の如く、一個の俗情に過ぎざるなり

右の文を讀むときは著者が有道の士たるを知るべし、自樂天の詩に曰く、我生二論義鄉一少小孤且貧。徒學二書一是非一祇自取二辛勤一。世法貴二名教一。士人重二冠婚一。以レ此自桎梏。信爲二大謬人一。と著者の意蓋し此れに同じ、著者既に此本領を有す、宜なり其文章の妙なる、著し強て文章の短所を云ばゞ文字の晦澁なるにあり、然れども其の餘韻、餘情を存するも亦其の晦澁なる所にあり、左れば文字の晦澁なるは、讀者の短ゲにして亦其の長なり、著者必ずしも之を改めて可なり、

報知新聞批評

「歸省」に至りては又將に明治の文苑に一種の彩花を添へんとするもの全篇分ちて歸思、歸鄉、吾家、戀鄉、戀人、山中、追懷及び出立の九章となす皆な著者が鄉に歸省するときの始終を叙する所なり著者が平生工夫して做出だせる一段の精微細緻なる措辭法は此書に於て愈よ成熟の色を呈せり著者が思想に富みて觀念に豐かなるは國民之友と日本人の二雜誌を較論して遂に裏然たる一冊をなせるに由りても之を見る可し此書に至りて亦益す其妙を知る而して特に珍重するゆゑんの者は著者の心地純白無垢にして小兒の如く耳目に接する所は內に感じ內に感ずる所は筆墨に顯はる其間些しの巧機無く些しの邪逕無し故に眼前の最日頭の語皆な通例人の想像に存するを得る所にして之を讀めば恰然として顏を解かざる莫し常に謂ふ最も正直に語る者は最も文を能くする者なりと昌黎の詩が樂天に輸する者此に在り「浮田末子の履歷」が世上幾多の祭詞に勝さるもの此に在り此書が一たび公にされしとき作家隊裡別に幟を拔くべきもの亦必ず此に在らずんばあらず姑らく一例を擧げん其始めて叔母の許を訪ひ現時の令室宮時の戀人を見るの條に言へるあり

「今は接待の人なきに因りて直ちに奥なる客室に來りしに思ひきや吾戀人の此の椽先に縋ひつゝあらんとは實に戀人は美はしくも年長けて轉た可憐の見となりぬ不意の對面に紅花を散らし忽ひ得ざる喜悅の笑顏に坐を起ちぬ然り此の急遽の際にも渠は猶ほ容止を保ち極めて靜かに極めて優さしく往き消へつゝ間もなく見へて亦隱れ其母は出て來れり此時叔母は溢るばかりの滿足を以て云ふ(云々)

叔母の談話は娘の入來に遮られたり渠は今手づから落せし梨子を冷水に浸して鮮ひ來り潤紅に光る顏もて庖丁操りて無言に皮剝き初めたり叔母は「日頃卿が愛たりし此梨子何時も好く實りしか、今は五年、然なり卿か上京せし後一秋も實らす漸く今年になりて枝の折る〳〵程實りぬ」と云へは

「宛から卿を待ちしに似たり」と母の語尾より戀人始て物云ひしが忽ちに心付てや耳熱して再び語を改めたり「去るにても此間の風にて三分一も落ちつらん」と云へり

我は心底に叫びたり渠が胸の音を早や聞きたれば梨子幾個落つとも遺憾なしと」

文の佳處を求めは却て此外に甚た多し然れとも其の人に在りては大抵自ら己が心地の邪逕に迷ふて敢て言ふ能はざる所を言ひ而かもアドケなく可憐なるは以て其の純白無垢なるを証すべし

目次

第一　歸思……一頁
第二　歸鄉……十七頁
第三　吾鄉……三十七頁
第四　吾家……五十頁
第五　鄉黨……六十一頁
第六　戀人……七十九頁
第七　山中……九十四頁
第八　追懷……百十九頁
第九　離別……百三十六頁

歸省

湖處子著

第一　歸思

少無適俗韻、性本愛丘山。
誤落塵網中、一去三十年、
羈鳥戀舊林、池魚思故淵。……陶淵明歸田園居

去年の秋吾最愛の父斯世を去りしより、月の十七日は我が爲に安息日の外なる聖日となれり。此日に於て我は事業を執る前に密室に籠り、楣間に掛かれる吾父の肖像に對して、多時の默思を經るを例とせり。此の二三年來は、過くる月日の偏へに急くと思はれしか、今は早や吾述懷に終身悲しかるへき秋立ち回り、淋しき一室も亦七月十七日となりぬ。我は定例の如く未明に起きて漱き、朝餉を了へて端座しけるに、楣間より瞰下す面影の、今日に限りて物言ふはかりに慈愛に觀えたり。徐ろに其頭の波線を算へ、薄

らきたる眉毛、萎みし眼、宛も開きなん其日を繼視しつゝ、六年以前長くは別れじと誓ひて上京の首途を取りし其一子を、未練なく旅立たせんとて、快飲祖道せし當時の容貌と、今は如何許變りてあるや。而も此寞しき容貌だに、最早世に見るなきことの、如何計無爲やを思ひし時に、無量の所思は哀歌に溢れぬ。

一　早や手の上のおもかげと、
父はなりけり、まのあたり。
繪には聲なし、ものいへど。
咽ぶはおのが涙なり。

二　顏によする年なみに、
うけしなやみも數へなむ。
豐けき頰に世のうきに、
堪へし力ぞ、もるらむ。

三　四年のうちに面影の、
世にうつろいて見ゆるかな。
首途おくりしその夕の、
笑顏にかへす術もかな。

四　我を泣かせんばかりなる。
顏にかくれし目のなみた。
今端に我を呼ばひたる、
聲もはかなき苦のした。

五　寫るは五十六の冬、
明くる秋にぞ消ゆるなる、
もろき命は草の露、
つらぬき留むる由やある。

六　魂よ百千世ほろばすは、
むかし汝が經し世のたびぢ。
あゆむ汝が子にねかはくは、
つげよ棘みち花のみち。

我は屢之を聞きぬ、親の憂の十分の一を子に有たしめは、彼能く孝子と稱せられんと。我が父に乞ひし暇は唯三年なりしかとも、我は六年の間三度歸省の豫約ばかりして一度も歸省せざりし。父母は唯だ其病を之れ憂ふと云ふなるに。時には吾病を告げつゝも、其の慰藉には唯癒へたる後の寫眞を贈りしのみなりき。或は來書の短きを父に咎めて、吾音信の少なるに注意せざりき。嗚呼父よ、老ては生命を子に懸ぬるを、我は如何なれは無心に過ぎし。我は慚悔す、吾父の晩からざる逝去は、半は吾不孝によれることを。

是は唯近頃の事なるのみ、我は生れて乳母の家に養はれ、五歲にして吾家に歸り、八歲の暮祖母の逝くまで其膝に生ひ、十四にして鄕塾に宿し、十六にして福岡中學にあ

り、十九にして自から好みて母の郷なる山村に入り、幾程もなく首府に來れり。斯く我は家にありて父を識ると他の諸子に劣れるも、父の吾を容れたるは「家關白」なる吾渾名により、今猶は紀念に覺えられたり。廿五年の吾生活は父の爲に豐かなりしも、父は生前一日も我が爲に安からざりし。猶は且つ父老て其病に侍らず、死父して其喪に走らざりしなり。今は唯父母の洪恩を知ると空しく他人に過くへきとと。喪の日に濺きし涙の兄弟に劣らざりしことのみ、せめてもの我が心遣りなりき。去れど是皆空にして、我か父の恩を知るは父の死後にありしなり。唯願くは悔恨の犧牲となりて、世間我ならざる人の戒とならんのみ。去れど若し亡き父の爲に何か務むる事もやと、亦折々は空頼みき。

此時童子は來りて去り、一封の書を机上に殘しぬ。是は吾家兄よりの音信にして、最初には兩地の氣候を叙し、次に相互の無事を祝し、最後に父の墓誌の執筆を頼み、子細なる墓碑の圖形を添へ、其規摸と結搆とを示したり。我は幾度か其信書を反復し、別けて其墓誌の文字と圖形を沈思しつゝ、嘗て根に歸らさりし蔓も、猶は他の野に於

て實を結ぶべき例もありと喜びつゝ、是そ吾父に務むる最初の奉仕にして最後の奉仕なりけるとて、久しく絶ちたる臨池をぞ新ためぬ。

早や日の熱の燬初むる頃、童子は再び來りて告げぬ、門に子を負ひし婦人あり、主の同郷の人とて面會を求めたりと。我は其人を許したるに童子又來り告ぐ、彼は餘所に要事あり主の門前を過くる序なれば、一面を經れば足れりと云ふと。我出て會ひぬ。去れど我此婦人を全く他人と思ひき。渠は曰へり、妾は筑前咸宜村の人と。筑前咸宜としきやと思ひ、倩々其人を觀たるも思ひ出ることなかりき。彼は今年齡三十に近くして絲髪久しく櫛らず、形容も太と寂寞なりき。其被服は年を經て薄らき、帶は僻ある儘に皺に縮み、滴る顏の汗拭きし手巾も、舊色の尋ねがたなく色さめたりき。憐の母よ、誰か娘にして又た誰が妻なるや、さても渠が負ひける子は、渠には如何許掌の珠あるべきも、愛子と察せらるゝ程不便のものと思はれたり。細りし骨身は渠を幼く觀えしむるも、渠は早四歳以上なるべく、其顏は菜色の爲に萎みたるも、嬰子とは見ゑざり

しなり。其痩せ細さは生れて乳無かりし故か、其栄色は母に營養の足らざる故か、兎にも角にも、太と愛たかるべき此年に、太と寞しく育ちて見えたり。然して此母は果して吾故郷の誰なるや。圖らざりき「伊昔紅顔美少年」ありし、吾隣村舊家の愛嬢ならんとは、渠が名のるに由りて知られぬ。實に幼かりし頃は、二三度嬉戯の友たる事もありしが、年長けては唯渠が牆を攢りて走りしとと、其家も一旦の災禍に零落せしことを聞きたるのみ。是も亦久しく心底に沈まり、漸く其人を見て遐懐るほど疎くなりぬ。此首府に於ては歴々たる人物すらも、動もすれば道路に窮せんとするものを、況して天涯より迷落して此土に在り、良人の掌妻子に足らず、助くべき故郷もあらずは、斯く落魄したるも理なり。背なる子は見知らぬ我を恐れて泣出てんとしたり。若し吾手より渠に得せしむる一個の梨子なかりせば、渠は定めて叫び出でしならん。惠みを謝する渠が顔は、昔愛たかりける娘に似ずして、今零落したる其母に似たるこそ、母にも歎きの種ならめ。母は今其出京前の履歴を短く、出京後の日記を長く、猶ほ現時の非運を涙と共に語り盡しぬ。然り渠が口から申さずとも、此の熱き日に車にも乗らず

此處まで來りし其難澁、餘所の要事を口に藉りて、吾門に時を移す其心中、賤しく變る母の顔、物乞ひ氣なる子の目許、さては親子の運命も、今吾一言に懸りてあるかと思はれければ、我は其日の許す限り吾力を與へしかば、渠は感謝の涙を殘して歸りぬ。我は再ひ默思に沈み他の暗愁に襲はれぬ。我既に父の死を知れり。然れとも其喪に會はさりし故に、晝の幻影夜半の夢、但しは端なき思出に、父は猶ほ地上にありと思はれ、此日に來る墓誌の依頼、此日に來る救助の請願の如き、親族の常に爲すべき務めの生ずる毎に、我は往々にして想へらく、父の靈まだ世を去らず空中猶ほ亡魂ありて、暗裡に我に指示するなりと。今や其墓——此世に於ける父の遺筐——他界に於る父の名刺——なる墓の新に建てらるゝとを聞くは、宛も其第二の死を聞く如く、最早父に縁る音信の、此世に絶ゆへき思ひに堪えず、宛然鬼界ヶ島に歸洛の舟を送る僧都の如く、歸思湧くばかりに動きたり。歸思一たび定まれば、坐ろに今昔の感に沈みぬ。

「昔我往矣、楊柳依々、今我歸矣、雨雪霏々」。幼なき時此詩を讀む毎に謂へらく、遊子春出でゝ冬歸る、宜しく斯の如くなるべしと。既にして韓退之の楊子が歸省を送る序

を讀み、「楊侯始冠舉於其鄉、歌鹿鳴而來也。今之歸、指其樹曰、某樹吾先人之所種也。某水某丘、吾童子時所釣遊也。鄉人莫不加敬戒、子孫以楊侯不去其鄉爲法。」といふに至りて謂へらく、我も亦楊子の如くして故鄉を出で、楊子の如くして故歸に鄉るべしと、霞棲ひく春半なる故鄉の首途に、我左の如く歌ひて立ちぬ。

一　さてもめでたき一さかひ。
いかに月日ののどかなる。
小川に媼は衣あらひ、
野邊に翁は秣かる。

二　圍む高峰はまへうしろ、
流るゝ水もみぎひだり、
浮世へたてし村のいろ、
今も昔の世に似たり。

三　竹の林に風ふけば、
絃なき琴の音もひゞき。
森の小枝に春來れば、
壽くにまさる花にしき。

四　百代傳ふる此里に、
安く老いぬる親ふたり。
此處にぞ幸はあるべきに、
われは都にのぼるなり。

五　首途ゆかしき春げしき、
にほふ櫻や桃のはな。
わが行く方にかぐはしき。
馨は今日のなごりかな。

六　駒のあゆみのなどをそき、
すゝめ。」と鞭をあぐれども。
橋の柳に風そよぎ、
枝にひかるゝ旅ごろも。

七　遙に村を過ぐれとも、
わが父母はまだ去らじ。
斯て旅なれぬ孤身を以て、河を渡り、山を踰え、行くと一日程にして大海に出でたり。
我は波に漂ふ浮萍の如く、船に數日の命を寄せて、鳥飛び斷たる玄界灘に乘り、三十

八　見ゆる形は消ゆれども、
親は立つらむ猶ほしばし。
今一度とふりむけば、
うつゝに消ぬむばかりなる。
我ふるさとの面影は、
かすみの根にぞ沈むなる。

九　このうるはしき天地に、
父よ安かれ母も待て、
學びの業の成る時に、
錦かざりて歸るまで。

六灘の門戸なる一目千帆の馬關を過ぎ、平家の沈みし壇浦の烟波を弔ひ、四國の陸地を故郷の如くに慕ひ、淡路島の山影を影見えぬまで回顧して、神戸に上り、神戸より下り、紀州灘を經て、遠州灘を過ぎ、名にのみ聞きし、富士の高峰を、天の原に仰ぎつゝ首府にぞ入りぬ。

波上に浮ぶ間、我は宛がら大海の一粟にして、首府に來れば濱の砂子の一粒なりき。去れば我最初の一月間は熱鬧なる神田の一隅に、遑々たる行人、雜々たる巷街の聲、炎々たる烟塵の中に蒸されて、茫然として立迷ひしなり。既にして首府の郊下戸塚村の閑居に來り、時候の既に晩きにも拘はらず、猶は落花啼鳥の時に遇ふとを得て、始めて我に歸りし時、阿部仲麿が三笠山の月を詠せし客土の遊魏、加藤肥州がオランカイに遠山を認むる故郷の幻影、活如として情相照しぬ。

蓋し人烟蕭條たる此里は、所謂ゆる舊時の武藏野なり、我來りて此地理を察せしに、其小高き丘岡、疎遠なる村落低迷せる林樹、水の流るゝ、橋の臥する、野圃の闢けて遙かに舒びたる、如何許吾故郷の景色ありしよ、讀書に倦みたる日の夕、寓居の後の橋より眺めつゝ、吾記臆と相照せば、晩雲岫に歸れる丘は、家兄と共に樵りし山路、青草烟を蒸しぬる邊は、弟妹と蓮華草を摘みし野原、楊柳水を繞れる塘は、我が釣遊びたる翡翠の磯、其渡頭には父船を繫ぎ、此岸邊には母衣を洗ひぬ。父母は今見るべからされど、父母の朝夕せし處を見るは、宛然父母を見るなりき。

既にして漸く首府の習慣に嫺れ、初には京語を語り、次には京衣を着け、次には京情を解くに及び、或は顏色を修めて兒女の憐を求め、或は擧止を軟けて父老の好意を博せんとせり。蓋し上京以來未だ京人たるべき修業ほど、記臆に耻づべき時期はなかりき。嚮に我之を懺悔して曰く、

「今年の春花滿城の折からに、我は宛も故郷なる小文を書きつゝ、故郷の追念に耽りて居しが、不圖新聞紙上に見えたる花信を讀みて、自から過去の春遊を思出でゝ一驚しぬ、愚にも我は是迄唯雜蹈と醉狂とに苦みしなり。俗物の中に雜りて詩なき歌なき畫なき行樂を爲せしなり。憐れなる櫻の花は、花見とて來りし人の、唯花見る人を見つゝ過ぎ往く間に、塵に吹かれ酒氣に蒸され無頼着に眺められて、咲きて空しく落ち

しなり。首府の花見は、帽子の花見、棒杖の花見、白粉の花見、德利、瓢簞、野郎の花見にてありしなり。我は痛く此の惡しき記憶に咎められて此の春を疎々しく過ぎぬ」、と。

既にして三年の學期了る頃吾思相は再變したり。前年の夏暑を避けて東海道を過ぎ、小田原の舊影有耶無耶の間を過ぎ、人間の榮枯を嘆し、海に沿ふて石橋山なる源平戰場の地を尋ね、猶ほ行て熱海に遊び、白雲、青山、蒼灣、烟波の間に放浪して、漸く物外に脫するの心ありき。當年の夏日光に遊び、天の成せる自然の美、男體山の高くして晴朗なる、中禪寺湖の遠くして空明なる、華嚴瀑布の雄宕なる、裏見、霧降諸瀑布の幽絕なる、大谷川を清くして綠澤ある、殆んと凡骨を仙化せしむる間に彷徨し、轉た山中を愛するの念に擊たれぬ。我は歸りて再び去り、下總の野に遁れしが、家は寺院に隣りければ、看經の聲、木魚の音、青墓の觀、寂寞の意、落花啼鳥亦忽焉として人世の無常を感じき。

是は吾生活中最も涙多き日の一にして、唯默思と暗涙のみ日毎の糧にてありしなり。

當時の自記する所を觀るに曰く、

「春霞朝に立ちて夕に消へ、氷は夜半に結んで日中に融け、雪は昨日積て今日解くれは迹もなし。花は朔日に咲き、十五日にて萎み、二十日に散り、三十日にして青葉と代る。三ヶ月の春十二月の一年、宛も蜉蝣の須臾なるに髣髴たるぞ、實に人世の無常の樣なる。神の人モーセは曰く、渠等は一夜の夢の如く、朝に生出づる青草の如し、朝に生出で、夕には苅れて枯るなりと。預言者イザヤは曰く人は皆卿、其榮華は凡て野の花の如し、草は枯れ花は萎むと、使徒ヤコブは曰く、汝等の生命は何ぞ、暫く顯れて忽ち消ゆる露なりと。親鸞上人の歌に曰く、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは。小野小町も亦歎きぬ、花の色は移りにけりないたづらに、我身世にふるなかめせしまに、伊勢物語にも又行水と、過る齡と、散る花と、孰れ待てて言を聞かましと詠して、世の無常を嘲てるなり。誰か人生を長しと云ふ、誰か百歲を遲々たりと云ふ。我が鼓膜さへ死出の旅路に噪せるものを」と。

是等の事の終は何ぞ、其年の秋隱氣なる或日の暮に、父の訃音と寫眞は故鄕の兄より

來り、我は絲絶へたる紙鳶の如く、天涯逆魂の孤兒となりぬ。猶ほ此地にすら根蔕絶へ、暗黑なる前途の闇に涙を揮ひて首府に歸りしは、去年の冬の晩なりしか、神我を棄つるとなく、吾所備へあり、吾筆の產物を嘉する耳目を與へしは、如何許吾幸なりしよ。斯くて吾枯骨は肉着き、忘念は漸く失せ、苦想憂愁消滅し、生活の道漸く開くるに及んで、故鄉の幻影汕然として復活し來れり。今春四月誘ふ友ありて一日の郊遊をなし、小金井堤の櫻より、國分寺の舊跡を訪ひ、有名ある多摩川を過きて、武藏の勝地百草園なる崇邱に上り、且俯し且仰ぎ、四十里四方に布き延ばされし、村落の形影、畑家の景色、平野、高原、森樹、江湖等、縱橫參差せる活地圖、別ても邱を繞れる蔬菜の黃花、豆麥の綠葉、運華草の紅原等、畫き成したる鄙の錦の活畫幅は、宛も故鄉の春の幻姿なるを見て、遂に又左の如く記しぬ。

「夫れヴエストファリヤの城郭をは逐れしカンジッドは、畢生ヴェストファリヤの城郭を追懷し、アムハラの離宮より山を出てゝ幸福なる生活を尋ね歩きしラセラスも、得る所なくしてアムハラの離宮に歸りたるを思はゞ、故鄉の快樂を幾度說くも、我は自から

咎めざるなり。我が所謂ゆる故鄉には、村落の連觀を含めるなり。故鄉には我慰藉を思ひ、村落には我平和を期せり。慈愛、友誼、恩惠、親切、歡情等、人間の美德と稱するものは、村落の外何處に求むる。帝堯の前に擊壤を歌ひし父老よ。帝堯の天下を辭みし許由よ。我は爾に與するなり。博士ジョンソンも亦曰へり、「朝廷は內國の軋轢に騷き、使臣は內國にありて論ずる時にも、鍛冶匠は其鐵砧を敲き、農夫は其田畑を耕き、生活需用の品は求むれば玆に得られ、四季順次の職業は、常例循環して止まざるなり」と。此安穩の生活は、村落の外何處に求むる。斯る世界に其身を終ふるものは。兄弟も、姉妹も、夫婦も、朋友も、共に生れて共に育ち、老ゆるも死ぬも相共なり。敵少く味方少おく。嫉妬少く憤怒少く。唯是一村無邪氣の民なり。我は今斯樂園より出て迷へり。是は生涯迷ふの迷ひなる乎、抑も復ちん爲の迷なる乎。我か嚮に他鄉に得たる故鄉の快樂と、今又他鄉に得たる故鄉の景色は我か立出でし樂園の果敢なき筐乎。但し又立還るべき樂園の美はしき前影なる乎是ぞ未來疑問なりける」。と

我が六年の間故鄉に別れし吾經歷は斯の如し。今や故鄉の變遷は如何。家も亦小き玉

國なり、王者の代謝が王國の事情を一變するか如く、主人の更迭は一家に於て非常の變更を來さゝるを得ぞ。今吾母は寡婦となり、吾兄は小王國の皇帝、嫂は女王となり、二弟二妹は相顧みて孤兒となれり。吾兄は畢生鄉黨に於ける慈善家。家族に於ける仁君なるべし。去りながら能く其妻の悍き氣焰を和らげ得るや。吾長弟は既に家を分ちて主人たるの日近づけるが、渠を睥むる眥はなきや、長妹の年頃なるべき柔和の目に、折々上ぼる暗涙はなきや。思ふに幼妹は漸く女兒の齡に上ぼる頃、幼弟は今猶ほ母なき能はざる童兒なれは、恙なく成長せしと思ふのみ、今果して如何にあるや。一家の柁なる嫂は父の生前能く柔和なりしが、渠を墓塲に置きたる後、心質に變化はなきや。我が在りし時彼には唯慧き一幼女あるのみなりしが、其後は幾度の誕生をか經つる。彼の子宮を假り來れる吾王國の繼嗣は抑も如何なる寧馨兒ぞ。時代異れる吾家に對する鄉黨の感情も亦如何に、吾家を繞る村落の變遷は如何に、吾家に屬する花園の消長、田野の張縮、婢僕の多寡果して如何、凡ての故鄉に關せる如何の一語は、多樣の音色、汎種の形影に旋轉して、遂に其夜の夢にも入りぬ。

第二　歸鄉

舟搖々以輕颺、風飄々而吹衣。
問征夫以前路、恨晨光之熹微。
乃瞻衡宇、載欣載奔、
僮僕歡迎、稚子候門。……陶淵明歸去來辭

我が歸省の旨を故鄉に報せしより、早や多少の時間を經たれは、今は三週間の往復を期して、八月三日より旅立つ事となりぬ。我は遠かに其日を待ちし際に、遽然として筑後川洪水の電信走り、熊本地震の急報馳せ、首府の人行車馬一際物騷しく聞え、別て吾鄉は洪水に近くして震脈に當りたれば、心坐ろに安からで、故なき起居に忙はしかりき。若し故鄉無事の報道來らざりしならば、我は恐らく幸福の歸省を得ざりしならん。さても首途の日となれり。上京以來始めて歸省すればとて、我より暇を告げしのみ、祖道する友もなく、宛も錦を衣て夜歸るが如く、徘徊顧望して孤影を憐み、瀛車に乘りて首府を出でぬ。

此頃はいと續きたる晴日ありき。此日の正午我は瀛船に横濱に乘り、淡墨富士を天邊に見、海球の落日を相摸灘に送り、波上の晴月を遠州灘に迎へ、煙江の中に夜半の明笛を吹き渡り、遠州灘に眠りて紀州灘に覺め、諸曼東號の覆跡を弔ひ、飄然として神戸に着きたり。是時までは唯尋常一樣なりし旅情も、此の夕博多行の船に乘り、僅かに方角を替へてより、兵庫の巷焔、和田岬の燈明、一ノ谷の明滅したる夜影、隱約なる須磨の煙波を眺めては、轉た懷舊弔古の詩情を起し、明石、舞子、高砂等の名所を遠望して幾多の巧畫圖、此淡月の光の奥に隱れあるを思ひては、亦探勝漫遊の心腸を扇き、西海の波脈々として九州に向ひ、北斗の一星遙かに光芒を船首に指すを見ては、正に望鄕想の高潮に上りたりき。船は今播磨灘を過ぎ、翌朝讃州の多度津に着き、復去りて四國の山脚を摩せり。此は皆嚮に一面を經たる景色なるも、往くと返ると、昔と今と、我に變れる海とはなりぬ。周防灘の廣みに出で、半日馳せて馬關に着きたり。昔賴山陽が「天邊初見鎭西山」と吟せしは、定めて知る此邊にして、渠は此を以て遊跡の天涯に及べるを想ひしか、今は我此詩句を藉り來りて、故鄕の近きを喜ひしなり。

我は此處にて圖らず馬關より歸る故鄕の浪子、而も吾疎族なる一少年に遇へり。不時の邂逅なりければ、暫時は互に言なかりしか、我故鄕は浮世に離れし隱處にして、其村民は太古より生活の爲に漂泊するもの無きを逗思して、渠か馬關に來れる所以を怪みたり。我か此疑問をなせし時。渠は少しく顏色を落して見えしが、渠は唯云へり、面目なしと。渠は我に對し好みて故鄕の變遷及び我家の消長を、語り出でんと嘗みたるも、我は吾眼光を以て之を觀る迄は、他の先入を容るまじと決心して、渠が話頭を打消しつゝ、只管渠自身の日記を質問しければ、さては渠も包むに由なく、幾回か嗟嘆したる後、左の如く白狀したり。

一昨年の飢饉は痛くも吾故鄕の繁榮を奪ひぬ。旬日にして流離の生命數百に上り、乞食、兇徒、放火者の數著しく加はり、吾同年の友も多くは純紲の徒となりき。君在鄕の頃より萌芽しつゝありし養蠶事業の漸く永久の基礎を固めたるより、過半の村戸は茲に活路を求めたり。我は其以前より桑苗販賣を以て世を渡りしが。好運一時に開け來り、買へは騰り買へは騰り、食頃にして價値倍し、月を出ですして數百金の富を擧

けたり。猶ほ其規模を擴めんと、活路なきT壯を多く使ひしかば、我は村の恩人として呼ばれ、一時に尊敬を受くる身とはなりぬ。忽ちにして數多の競爭者起りて我が利益を分たんとし、桑苗販賣は他の事業を奪はずして到る處に利益を得、被雇者は子の如く來り、一村の少年は唯君が一家と菊屋の外は、皆此の業に沈みしなり。

是等の連中に先づ來れる變化は、衣裝、風俗、飲食の上にありき。一月の後村中には手巾の代りに鼻拭(はんけち)翻り、襤褸棄りて絹布輝き、笠は帽子に草鞋は皮靴に、田舍語は博多語に、泥痕は石鹼の香に代れり。幾くもなく美味に喝せし舌は、和酒と菜根を甘とせすして、ビール以上牛肉以上を貪り。世の中陽氣の歌は行(はや)り、絃鼓は彼等の坐に鳴り、田舍娘は競ふて手を渠等に投け、良家の諸嬢も亦往々にして心を暴富の奴、塗抹の美に與へ、犬吠馬行の墟巷は、看る看る浮華の都會とならんとせしなり。

悲しき哉消ゆる燈は一たび明かに、靡(たゞ)るゝ女は先づ花さくとは、吾等の行末なりしなり。渠等の所得の勞力に倍せし如く、其浪費も亦所得に倍したりしかば、頓て蠶の成熟せし頃は、宛ら暴風後の樹木の如く、以前に倍して貧しくなりき。獨り無謀の輩然るのみならず、遙かに先見あり鴻圖ありと思ひたる吾等さへ亦零落を免れで、百歳夢みぬ榮華の夢も、烟の如く消え果てぬ、君よ此世は確かに惡しく往くなり。

看よ吾等は地を拂ふ風より高き喬木の如く、一時の浪費と快樂を取らで、尙ほ其所有を十倍百倍せん爲に、一刻千金を得ることを云ふなる博多米商會所に名刺を出しぬ。會所の仲間等は頻りに吾等の足下に伏し、其言ふ所皆吾等に利にして、黃金の湧くこと其口沫の飛ぶ如くありければ、吾等は勝運を彼等に委ねて、他の田舍娘とは人種異なる、而も吾等の下流者の夢にも知らざる、狹斜巷の遊君を訪ひつゝ、豪奢强飲畢生を傾くる其刻々、凱旋の福音を待ちしなり。翌朝未明より夢覺めて田舍の乳臭兒にして百戰場を經過せし老都人と戰ふとの、太と淺ましきと悟りて、心底より靈慄し、吾友を呼びて謀る所あらんとせしも、時早や後れて、正午全敗の報知を得て、殆んど死せんと欲せしなり。別けて痛きしかりつるは、他の友等は然らざりしも、我は我財產の倍を賭けし故に、賠償の爲めに足を繫かれたれば、身を以て逃るゝことだに能はざりき、今は只鄕黨の慈悲に賴る外、牢獄を避くる能はざりしかば、我は强顏にも君が兄氏を初め、

我が知る限りの名前に宛て、哀を乞ひて救はれ、死人の如くして歸鄉せしなり。

村落は今我を棄て、冷笑と苦顏は吾耳目を潛りて往き、嚮きに我を恩人とせし父老も、其子弟放心の罪を我に歸したり。我猶ほ之に堪ゑたるも、我を憐れむ二三の友が、悔恨、慰藉、希望を以て訪ひ來る毎に、殆んと骨の解くべき苦痛を感じき。一月餘を經て、心瞻漸く回復せしを覺ゑければ、我は將來の生活を默思したるも、前途負債の餓鬼たるの明了なるのみ、他は皆暗黑の世界なりき。農業には我素養なく商業には我資本なし。桑苗販賣は父老既に愛憎を盡くし、吾身は浮萍の如くなれり。自ら謂へらく、如かず吾故鄉を去りて、到る所に根底を求めんには、人世百歲空中の樓閣豈に畫き難からんや、重負の借金豈に返す時なからん哉と、我は此決心を以て竊に我を棄てざる二三の友に告げ、彼等より他の債主に語らしめたるに、渠等は既に我より望む所なく、其去就を自由に任すべきことを許しければ、頓て最と親しき友に夜中別を叙て、馬關に來しは、一昨年の暮なりしなり。

當地に於て我は辛ふじて一個の銀主を看出て、種々渠か爲めに盡力し、漸く此處に立脚の地を得たり。さて半年許りを過ぬる裡に、主人の愛女に戀はれて、今は其家の養子となれり。然れ共此家の殖利法は、宛も地を這ふ蚯蚓の如く、風雲に龍驤せんと思ふ心に適せざれば、我は鬱々として日を送れる後、或機會によりて神戸の輸出商と相識り、遂に彼と特約して竹簾取次となり。大困却を以て三百金を養父に借り、大に竹簾を購求し、漸く其數に充て輸送せしに、彼は理由もなく否を唱へたり。我は一たび驚き、二たび悲しみ、三たび怒りて、唯今は其勸解中なるか、恐らく示談に付せらるべし。前夜故鄉の友は他の好き商法あるべきを報じて、我が歸省を促したれば、今日此船に乘る事となりぬ。思ふに彼勸解の結局に於て、多少養父に損失を歸すべし。固より我は長く養家に留まるの覺悟なければ、遠からず神戸を蹂躪して東京に踏み出づるの決心あり。君よ我若し都に上らば、多少の聲援を與へられんことを、今より豫め賴み置くなりと。

我は沈默して渠に聞き、慰藉を期する吾故鄉の既に荒破村たるを悲しみ、渠が流民たり自棄者たることを憐み、竊に渠が爲めに落涙せしが。最後の數言は殆んと我を震慄せし

めたり。我は渠が嘗て將棊と圍碁に、殆んど大人と對するの技量あるを見て、當時既に斯る賭博生活を踏むべき事を察したりしが、今や渠が氣焔は豫想の外に出でしなり。所謂渠が桑苗競爭者とは、渠が圍碁の友にして、皆彼より技量の劣りしものなり。我は將棊圍碁が。渠等の心を放ちしを斷言する能はざれども、其巧者は益其の道路を作り、劣者は一敗して眞正の活路に回りしを見たるなり。我は渠が今轉た絶望の途に向へるを嘆じ、且つ故郷に殘りて病める老父と、嫁し得ざる姉妹の、如何許渠が爲に憂苦し居るやを思ひて、坐ろに悲哀の念に堪へざりし。我亦竊かに渠が放心を復さんとて、渠の如き人物の經過すべき荆路を說きて、其道を回すべく勸めたり。然れども渠は唯答へり、辱なき君の忠告を謝す、然れども破れし膽は又た縫ふべからずと、我は又其父の起居如何を問ひしに、渠は左程に痛む色もなく、然り父の病も久しきものなるが、我は其を姉と妹の手に渡し置きたり。此度は急く旅あれど、一夜は父が側に寢食すべしと答へしのみ。

我は最早問ふと能はざりき、思ふに渠が良心の破綻は、吾針の力に餘りしなり、渠は反

哺の孝を知ると烏よりも勝りながら、遂に斯る語をなすものは、此語の外に詮術なく、其道の外に一活路もなければなるへし。然れども渠も猶ほ未だ人情を失はざればこそ、女性に愛せられしものならば、若し好運渠に回り來りて、渠を凡ての義務より解かんに日には、渠も舊路に還るべし。去れば我も亦渠に對する杞憂を棄てゝ、故郷の友として相語り。名に負ふ玄海灘の怒濤、船の動搖するにも拘らず、我は東京なる問題の下に、我か經過したる東京生活の物語りを以て彼の好奇心に響應しつゝ、我か向く方に落日を送り、日暮て博多港に着きたり。

今宵は吾歸旅第四夕の月夜にして、其の弦形は吾快心のごとく夜毎に盈ちて見えしなり。彼遙かなる海城を眺めは、宛から神戸の夜に似たるも、我は多年福岡、博多の間に流寓せし故に、遊跡も亦甚た多く、見ゆる凡ては舊知己の看をなしたりき。其正面に遠く横ふ寶滿山は、故郷と福岡との通路にして、我は屢其の丘谷を迂回したりき、明日も亦經ぬべくあるなり。其右に立つ油山、尙は其右なる愛宕山は、嘗て吾黨の放浪せし所、遙か左方の立花山は、小早川隆景の城趾にして、我屢此處に遠足し、東公園なる

函崎松原、西公園なる荒戸の小丘にも、我は日夕行吟したりし。波に走れる月影には、脈々たる水鱗も顯はれ、靜かに聞ゆる柔櫓には、軋々として解來りぬ。乘客三分の二は、此處にて下り、吐かるゝ如く艀に移れり。船子と乘客の會釋を聞けば、早久しく忘れし博多語なり。船は颯々として輕く擧り、風飄々として衣を吹く。歸去來ぬれば斯ばかりゆかしき波止場なるを、怨むらくは旬日の後、再び上京の船の漕がるべきことを、折角の歸省に今少し滯在の時間もがな。船岸に着きて客は思ひ思ひに四散しぬ。回顧すれば我が來し方は、渺茫たる煙波萬頃、天朗かに風涼しきぞ、正しく晴るゝ明日の天氣の豫報なりける。

吾等が着きし宿は我が好みに從ひ、上京の折に一夜を寄せたる其瀛船問屋なりき、此宿の主人は早や我を忘れ、僕婢等は幾度か新たまり、唯吾等の室のみ古びたる吾室にして、宮野なる吾小兄は、故郷より此處まで我を送り、今吾友とある如く、此室に寐しなり。想ひ起せは當時未た見ぬ東京に未來の空念と大望を懸け、我來り、我見、我勝つ爲めに往くものゝ如く、我生活を壽きつゝ、頓て吾妻なる疑問に來りし時、我は都に女王の如き婦人を吾前に跪かしめんとを期しければ、吾妹を取れと云ふ兄の語に冷たく答へて、唯其人の眼病の速に癒へんとを祈るのみと云ひ置きたり。今や天地一轉して、首府の獨居、春花秋月、折々懷かしく思出るものは、此の冷たく答へし少女の容貌なりしなり。今宵此懷舊の處に來り。故郷も亦明半日に到るべき時に當り、眠らぬ眼に樂しく見ゆるは、此冷たく答へし少女の容貌なりしなり。我は何氣なきが如く、吾友に宮野の妹の如何を問ひしに、渠は云へり、我は久しく故郷に在らねば、今其人の如何を知らねども、彼家にては只管君の歸省を待ちたるが如く、君の親戚及び吾父の意も、亦竊かに彼人を君に當てたるものゝ如しと。我は唯左右の間に語を置きて、方寸を藏したるも、渠が此機に乘じて語り出てたる、吾戀人と其家に關する長々しき冗談をも、喜び聞かざる能はざりき。

第五日の朝未明、吾等は北方故郷に車を駈せたり。十里の煙火、長亭短驛、白雲青山、平野長流、皆是れ舊時の觀を以て、我等を迎へて又送れり。

さて吾村まで唯一里なる甘木の村に着きし時、日は漸く正午なりき。吾情の急くほと

輪の旋は弛みて覺へぬ。吾友は云へり、突然たる君が歸省の驚かれんより、君は暫らく此處に午餉し、其暇に我は君が歸省の先客たらんと。我は此工夫の甚だ愚痴且つ無用なるを思ひたるも、渠は我に勝される故郷學者なりければ、我は曲けて渠に聽き、一茶店に休む間に渠は意の如く我を殘しぬ。

此處に費せし時刻は、宛も我生命の縮まるが如く、拾ひ數へて三十分を過きたり。斯て我は車に上れり。車夫は猶食後の吹煙を取れり、而る後芒鞋を代へ店主に辭して、而る後拭きたる後の顏を拭き、其手巾を頭に結び、而る後轅を取れり、輪は旋り初めぬ。帆扇骨の拳攣は一種の電氣の如く吾心に響き、花婿の室に入る花嫁の如く、血の環は太と忙はしく、胸はそゞろに熱病の脈の如く騷ぎたり。過去も未來も現在に合ひ、遠くも近くも目前に浮び、故郷に於る死者と生者、勁敵と舊友、危難と幸福等の追念及び豫定は一大連鎖の上に觀せられぬ。實に吾心は千萬事を思ひたるも一事をも覺えざりしなり。

ア、嬉し、今よ故郷は吾目に見えたり。車輪村の端に上ほりし時は、我思はずも車を飛ひ下りて其路卿に接吻したり。實や此處に我は故郷の我たりき。其一坏の土も我爲に尼丘。錫倫。ベッレヘムとも思はれて、是より相遇ふべき顏は皆な我と言語同じかりし故人なり。馨かしき地よ。床しき友よ。我は寧ろ錦を衣て夜歸らんも。敢て車上より故郷と故人に對するに忍ひざりき。吾願は東京の客にも都人にもあらで、故郷の我として歸省し、唯々年長けたる我として接待せられんとにありき。我は今始めて極樂に入るものゝごとく、唯滿悅と熱情と輕快なる恐怖、及び縮め得さる笑顏を抱きて往きつゝ、遙かに吾前路に立ち向ひたる、十人許の一群の中央なる大人より左右に開きて小兒なるを認めたり。我は何故と自ら問ひつゝ屢々回顧したるも、我より外に來る人も見えざりければ、我は早くも渠等を歡迎者なりと思ひたり。其群の加はるほどに、吾笑顏も亦滿ちたり。尙ほ近く歩む程に、渠等は我方を諦視しつゝ、忽ち一大喝采を揚げ、我も亦自から忘れて飛び立ちたり。渠等は今互に私語し初め、前後に動き、忽ち又喝采を揚げたり。此時我は渠等の視線少しく我に反げしを認めぬ。果せる哉路傍の圃に取亂したる馬蹄の音聞へ、馬上の影も見えたり。然り渠等の諦視も喝采も、私

語も回顧も、我か爲ならで、農僮午餉後の競馬にありしなり。去れども我は失望する所おかりき。我は聞きぬ。アメリカ探鑿の船も、亦陸を見る迄は雲のみ見たりと。

村の門は太と快よく我を迎へぬ。其は路の兩端より老ひ立ちたる楡樹にして、茂れる枝は双方より我頭上に結ばりぬ。邊を青めし其綠色は、直下の樹陰の涼味を加へ、其眞上に當りて密樹の間より窺く日影は、宛も散れる落葉の如く、片々地上に黄布しつつ、唯遮り浮べる塵のみ其射線を顯したり。其根は擴がりて章魚の足の如く、而も上なる枝より大なるものありき。其盤根は昔より村兒の椅子、老人の曲彔、旅客の休床なりしか爲め、孰れも皮なくなりて老ひしか、今も尙ほ變るとあらす。思ひ回せば、吾父も朝夕是に佇み、歸る其子を待ちたりしならん。嗚呼天は吾父を速めたり。然らすんば我を後れしめたり。然れ共天は猶我に此天然の凱旋門を殘し、我をして滿腔の意氣を以て此處を過きしめたり。

抑も吾村に於ける暑期の日中は。宛から中夜の靜肅なるが如きものなりき。直射する日影は蔭を容れす、風は樹間に死して枝葉裝み、蟬は其音を休み、堰苑の聲は止み、吾村民なる農夫は午餉の後假睡に沈むことなるか、今日も亦其一日なりき。然れとも此時偶々外出せんとして、端なくも我を見、顏色變へて挨拶するあり。遽に潛み隱るゝあり、我を目迎ひて目送るもの、我を忘れて頻りに追念して見ゆるものもありしなり。門より五十歩街の曲處に當る酒店に、見よ吾舊友たる農夫、職工、猶ほ馬丁すらも、皆洗濯衣を裝ひつゝ、先に歸りし吾友と共に吾前に喝采を擧けたり。我は凱旋歌に浮かされて、一巨人の如く濶歩しつゝ舊友に接したり。渠等は宛も後るれば罪あるものゝ如く、一個一個に强ひ違へたる挨拶を以て。前後より吾答禮を圍みしなり。我は此多數の衛星に從はれて吾家に入りぬ。戸前には居合せたる家族近處の老幼も立列ひて吾を迎へ、吾最愛なる母すら、堂を下りて相待ちしなり。我は先づ吾母の前に跪きつゝ、

「母上よ只今」とて、目を拭き顏を揚けたる時、母の笑顏にも涙ありき。母は猶ほ瞬きつつ、「ヲ、卿か歸りの遲ければ、如何にやと案して居りし」と云ひし其の顏も聲も、早や太と老いて見えぬ。ア、我は殆んど晝夜兼程してこの上もなき急旅と思ひたるも猶

慈母の胸の急さに後れぬ、悔ゆらくは、斯ばかり我を喜び遲つ母のあるに、何故久しく皈省せざりし乎、何故屢々歸省せざりし乎。

吾母は他の涙を以て言へり、「卿は今見識らぬ程に痩せたり。東京とは斯ばかり苦しき所なるか」、「決して左樣に候はず」と、我が膨れし胸に斯く答へしのみ、後は言葉もなかりしなり。一同は玄關より奥に入りて座に直れり。見れば平常夢みし鄕黨よりも、忘れ居りし故人こそ多かりけれ。

「兄上よ漸く只今歸參致しぬ」。

「ヲヽ善く歸りし。日中の旅、疲れてあるべし、先づ何をも後に回して休息すべし」と。

神に謝す、此慈愛なる吾兄を見るは、猶ほ吾父を見るが如くなり。實に此人あればこそ、我も吾家に心安かれ、

「兄嫂よ如何許御世話を懸けぬ」

「否何事も行屈かぬ儘。卿こそ彼處にありて何角不自由に在せしならん」。

「弟よ久し振にて」

健くは歸られしよ、何時も歸省の手紙のみなれば、今回も亦手紙ばかりと思ひしに」。

「平助よ今年も吾家の爲に骨折らるゝや」。

「老いて役には立たねども、賴むは兄君の情なり。郎君に別れて早や五年——然り今年は早や六年目。思へば眠る一夜の如し」。

此時兩妹は吾浴湯を取り、今吾前に低頭して辭を揃へ、

「兄上歸りましたな」と、挨拶したり。過ぎゆくものは、月日ぞとは、兩妹の顏を見て知れぬ。長妹は今好き花嫁の頃となり、少妹も早や乙女の數に上ぼりしなり。

我は今吾幼弟が他の室より耻かし氣に我を眺めつゝ、又吾眼線を避くるを認めたり。

嚮は吾家に入りし時、吾後に從ひたる多くの童子ありしが、今其三個は吾母の膝に纏はるを見て、吾家の孫兒なるを知り、且つ其幼弟が隱れし室にも、他の稚兒あるを認めし時に。我は驚きて吾兄の果實に富めるを祝ひたり。農家豊年の收穫は堂上にも登るものにや。祖母の傍に坐しつゝ終始優しく笑みける長姪を。我は殆んど忘れてありし。其懷に抱かれて汁なき乳房を含みつゝ、時々我を眺むる幼姪は、始めて我に顏見

するものにて、其餘れる膝に顏を伏しつゝ寄り纏ひしは、吾首途の時に胎内にある吾家未來の幼主人なりき。吾母は頻りに笑みて渠を搖り起せり。

「起きよ起きよ、起きて見よ、兒は毎日東京の叔父……と待ちしならずや、起きよ、東京の叔父歸りぬ。イザ起きて善く來ませしと挨拶せよ、イザ、イザ……」

渠は唯嘻々と笑聲を發しつゝ益固く祖母の膝を抱きて頭振れり、我はその頑是なきを愛で、取あへず馬關にて求めし頭大の夏密柑を取り出で、優しく渠を呼びたるに、渠は漸くに起きて之を受け、再び感謝の頭を疊に付けて得も揚げず、猶ほ嘻々と叫びたる其素振の愛らしかりしとよ。

斯て幼妹は湯の冷へぬ間に浴すべきを告げ、我は直ちに立ち出でぬ。此の間に吾歸省の新聞は流布せられ、吾家に誘ひ來る足音と、呵々たる口上は、掌に取る如く浴室に聞ゑたり。我が忘れ盡せし鄕語は、今や耳新しき天上の音樂に似て、故舊の知音は天使の言葉の如くなりき。我は雜出する挨拶にて、先づ其人を想定せしなり。更衣の室より偷視すれば、早や來客は玄關に充てり。評判の落語家も、隱れなき茶飲者も、今一休と稱する頓智家も、市場の關取も、武骨なる無藝者も、我が入來に改まるたけ容を改め、最も嚴格なる訛音を以て、鄕重に祝辭を叙へたり、打ち解けたる吾語尾によりて、先づ落語家、頓智家は一語一語に眞相を呈し、茶飲家は時々甕罐の吹く厨の方に向ひ、關取と無藝者は我等の會話の句讀として、渠等が交際の唯一の秘訣なる、頓笑を投げつつ、樂曲中の太鼓若くは拍子木の如く調子合せぬ。此等の來賓が新陳代謝する間に、吾村の聖彼得寺院なる淸岩寺の、絕へて久しき入相の鐘聞えたり。

應接の間、吾母の視線は始終吾顏に向き、我が顰むときに顰み、我が笑ふ時に笑ひつつ。凡ての聽者の裡、吾母は最も忠實なる聽者なりき。母は我が疲勞を想ひ、小休みなき訪問より我を救はんとて、晩餐後直ちに設けある臥床を告げたり。動くは命の我か爲には、車上の半日と坐上の半日は、痛く我が生氣を弛めければ、明朝こそと思へる宅後の散步を、一時も猶豫する能はざりき。今宵は陰曆の十三夜、早や望月近き頃なれば、夕刻よりの一輪は、三竿まで立ち昇り、微茫たる靑野に燈れぬ。此淡遠なる景色に對しては、嚮に海上の月夜に笛吹き過ぎし遠州灘の、髣髴たる活畫を追懷せざる能

はざりき。既に又家に歸り、此靜着なる臥戸に入りて、我は熟々獨語したり。「首府に醒めて孤村に眠る、吾身は如何に螢に似たる。三百の路五日に歸る。吾旅如何に飛鳥に似たる」と。又曰く「東京には磯の眞砂、故鄕には家の基礎、時の間に張る吾名こそ、宛から預言者ヨナの瓢」と。

第三　吾鄕

野外罕人事、窮巷寡輪奥、
白日掩柴扉、虛室絕塵想。
時復墟曲中、披草共來往、
相見無雜言、只道桑麻長。
桑麻日既長、我土日既廣、
常恐霜霰至、漂落同草莽。……陶淵明歸田園居

斯くて翌朝疾く起きて前夜の路に馳せ出づれば、弦月形に吾村を懷きし大佛、鬼城、片峯、小隈等、北の方たる一百峰、依然たる舊容は、猶ほ朝日の影の幕に眠り、曖々たる淸岩等は曉鐘を打ち初めたり。今は唯其太陽直下の巓にのみ、眼の華に似たる空焰殘りき。諸山の曉色に夜は明けて、一百峯は磨くが如く屛顏を顯し、炊烟深處に認むる山村、野水、縱橫したる曲處に見ゆる水郭、長堤、之を聯ぬる曉の露、平野に溢るゝ秋色は、滿眼故鄕の幻姿なりけり。

南の方に屏風張りたる屏風山は、他の支脈もあらず、他の支脈にもあらで、唯平野と天末の中間なる一幅の堆雲なり。其距離と眺望の適當なるとは、能く天氣の變化を山色に示し、凡て此小世界に空の革命ある毎に、先づ若干の異狀を其遠觀に視しぬ、されば渠は太古より此村の天氣豫報の名あり。今猶ほ村婦の爲に好晴雨計とし眺められぬ。渠は時に岩の如き玄雲を載せて近づく夕立を告げ、晴天にも一抹の暗粉を帶びて、後刻の雲りを豫言せり。秋の薄暮に夕紅を投ぐるか、若くは乾ける積翠、蒸されし紫嵐を浮むる時は、其明日は常に晴たり。若し其屏風の一方に異狀なくして、他の一方急に暗くなる時は、鳥は遠近の野に足蹈を速め、刈者は鎌を磨くの暇なく、結者は束を投げつゝ、各四散し去りし後に、油然として急雨降れり。今朝も亦前夜の闇全く去らざる峯頭に、其蒼白き曉色を以て、一日間の快晴を告げしなり。

曾て山を愛する唐人は詠せり、「相看兩不厭、只有敬亭山」と實に我が屏風山の友たる事も久しかりき。我は此茫々たる野色の暮に、陶淵明の徒の如く、「山氣日夕佳」なる時に、「悠然望南山」の客たりしは、一春秋にあらざりき、朝には渠我より先に興き、夜には渠

我より後に眠り、暗に吾怠容をも責めたり。

今秋の田は稻生ふる頃にして、見ゆる限りは青穗なりき。昇る日影に蒸されつゝ、一重の白烟、村南村北に立ち騰ぼれり。縱横したる畔路は、恰も交叉したる都衢の如く、迷室の螺線の道を爲したり。吾身を圍める壠畝は、今日猶ほ朝の世、露の國にして、未だ枯れやらぬ秋草の穗末、徑に傍へる青芋の葉心、及び茄子實の瑠璃底に垂るゝ天の靈液は、ニム天姫の涙の如く、美人の魂の如く光りつゝ、此二三日來吹初めける秋風に命を與へて、斷えたる樹珠の如く轉びぬ。風は吹きて止みぬ。去れど扇ぎ初めたる芋葉は、絶へず空を扇ぎて髣髴たる鳥の羽なり。

我は衣を褰げて野路を遶り、小き流の側に出てたり。田より田に入る小川なれば、今頃は濁れり、去れど其涓々たる水聲の淀まざるこそ、寧て清かりし兆にして、其の春流、秋流、塞流たる時如何に明き夕陽を留めしよ。兩岸の白楊は猶ほ散り殘れる枯葉を留めて風吹くごとに旅人を招けり。我は嘗て此處に行吟して曰く。

晚渡無人月滿陂、　　前村家遠待舟遲、

多情秋柳擬春柳、　野火殘烟捲翠絲。

我は猶ほ此流の或は廣く或は狹く、或は往き或は回る堤上を歩しつゝ、漸く日光の熱きを覺ゆる頃、前代の一里塚、現時の休息樹陰の石上に憩へり。

吾前に横たはれる白壁處々、茅屋斜々、斷郭稜々、其を綴る綠竹青樹南北長く亘れるものは、愛らしき吾故郷なり。村を圍める竹樹の垣より洩れ出て、日影の裡に參差たる四壁の素屋は、一言に林外と呼ばれて、村中最貧者の世界なり。村の兩端青色最も深く且つ廣く、寥々烟火を隔てるものは士族の舊城郭なり。維新世界の變潮は、何處の士族にも零落の波を打ちしか、我郷の如きは其甚しきものなりき。尤も渠等の二三は、我郷の一產業たる養蠶事業を起し、其村地圖五分の一を桑田に有ち、交際場の好地位を維持したるも、其十中八九は看る〳〵流潮に推し流されて、今は農戸に編まれぬ。去れば相傳の寶刀を賣りて、由來もなき鏃を買ひ、戰場敵を馘る勇氣を以て、徒らに秋の田の穂刈に施こすのみ。乘り馴したる駿馬は辛して田圃の役に堪えしも、彼等の學問は農曆に無用なりき、唯々渠等が轉業に於ける唯一の便利は、擊劍柔術の素養に由りて、躰軀の健康なるとにありしのみ。然れ共渠等が忍耐して稜角を殺ぎ、下等の小作人と伍し得たるは、世にある限りの幸福なりし。當時の詩人歌ふて曰く、「唯落ちしものとは見へす鹿の角」と。吾等が武士より農民に化せし迄、無量の涕淚と無念とありき。

蓋し吾郷に起りし士族と平民の沈昂は、我が曾て見たる最も興味ある記事なりき。實に渠等は士族と呼ばれて、悽く茂れる竹林の裡に平民より甄別せられ、其林下の道は日中にも、平民の子には一種の幽靈場なりき。其處に吹く所の風は、物怖ろしき腥氛と、陰に籠れる音を以て過客を襲へり。我猶ほ記憶す、幼き頃は我影を認めて虎嘯する獵犬と、鋭刀を拔きて追ひ來る武士の子を怖れて、絶叫せしと屢なりしを、吾家を訪ふ武士の横柄、吾父に對する電火の如き巨眼と刀室の暗光は、屢々吾等の快樂なる遊戯を壓へぬ、然れ共渠等が會津戰爭より歸りて顏色甚だ高く、首を斬ること艸を拂ふが如く、敵を追ふと兎を追ふが如き得意の物語を聞きし時に、我も亦何故に武家に生れざりしかを憾みしなり。

當時我は才童と呼ばれて肉食を嫌ひしより、吾家に高僧ありとは父の戯言なりしが、

其後父が、今は維新の時世とて、高位大官智慧を以て取るべきとを告げし時、心より恐れて曰へり、農家の子如何にして切腹を學ぶやと、既にして「之丞」「之進」の如き雄々しき名前は漸く減し、吾父も袴を着けて村廳に出で、我等も寺子屋より小學校に移りて袴を着くるに至れり、吾名刺と座席とは常に武士の子の上に掲けられし如く、吾尊敬も亦渠等に倍し、渠等も往々吾前に揖禮して書物の不審を齎したり。此時に當りて、我家の玄關には士族の頭漸く低く漸く圓く、嘗て長かりし刀も羽織も納まり、彼の恐ろしかりし目も軟らぎにき。渠等は前日其對手あらざりし吾母に向ひてすら、往々我が學校試驗の成績を賞するに至れり。我が父祖の書庫に絶えて認めざりし漢書を携へて村塾に通學したる頃は、其林下の徑も早や和らぎて、其住家の多くは空屋となり、竹林も亦往々拓かれて圃となり、獵夫は消え、武士の童は吾友となり、農家の童となりつゝ、見よ嘗て林中に驕りし武士も、今は林外に憐みを惹きぬ。

斯くて二十年前士族と平民の二級を以て組織せられし吾鄉も、今は全く農家の村となれり。我も亦福岡よりの歸省と上京の間の月日は農夫なりき。我は猶ほ記す、暑中に於ける粟草取、及び寒中に於ける芥子植の二事は、實に我が堪ゆる所に非ざりき。殊に後者は幾分か稼穡上の智識と熟練とを要するものなるか故に、我か如き學生農夫は、只積雪、沍寒、疲勞、及び他の婢僕の指笑に苦みたるのみにして、少しも事業に附與する所おかりき。勿論我も一日に千本の苗を扳き、又數百行の莖を植えたり、猶ほ犁取りて畦の土すら被せたり。然れども渠等は曰へり、我が扳きし苗は折れ且傷み、我植ゑたる莖は植しにあらず棄てしなり、我か被せたる土は散亂して菁菜の衣とならすと、我は又熱心に肥料を撒き、渠等より可なりの稱賛を博せんとせしも、渠等は唯我が不慣なる素振と、疲れて青さめし顏を談笑の種とせしのみなれば、以後我は唯童より少しく長け且貴き、命令せざる主人、服從せざる從者として、散歩と野餉と陶家の詩卷を樂しみつゝ日を過きたり。

今や生活の大迷宮、人世の中心なる都會に出て、歩み難き行路の難に陷り、吾才の我を活すに足らざるを悟り、吾勞力の空なるを嘆じ、飜然として前日の非を悔ひ、謂へらく、大望は臘腑に置かれし酒精の如く、飲むに從ひて心思を消す。功名富貴は波上の花に

似て、追ふに從ふて益々遁るゝ。歸り來りて故人に對すれば、吾煩惱も一時に絶えぬ。見よ渠等の眼は妄念の花に雲らず、其呼吸は都人の銅臭なく、其言語は名譽の氣息を吹かず、嫉妬も怨恨も其胸中を侵さず、渠等の皺は好笑の爲に嵩まり、其髮も雨雪の爲めにこそ白けれ。兒女の生育の外に憂苦なく、一杯の好酒の外に希望なきを。實に渠等は兒女を殘して斯世を去り、墓碣を得て斯世に殘る。其生活は安き一場の夢の如く、渠等の生命は平和の日と平和の夜との長連鎖なるを。

今又我は人巧少なる處に、轉た神意の顯はるゝことを認めぬ。希白流の詩人嘗て歌へり、

「天はヱホバの天なれど、地は人の子に與へ玉へり」と。夫れ人の子の裡、最も地より養ふものは農夫なり。渠等は其種を地に置き、其牛馬を地に曳き、其犁鋤を地に立てゝ、其の兩足を地に着けぬ、繩を絢ひ鎌を磨くは、其の最と微き業なれとも、渠等の事は曾て地より離るゝとなし。神の力地に住めり、渠等の爲す所は唯耕焉、種焉とあるのみ。渠等は耕して種き其以後を至上者に任じ、安堵して其成長と果熟とを待てり。頓てヱホバの息吹けば、朝は夕に代り、夜は晝に轉じ、春回り夏は來り、秋立ち冬も亦暮る、温風、熱氣、冷吹、寒息、順次にして更迭する間に、其果穀は三月にして生るあり、半年にして熟るあり、一年にして登るあり、亦各其時に從へり、斯くて渠等は唯刈りて粉し、其美產を炊きて食ふのみ、亦何の積不平かある。

神は水を岩中に出し、泉を溪間に流し、河を郊野に溢らしむ。野の獸は掬し空の鳥は飲み、江の魚、地の虫之れに養はるゝも、其水は灌漑の料に餘れり、青草は流水と潤氣を追ひて生へ、茅葦は河塘に戰ぎ、蘆荻は渚に蕃へ、浮萍は波間に遊へり。野の獸食ひ、空の鳥啄み、江の魚、地の虫之に養はるゝも、其草は牛馬の食に足れり。「吾惠汝に足れり」と、是れ實に神の語なり。

渠等は蜀江の錦おきを耻ぢざるか故に、神は所有ゆる美色を、野に陳ねて其目を饗せり。桃の花は眞紅に匂ひ、櫻の花は淡紅に咲けり、梅の花は淨白にして、李の花は幽白なり。圃に黃なるは菜種の花、紫なるは豆の花、流れに倚りて楊柳綠り、山の端には紅葉ぞ照りぬ。七艸は春秋兩度に野に裝ひ、春霞は連山を組織の蚊帳に變じ、秋氣は諸峰を密書の屏風に列へり。曉來に玉散る露珠は、宛も宵星天より落ち地に蘇る如く、遠林の

白雪は黄落の後の華に似たり。渠等は驪宮の音樂なきを耻ぢざるか故に、神は所有ゆる聲を以て其耳に飽かしめたり。雲井の雲雀は天上の福音を傳ふる天女の如く、囀り上りて囀り下れり、谷間の花に黄鸝歌ひ、山路の日暮には子規啼けり。軒を繞る雨滴は、時に絃歌よりも長夜の友となり。塒の鷄鳴は戰場の喇叭よりも寢覺の心地ぞ好き。風聲鶴唳皆此里の太平無事なる音調あり、且つや樵子は角笛を吹き、牧兒は牧笛を鳴す、昔より斯の如く、後亦今の如くならんのみ。

蓋し人間の手若し頼むべくんば、バベルの塔も天國に達せしなるべく、金字塔は永世其角を殺がざるべく、三世に亡びし王家も、萬世皇帝たりしなるべく、萬里の長城も老ざりしならん。君看すやエルサレムの光輝失せ、天竺の伽藍空しく殘り、聖彼帝堡起りてモスコー消へ、英國の花は米國に遁れて新まり、羅馬の法王は風後の果の如く孤懸せるを。又看すや南京は北京に移り、六波羅は鎌倉に、鎌倉は室町に、大坂に又江戸に、遂に西京より東京に移りたるを。其れ斯の如くにして、六年前に早や絶なんと眺めし素屋の、六年後に依然として立てるを見は、唯吾等の主のみ我を欺かざるを知る。其慈愛の語に曰く「又何故に衣のことを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして長かを思へ、勞せず紡がざるなり。我爾等に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝此花の一にしかざりき。神は今日野に在て、明日爐に投入らるゝ草をも、斯く裝はせ給へば、況て爾等をや、嗚呼信仰薄き者よ」と。實に花嫁の衣裳も野の花より摘まれ、生兒の產衣も圃の穗より購はれ、祖先の墓碣、孫兒の筆墨、乙女の化粧料も、此の單純なる生活に於て欠くべからざるもの、皆一頃の田より生して足らば、今生よりの極樂にして、亦何の不足に嘆つとかあらん。

去れば渠等は、國民としては最も無識の國民なれども、人間としては最も有道の人間なり。抑此里にある諺と云へば、「誠の道に幸歩く」「善樹は善果を結ぶ」「蒔かぬ種は生へぬ」云々唯是の如きのみ、渠等は此單語(最と低き套語)を、食物の如く日常の業に携へ、傘の如く凡ての版圖に廣げたり。學ばざれば忘れもせぬ、生ながらの性なれば、宛から無心の小兒の如く、喜ぶ時に笑ひ、悲しき時に泣き、他人の憂苦と快樂とに於て、自家の事故の如く落涙もし、歡喜もするなり、野歌の外に詩を識らざるも、渠等は

其身を自然の詩句とし、繪馬の外に繪を解せざるも、渠等の足は自然の壽圖を歩けるあり。又敢て世に求めざれども却て世よりは求らる、道を失ひし旅人、浮世を嘆つ世棄人、智識の駈場、名譽の戰場の落武者等が來りて安息を求むる毎に、渠等は常に士族を憐みたる其手を投けたり。君見ずや、天使を衣て惡魔を行ひし法王あり、凡ての智識を極めて一善なかりし哲學者ある此浮世に、眞神の前、彌陀の目に喜はるゝもの果して誰ぞや大なるものは果して誰ぞや、王位乎、智慧乎、金錢乎、名譽乎、空を拂ふ將軍の髯乎、唯吾等の主は曰く、「爾等謙りて此小子の如ならずば、天國に入るを得ず」と。

我は嘗て謂らく「老子の玄々を談せしは、遙に埃田の生活を夢みしなり。孔子が明教を說きしは、是れ涙の谷を和くるなり。涙の谷或は和くべきも、埃田には歸るべからず」と。然れども夫の淳樸なる風俗を以て、單簡なる生活を行ること吾鄉の如き村落は、實に帝鄉を去る遠からず、樂園の模型も尋ね難きにあらざるが如し。孔子若し起すべくんば、青むる所多かるべきも、老子歸り來るとあらば笑みなん。帝國憲法は發布せられぬ、然れども渠等は明年の代議院が、此の不如意の世界を如意の時世に變らしむることを想はざるなり。新町村制の爲に村長の競爭は激しかりき。然れ共無事の日多き此里に、彼等は長君の誰彼を問はざりしなり。外務大臣は諸外國と條約改正の談判を開き、各個の政黨は朝野に抗爭しつゝあるも、渠等は相變らず明日の天氣を卜へり。渠等は毎朝四散し去れども、如何なる夕も其家にあらざるとなく、牛馬も亦日に野を行くも、未だ嘗て此鄉を出でざるなり。天長けれども天老ひず、地久しけれども地は古びず。春花、夏雲、秋月、冬雪、百世も亦知るべきなり。斯かる平和の鄉の外、山靜如二太古一とは何れの國ぞ、如何なれば我此鄉を出でゝ、再び歸る能はざる乎。吾舟は如何なれば逆櫓ある乎。悲しき哉我既に智慧の果を食ひぬ。今は唯此鄉の、埃田ならで埃田に近きが如く、我も亦屢故鄉に遊ひて、幼なき我を追懷せんのみ。

第四　吾家

方宅十餘畝、　草屋八九間。
榆柳蔭後園。　桃李羅堂前。
犬吠深巷中、　鷄鳴桑樹巔。
戶底無塵雜、　虛室有餘閑。……陶淵明歸田園居

咸來なる墟巷の片側に、清岩寺の岩間より湧き來れる一條の清泉濺けり。是れ咸來の流とて吾地方に隱れなく、水が有てる過半の便利を村民に備へたり。朝には其澄める色吾等の顏を洗ひ、日中には其青き流巷を清め、風の時には巷に撒れて塵芥を捉へ、夕には米礪ぐ水となり、夜半の緩き音は百家の眠を促せり。猶且つ流を泉池に分ち、或は水車を推したる後、末流は田野に灌けり。故に巷の一方の家は皆橋を架て巷に通せるなり。」吾家も亦其側の一にして、橋より入り來れば右方には僕室厨房と脊を合せ、左には玄關と廣間と列なれり。前流と直角に折れて、化粧室、禮拜堂、客室の三間は列べり。客室に向ひて一畝の庭あり。挺々たる蘇鐵は以前に勝りて丈高く、放開したる櫛の葉は、垣の外に睥め出てぬ。臥龍の老梅は相變らず皮剝けながら青葉ありき。躑躅、木楊、眼より通るゝ青蘭は、依然として古色を帶び、苔を衣けたる大石と、角滑らかなる飛石は、今も尙一個も減ざりき。垣根の一隅より起れる喬松は、宛も此小園の君主の如く睥睨し、空の梯子の如く枝を蓋しつ、滿庭の綠蔭舊に仍りて凉しかりき、往に搆園の流行せし時、吾父も此庭を改めんとて園師を呼びたるに、渠は其假山、假谷の位地、石樹の布置の巧妙なるに驚きて、凡手の改むる所に非るとを告けたりしぞとよ。

客室と禮拜堂を聯ぬる廊下の側にも、太と狹き庭ありて池を穿てり。我は幼時日曜日毎に此水を更へて、廊下に來る吾父の滿足を得るを樂しき勞力となせしか、今は此散園に關する凡ての責任は、吾幼弟に移ると聞しも、早や其を樂む父はあらで、除掃も亦太と怠れると見えぬ。

厨房の外には前流より曳きたる小池あり、是い吾父の採蓮場なりしが、其水こそ澄みけれ、底は年經りて泥深かりき。然れ共此處を飾る凡ての秋花は、能く此一場を淸麗ならしめければ、我は前園の謹嚴なるに飽く毎に、此園の優しきを愛でしなり。嘗て竊

に謂へらく、秋の花は寺院の華麗若しくは愁婦の娟妍なるか如く、陰氣の色を以て勝れりと。合掌したる蓮華、低頭せる桔梗花、物思はしき牽牛花等、自から裝むに急くの觀あり。綠意了れる楊柳も、空枝を鳴らして、池邊の景色に寥味を添へたり。吾宅の直角なるに對し、穀倉、廐舍の位置も亦直角に立てり、其中間なる廣庭は農家の爲めに肝要なる打場なり。廐と穀倉を聯ぬる小扉を出れば、前には小き菜園ありて綠芋蕃り、横には肥料場ありて其瓦の軒には、大なる南瓜轉がり落ちたる雷の如く坐りぬ、凡て是等の背後を疊みつゝ、十畝許の竹林は戛然として風に鳴れり。林下の徑に柴門ありて、日暮れば烏雀歸れり、街の流の一支は、今も此盤根錯節を底として、竹樹の綠を過ぎ往けり。柴門の外青流の向ひは、我前日逍遙したる野なりけり。

吾家の系圖は十年前舊里正の一家が他に越せしより、我鄉に在て最舊家の一に數へられたり。然して前數代の名は系圖と墓碣に存するの外知る由なけれども、最近の祖の多くの女性を出せしことは明白なり。是等の諸母は適く所に所天を亡ひ、其子を連れて我家に大歸したりければ、稚心にも我は叔母の多さを力强さとに思ひ、近所の童子と家產の多寡を爭ふ時にも、他の點に於ては負ることあるとも、叔母の多さには例も勝ちたり。我は猶ほ記す、事の判斷に苦む時は智慧ある織部多の叔母に質し、母の顏を失ひたる時には、慈愛深き古毛の叔母に往き、秋の長夜には物語に富む秋月の叔母に侍し、散步の折には健足なる山下の叔母を伴ひたりしを。然して諸母の伴子も亦皆家庭に於ける吾友、戶外に於ける吾僕なりき、斯ばかり吾家を賑かにせし寄食者も、吾祖母の身後に再び散りて或は近所の鰥夫に嫁し、或は其子の反哺に食み、殘るは織部多の叔母のみなるも、是も亦他の緣家に月日を寓せたり。

嗚呼懷かしき吾祖母よ、兄弟多き中に挾まりて、吾母の手諸子の頭に足らざりし時に、我は祖母の懷に生ひしとよ。彼は我また死を知らざる時に死に、而も半日の病に死にたり。此時吾は古毛の叔母に祖母唯眠ると聞き、疑ふとなく信せし故に、其夕は他の幼友と共に調練の眞似して遊ひ、家に還りてか哭して食はさりし吾兄を笑ひて寐ぬしが、其次の日櫃に藏まる祖母を見るに及びて、頑是もなく泣慕ひしなり。祖母は今此世になし。其墓の樹十八度の木枯風を過ぎたり。渠に係る昔時の口碑も漸く消ゆきぬ。

然れども吾兄弟の裡祖母の容貌を繼ぎし者は、唯我一人なる由、諸母の語るを聞く毎に、祖母の恩吾顏に上る程厚かりしを追懷してやまず。諸母は傳へり我父も亦祖母の手に人となりしと、近所の父老も亦母の手より斯かる謹嚴家の出でしに服したり。吾父は一たび落ちたる祖先の世より、一代に富を擧げ、吾鄕に於る上流の地主、吾系閥の中興の君主、五男二女ある大家族の祖となりしなり。渠は此等の大業を遂げて疲れ、幸運なる世の變遷より博取すべき名譽、尊稱、特權、職業、凡て其子に讓りて老いたり。其妻なる吾母の苦勞も亦確かに父に讓らざりき。蓋し父は自家の勤勉を以て僮僕を率ひ、命令、指揮、意の如くならざれば自ら取り代るの風ありし故に、普通の僮僕は吾家に堪難かりしにも拘らず、一たび吾家に仕へしものは或は年を隔てゝ來り或は年を重ねて來る、今の老僕平助の如き、殆と仕へて二世に至れるものは他なし、母の恩情渠の心底に活きたればなり。諸子女の舊衣を改むる爲め、秋の夜深く衣を擣ち、一人の子たに春衣を欠かざらしめんとて、冬の晩には通夜に縫ひたり。渠が務は滋難なる交誼を調和し、疲勞せる僮僕を慰め、數多き兒子を生みて、其を不自由なく育つる事にありき。宜なる哉祖母の死後三年間の久病を成して、一たひ祖母の跡を追はんとせしと。

我が上には二人の兄あり、伯は今吾家の主人にして、叔は隣郡宮野村なる吾父の友に養はれたり、兄は其容貌より氣質より、全く母系に遺傳して父に反せり。渠は生れて善人にして、少なく學びて多くを知り、淺く言ひて深く思ひ、多く與へて少なく取れり、吾家に更迭したる此二代の氣風の相違は、喜ぶべくして憂ふべからず。昔し我が寓りし下總の家も、其父子の相違酷だ吾家に似てありき。史に曰はずや。趙衰如冬日、趙盾如夏日、冬日可愛、夏日可畏、と蓋し嚴寛若くは剛柔相配すると吾父と母の如く、若くは相繼ぐと吾父と兄の如きは、其家運長久の道なりとは、[illegible]我が久しき持論なりき。過嚴なる德川第一世に積まれし怨は、第二世の溫愛に由りて消され、傲れる高祖の後に、優しき文帝漢室を其民に近つけたり。一代に一家を起すもの、固より常經に由るべからざるものあらん。然れども天下既に興らば創業者と其主義は、守成者と其手段に代はらざるべからず、我が嘗て下總の家の配合を祝せし此理由は、亦以て吾家を祝する所以なりき。

少兄の人となりは亦一個の面目を開けるが如く、吾家の血性に其類あらず。渠は輕快にして愁氣なく、其の巧譎は能く他の憤氣を和らげ、兒啼を笑はしめ、陰沈なる老人をして、遂に心底よりの絶倒に落ちしむ、渠は其の言葉の明白なる如く、擧動も亦活潑なり。又常に他人ならば秘すべき空大なる計畫を、容易に語り出でゝ人を驚かせとも、未だ嘗て實行せしとあらず、曰く吾龍變すべきは養父の死後に在りと、渠が前途は豫知すべからず、然れども彼が其電火の尾端を顯しつゝ、猶ほ能く忍んで堅固なる養家の家風に遵ふを見れは、亦凡人には非ざるべし。

吾長弟の言行は、恰も外に見るざる秘密を操れるものゝ如く、踰ゆべからざる規矩を歩めり。渠は幾分か剛情の風あるも、亦極めて質樸に極めて易直なり。渠が好く他を批評し他に直言しつゝも、却て能く他より愛せらるゝものは、其心質の腹藏なくして其言語愛嬌あるに由れるなり。且つ渠は吾兄弟の裡に最も好顏の少年なれば、甚だ青女の心を得たるも、渠の行跡は甚だ白く、起臥の間亂緒を容れしめず。

吾家の光、兄弟の花として吾長妹は輝けり。渠は久しく女子を望める吾父母の渴望を充さん爲め、四男子の後に生れたれば、殆んど四兄の寵愛を一身に負ふほど一家の喜びに入り。近處も亦吾家に惠まれたる明珠の成長と幸運を祝福せしなり。吾家に恩を得んと欲する近處の妻女等の、如何許渠を吾父母に譽めしよ。渠は決して近代小說上の束髮の佳人、男性的の令孃に似ざるも、其優しき愛らしき縹致に於ては、我思ふ、新聞紙上の畫に勝れりと。渠の可憐質は愛嬌の媚るにあらで、貞淑の懷かしむるに在る如く、其顏にも靨よりも多く涙を藏めり。渠は今歲十九にして緣の糸疾く渠の身に纏はりたれとも、其父は猶ほ最良の緣を待ちつゝ、遂に其花嫁たるを見ずして逝きしは、無量の遺憾なりしなり。

今年十五なる少妹は、寧ろ其の姉に勝れる美術上の模型なる歟、渠が生れし時織部多の叔母は低語せり、姉孃よりも美はしと、渠は生れしまゝ保姆の手に長じたれば、父母の寵愛近處の祝福も、半ばは姉に掩はれしなり。渠の乳母は吾家に來る毎に、其母の姉に對する依估の爲め、二三言を終へざれば去らざりき。其の織られ縫はるゝ新衣を見出つる時には、其流行の好否を評する前に、先づ其二女の孰れなるやと問ひ、其

主定まりて後或は一二言にして默し、或は其滿足なる賛辭を重ねて、布衣をも綾羅に褒めなせしなり、然れども少妹自身には一種の氣韻あり、超然として父母の愛、衣髪の裝の外に心を置きしは幸なりき。渠は温柔なれども女性の靡從なく、活潑なれども男性の剛情に及ばず。唯好笑と怡快に耽りて愁氣なく、大人の憤怒にも、小兒の叫びにも、朋友の怨みにも、渠は唯一樣なる笑顏を向けつゝ、何物をも其心潭に着けしめざるなり。我謂へり長妹は長兄に似て、小妹は長弟に似たりと。

我が幼弟を視るは宛も長妹を視るが如く、渠を愛するよりも寧ろ憐れむなり。渠は今年高等小學校の初級にあるも猶ほ十一歳の童子にして、父母の依估、兄弟の競爭及び、他人の愛憎の其身に及ぼす影響には、また何心もなかりしなり。渠は知らざる人を避けて親しき顏に就き、好むまゝに求めて、與へらるゝまゝに滿足し、命せらるゝまゝに行ひき。渠は實に吾家に於ける季子なる故に、長兄の如く父に愛せられたり。初めて學校に上りし日も父は渠が伴となり、父が田園を巡視せし時も。渠は亦其杖の如く從ひしなり。斯く渠に大師大保たれるもて、晩年の快樂としたる其父も今失せぬ。我も

慈悲ある祖母を失ひて歎きたれば、今渠が愛せられし其父に別れし悲哀を思ふ。渠は生れて氣弱はかりしが、遂に臆病に育ちたるは、一家の變遷渠が爲めに不利なりし乎。我は渠が繪畫を好めるを、首府なる渠が教師に聞きし故に、多く鐵筆の粉本を齎し歸りて渠に與へたるに、渠は我を他人の如く思ひ做してや、唯耻かしげに背面し、而る後竊かに執りて己が室に退きし時に、我は見送りて落涙したり、渠は舊に仍りて母に叫ぶ父の如く兄に願へり、然れども母の愛は孫の方に牽かれて見へ兄の掌も亦弟よりも其子を蓋へり、唯我實に吾少弟を憐む、渠が他人の本なる多き兄弟の間に孤なるは、宛も我が愛憎なき府民の裡に迷ふ如くはあらざるや。我は能く吾愛を知るも、渠は猶ほ無心なり。渠が唯翩々として遊ぶ樣は。吾眼には家の隅なる暗雲なりき。

凡そ是れ吾父が此世に殘せし同胞なり。家内に於て或は恩の厚薄あるも、唯其は久しく外に在らざりし我に然か見ゆるのみ、家内には何の不平不足も見えざりき。斯る多數の家族に於て迷ふ枝なきと、吾同胞の如きは少なる由にて、吾家の和合は實に近在に隱れなき標準なりと云へり。是も皆辭せず受くべき吾母の名譽たるなり。

吾家の支族三家ありて、其最も古きは馬關の友の生家なる對家なり、此家の家族は嚮に貧しくして林外に退きしが、今は舊時の住家に復れり。次に古きは吾家より一家を隔てし質屋にして、最も新らしきは質屋の對家なる酒店なり。最後の家は、吾上京の後其主婦の失策に由りて、洗ふが如く貧しくなりぬ。吾兄の妻は實に此家の女にして、嫂は昔し吾家の黒天使なりければ、其氣焰を銷し盡すは、何より憂き吾母の心配なりしが、我は之を隣人に聞けり、吾母が渠の怒を宥むる手段は、唯々寺に參れと云ふのみなりしと。嗚呼太と優しき姑よ、實にや嗔恚の角折る外に、寺院の說敎は世俗に何の益ある。去れど斯ばかり怖かりし嫂も、今は漸く棘なき主婦となりつゝあるあり。吾母は今母と呼ばれて此多き兒女を有てる上に、猶祖母と呼ばれて一男三女の孫をも樂しめり。其長孫女は最も慧く、長孫兒は豪放なるべき形質を示せり。以下の兩孫女は未だ形なき箕中の豆なり。斯くて吾家は母なる寡婦より當歲の孫女まで、凡て十三人の大家族にして、唯我と少兒と居らざるのみ、餘は皆な家內にありて消長しつゝあり、召し仕ふる二僕一婢も、亦每年新たまる吾家族なり。

第五　鄉黨

人生無根蔕、　飄如陌上塵、
分散逐風轉、　此已非常身、
落地爲兄弟、　何必骨肉親、
得歡當作樂、　斗酒聚比隣。……陶淵明雅詩

歸省後の一日、我は旅行の疲れを休むる爲に屛居しぬ。對家には老父長く病みて唯死と我とを待ちたりき。其家の娘、而も少く寡婦となりて大歸せし長女は、此朝吾贈物なる素地の鼻拭を持來りて、吾手跡を染めんとを求めたり。語る寡婦の言を聞くに、昨日吾歸省を聞きて、老父は一日咽びたり。幾度か手巾を擴げ、又疊みては手に撫で頰に當て、隣家の娘が其當世に流行る手巾なるとを告げし時は、渠は顏色變へて其繪帛なるとを斷言したりと。憐れのものよ、渠は殘る日の短かく、來る死の近きを知り、前夜大に吾事を急ぎたれば、寡婦は旅の疲れを推量して言ひ宥めたれども、徹夜忘れざりしと見え、未明に醒めて呼びたりと。母は云ふ「卿歸りて叔父の日に逢ふは何よりの

幸なり、卿の筆若し其生前の喜に入らば、謹しみて書くべきものぞ」と。

我は喜びて承ぬ、謂へらく、我は吾父の死に背きたれば、願くは叔父最後の呼吸を取り、眞心を黄泉に致さば、せめては父への手向けならんと、我は病人の履歴を知る故に、吾詩囊より左の如く寫したり。

天（トーマスムーア氏原作）

一　此世は夜半のまぼろしに、
　　寫りて消ゆる雪ぞかし。
　　あさむく影の笑ひ顔、
　　たくみの雨や日のしづく。
　　天より外に眞如なし。

二　照らす榮の羽こそは、
　　しはむ夕の色なれや。
　　愛とのぞみとかゝやきは、
　　墓より摘みし仇し花、
　　天より外にひかりなし。

三　われわだつみに浮しつみ、
　　波より波に舟ゆるぐ。
　　心のあかり智惠の灯の、
　　照らすはつらき吾旅路、

天より外に休みなし。

渠は拜受し、讀み得ざれども、父を喜ばせんと歡喜に堪へで馳せ去れり。

今は我爲めに故郷の快樂の顯榮の日なりき。一たび二たび訪ひ來りたる鄕黨も、猶ほ交る〳〵訪ひ來りて祝福しつゝ、頃しも鮎の時なりければ、渠等が齎す村酒と鮎とは、累々として厨房に列べり。尙有縋袍贈、應憐范叔寒、不知天下士、猶做布衣看」、天下の味を嘗め盡して。却て鄙料理を享くれば、時に此感なきに非らざりしかとも、我は知る、渠等の厚情は賓客の異なる爲めに異ならざるを。此地を過ぎて車を停むる王公貴人にも、巡視し來る縣知事郡長にも、素性知れざる飄泊子にも、渠等の好意は常に村酒と鮎なるとを、況して故郷の土より食ふ爲に歸れる我をや。故に我は先づ吾嗜好を回復するに務めしなり。

然り、回復すべき他に肝要なるものは方言なりき。抑も我は故郷に誇るべき官位もなく、稱號をも金錢をも、又功業をも有たざりき。故に若し此の年月に言慣れし京語を棄てば、唯少しく變れる顔と聲の外見るべき土産はあらざりき。然れども鄙の耳に京

語の苦(にが)きは、都會に鄙語の卑しきに異ならねば、我が故郷の我に復る爲めには是も亦棄てざる可らざりしなり。去れは我は頭初より茲に務め、一日半にして全く鄙文庫を胸中に置き得たるには。渠等も殆んど舌を捲きたり。渠等は豫て都會見物の村男女等が、一日にして都音を齎らす其の輕薄を憎みし故に、我が其反對に出でしは如何許渠等の喜びに入けるよ。諸凡の快樂各種の會話に、我近けば近くほど、渠等は天人の如く我を待ち。時に間に吾風説は一村に流市せられぬ。我は唯戰場に蒙ふる兜も、息ふ爲には脱がざるべからず、戰ふ時には復冠るといふ、當然の答を爲せしも、渠等は猶ほ格別の美德の如く稱賛せしなり。

我嘗て酒を禁じて大に身躰の健康を得にければ、此二三年は殆んど禁酒の樣ありき、去れども渠等の前に其好む所を同くし、渠等の滿足に由りて吾歸省を快樂ならしむるは、甚だ罪なき事と思ひければ、亂に及ばざる迄は常に飲むとと定めたり。然れども我が渠等の贈物を愛つるや、渠等の心、一杯には一杯の各譽を感じければ、陶然大醉に至ると數回。蓋し平生慰籍の樂園と呼做す故郷に、吾人の屢する能はざるものは、

道の遠きか爲ならず、費を惜むが爲にも非ず、只時間の乏しきのみ。首府は名譽の駈場なり、一回頭の間に幾多の變遷は去來せり。「生年不〻滿〻百、常懷〻千歳憂〻、晝短苦〻夜長〻、何不〻秉〻燭遊〻」と。古人も快樂の時おきを歎せしなり。多年天涯に流落して、偶還りて故郷を見る、醉ふて兒女の一笑を博するも亦何の累(わづらひ)かある。

我は今邊りの親戚を見舞はんとて、先づ嫂の里なる酒店に到れり。店頭には村の酒徒充滿し、半は我が面識せる輩なりき。主婦は今交際場裡の女王の如く、多客の間に立ち廻りしが、我を視て微笑しつゝ奥に誘へり。我は今渠等の敬禮の裡に入來すれば。偃息したる此家の隱居は奥座より出で迎へたり。嗚呼斯隱居よ、渠は昔し豐(ゆたか)なりし富を以て、其妻の手に任せたれば、今は洗ふが如く貧しき此の日にも、心おきおく妻の手より養はれたり。渠は吾郷の文學家にして、當地方神社佛閣の奉額に渠が讀みし發句なきはあらず。蚤少かりし時、富める思想の浮ふに任せて讀みたりし、人世榮枯の無常をば、老年に呼ひ來したる不運に遇へり。然れども若し此豫想なかりしならば、富貴一朝眼を過ぎて消ゆる時、如何許(いかばかり)か失望の鬼に追はるべかりしも、渠は少しも世の

憂と齡の萎に暴されで愉快に高臥し、樂隱居の名を以て他の老人の裡に羨まれたり。渠は其長女の幸運を祝して、其良人なる吾兄の富有と慈善とに餘生を托し、其妹を他の遠村地主の子に與へて、最早浮世を終へしと思へり。其嫡子の傲慢なるを、妻が蒔きたる甜愛の實として、妻が自ら嘗むるに任せ、以下の兒女をば渠等を守る神と佛と、渠等を眺むる世間の愛憎に放ちしなり。渠が殘れる業とては、唯鄕黨の相談に昔し大なりける其顏と語を假すと、他の喜悲哀樂の家に其身と同情を投ぐるとの外なかりき。去れば吾歸省の即時にも、近處の祝意を代表したるは此隱居なりしが、今日も我に贈るべき寸志なりとて、一札の短冊を取出し、莞爾として左の如く書きたり。

つむ雪のとけて今日より梅の花。

渠が額には愁焰なく、胸裡には憂色なく。言語には濕氣なくして、偏に吾滿足を喜びける、其愉快なる光線は、眞に吾肝肺に寫されしなり。

此樂隱居が鄕黨に祝せらるゝほど、其妻は忌まれたり。渠が貧を苦むは宛から囚徒の鐵鎖を苦みて、之を除かんと悶ゆるほどに、益々鐵鎖に嚙まるゝに似たり。渠は前日の奢侈と浪費の爲に富有を失ひたるも、其富有の記憶の渠に纏へるは、宛も舊情人の幽靈の如くなり。渠が願ひは一日も早く舊時に返るべきことにありて、渠が心中の妄念も亦常に惡魔を呼べり、長壽を求むる王者に不老丸煉られ、死を慕ふ皇帝に返魂香燒かれし如く、新聞紙上に端なく見えし投機業の効能は、遂に渠を心底より動かしければ、渠は即時に借金して其の嫡子を遣り、投機場に上らしめしが、一擧して敗れ、非運は家の首石を震ひたり。此時に當りて。渠若し此家の立法官たるに止まらしめば善かりき。執行官を兼ねしむるも女將軍の力能く投機場の任に堪へしならん。然れども渠は一飛して司法官となれり。其計畫と失敗とを以て其子を彈劾し、熱怒の餘りに、其子を追ひて吾家の一柱なる長弟を養子にせんと宣言して、罪もなき吾母を震慄せしめぬ。去れど親の迷ひも半分は子の爲なれば、彼亦如何にも其愛子を追ふべき。然れども一家生活上の計畫に於て、渠が立法官より司法官に移るとの自在なるは、轉た前途の望みを暗くし、斯かる境遇に唯一の慰藉あるべき家族の快樂は、氷の如く冷へわたりしなり。主婦は今其店頭より最好の酒を持ち來れり、渠は宛も失樂園のサタンが地獄に於

てすら猶ほ望を繫げる如く談したれども。其心中を焦せる貧の苦焔は、絶へず其舌頭より溢れたり、渠は吾兄を生命の樹の如く稱讃し、其嫁を不如意の動因とし、其の轉業の頻々なるに拘らず、渠が之に應する氣轉乏しさを咎めたり。其次女の結婚に於て衣裳道具の欠けたりし事を悔み、其の第三女の甚だ學問を好めるにも拘はらず、小學科程をも了ゆるに至らざりしことを痛むなど、凡て前日の榮花と思ひ合せて打ち怨したり。其爽やかなる言語と抑へ難き氣象とは、猶ほ幾百難を惹き起すべき餘勇を顯せども、其好笑に於て現在の苦厭を吹き出せるは、殆ど我をして無價飲む其美酒を苦からしめたり。此家の嫁は折々器皿を運ぶ爲に出現したるが、渠が紅顏も早や淡く、豐かなりし頰も萎み、愛たかりし眉目も痛く寞しく變はりけり。我は屢渠に物云はんとせしかども、渠は故人として耻ちたるにや、他人の如く疎々しく、唯來りては復た去れり。渠が今貧き兒を胚みてあるを認めし時に、我は窃に背面して涙を拭きたり。時刻移りければ、他の貧民なる老父か病むなる對家に往きぬ、此家の少寡婦は今機を織りける處なりき。渠は柔和の笑顏を以て我を迎へ、今朝書きたる禮を叙へ、我を其

父の病床に誘ひたり。家は早や老いたるも、渠が手に奇麗に拭かれ、古き疊も一介の塵だに揚げざりき。奥室に蚊帳の釣られて病人は圓かに眠りぬ。寡婦に聞けは、今渠が言葉は唯泣はかりになりぬと、斯くて寡婦は膝を折つて蚊帳に寄り、團扇を以て外より病顏を扇ぎつゝ、「父よ父よ」と小聲に呼びたり。病人は重く起き、我を見て先づ歔欷せり。

「ア、卿は珍しく歸りぬ、我は早や此通りに病みぬ」と。

老いたる哉叔父よ、渠は吾村の巨人、尋常の力士に勝りて肥へ、歩く能はざる程滿ちたりき。今其疎なる頭髮、涙に乾かぬ睫、長く窪る頰の線を見よ、渠が陰影は其儘墓をなせるなり。嗚呼老いたる哉叔父よ。

渠が六十年の生命は、唯曳延べたる苦痛なりき、其青年の遊蕩は一家を陷れ、唯零落をのみ殘したり。家系の非運も亦初めに其先妻を奪ひて長子を殘し、再び後妻を奪ひて二男三女を殘したり。伯は今家を出てゝ俠客となり、仲なる匠は未だ一家を活すに足らず。叔の放心は轉た其父舊時の追懷を耻かしめ、長女は其良人を喪ひ、大歸して

此寡婦となり、以下の二妹は母なく生ひぬ。渠は今正覺して是等の不幸と苦爭きしかとも、老と萎とは渠を力なからしめ、遂に病みて起たざる苦痛に渠を置きたり。唯渠が猶は泣き得る日に、吾顏を渠に見せしは、諸共に限りなき幸なりき。

今床の楣間を仰きしに、思ひきや今朝書きし天の詩の、今は美はしく表具せられて、此家の篆額となれるなり。是より外に秘藏なきほど此家の貧しきとこそ憐れなれ。去れば我は病者が額を指して天と云へる笑顏の上に、久しく其臥床を纏ひし死の蔭、陰府の羽消ゑて、天國の微光の上れるとを認めしなり。

ア、神よ、吾事の斯ばかり渠に功德ありしを謝す。渠質しく一物なけれど、凡ての代りに天を得たり、確に猶太の詩人は云へり、「人の富みて榮華加はる時懼るゝ勿れ、渠が死ぬ時は何をも携へ行くと能はず、其榮華は渠に從ひて下らさるなり」と。見よ人は裸に來りて裸に歸る、誇る處は裸の淸きにあるのみ、老人の貧にして病める、決して笑ふべきに非ず。

寡婦は問へり、「我等には東京も用なけれど、せめては都人の生活なりと聞かしてよ」。

我即ち答へて曰く、「逆旅に生れ、下宿に育ち、酒肆に祝言し、假住居に迷ひ、病院に死して、他鄕の土に埋まる、卿よ是れぞ都の生活なると、病人は偃き敢へぬ涙を飲みて、「さては生れし土に死ぬる我身はそも如何許の幸ぞ、……去れど吾兒等こそ今は何處に迷ふやらん、何事も此娘一人に負はしつゝ」。

少寡婦は一滴の涙をうかめて、語り出るは其家の始末なりき。吾上京の頃までは、叔父は林外の人にして、寡婦は夫の家にありき。當時兄なる匠は時の不景氣に事もなければ遊食し、弟は旅より旅に商法を營めども、自ら活くるにさへ足らず、以下の二女は唯其父の命を殺くのみなりければ、渠は暫時里の助に去らんと焦りし折、偶々良人死して養ふべき子のおきを幸ひ、嘆きの裡にも家に歸りたるに、耕す田も織る機もなく、往々食はぬ日もありて、外出もせで榮色を包みき。辛して蠶の時節に達したれば、兩妹をは手紅に遣はし、寡婦は父と長弟を牽ひて瑣細なる養蠶をなし、漸く一基の機を借り得て晝夜に織り、始めて常食に就きしとよ。

其後は養蠶の盛なるに從ひ、機の賴みも多ければ、養蠶は父と弟に任せて專ら織焉の

みに急きつゝ、烟筒も亦黑ずまりぬ。寡婦は年猶ほ壯ければ、憐んで再緣を勸むる人もあり、又父に幸なる緣談もありしが、我なければ父安からずと、情なくも皆辭はりぬ。今は其丹心の知られてや、勸むる人もなくいと心安くなりぬ。

去れど寡婦の本望は、獨り活くるのみならず、今を昔しに返すにありき。其家も亦吾家の舊枝、叔父も昔しも富有なりき、今貧しく終はるといへとも、生前六人の子を育てたれば、指笑すべき人にあらず、去れど世間の口は是非なし、親惡ければ子も無頼に、年老ひて便なく死ぬと、噂さるゝ悲しさに、寡婦は生活に餘れば時衣、新服、日月と共に調へつゝ、寺參にも宮詣にも、他の善き老人に加はらしめしが、遂に其林外より先祖の礎に手を置きしは、四年前のことなりき。

寡婦は今語を繼きて曰く「妾か身は貧を負ふて生れたれば、骨折りても貧は脫けず。去り乍ら汗の油の積りてや、一家の衣食も餘りあり、妹も早や嫁期なれば、緣ある儘に嫁らしたり。殘る小妹も母なし育ちと、世間の笑もあるべければ、吾手にかけて髮結、機織、裁縫など、妾が覺へし儘授けぬ、去れば妾の苦心を察して、長弟も亦道具を負て遠方に出てぬ。唯手に餘るは季弟にて、父の悲嘆も近處の勸告も耳にせず、旅より旅に迷ひつゝ、他人に迷惑かくるほど身も遠ざかり。久しき以前馬關に漂着し、偶々昨夜歸り來ぬれど、一夜寢て又出てたり。去り乍ら渠も亦思慮なき輩にもあらねば、必らず悔る日もあるべし、妾は深く氣を痛めす。父も妾の意を酌みて、此頃は病重りたれど、何事も心に忍ひて、働く儘に妾を放ちぬ。親娘同身一体の、世にあり難き喜びも、貧なればこそと思へば、今は却つて世は樂しく、零落すれば世間の愛憎も人情も、掌に取る如く見ゆるなり。去り乍がら、卿の兄は善人なりと賞めぬ人はなけれども、妾等親娘ほど知るは少なるべしと、日毎に父と其話、生佛と崇めあへぬ」と。

此悲しき快樂の物語りに、病人は折々胸の時雨に咽びてありしが、茲に至りて歔欷たり。我之を聞きて長息默然たること久しかりき。漸くにして寡婦に云ふ。

「實に卿は生れ乍らの學者なり。隱れたる君子なり。世に皆な論語讀みの論語知らず。唯書物を讀まざる卿の胸に論語宿れり。卿能く聞き取れ、昔孔子に子貢と云ふ高弟ありき。或日其師に問ふて曰ふ、「貧して諂ふことなく、富みて驕ることなき如何」。孔子答

へて宣(のたま)へり、「未た貧して樂しみ、富みて禮を好むものには如かず」と。富みて禮を好む者、今の世にありやなしや。去れど貧して樂しむものは、此家にこそ見られたれ。卿の胸には論語あり」。

渠は大に驚きて答へり、「妾は決して文字を知らず書をも讀まず。妾は唯貧しき賤女(しづのめ)なり。斯る賞美を受くべからず。妾は唯苦にならざる程に貧乏に親しみたるのみ」。

我は遮りて曰へり、「我は強ち卿を學者にはせじ。去れど我も亦卿の履歴を東京に履みたれば、卿か以て同情相語らんと思ふのみ。實(げ)に我も一度世に棄られ世界の底に落ち、身の外頼むものなきに至りて、始めて自身の價値を感じぬ。他人の膳より食ふ間は、自ら思ふと塵の如く、我奮ふ時は、自ら九鼎大呂の重きを知る。今は我竊かに自立の根底を得て、之を多くの友に語りたるも、唯漫に荊棘路(いばらのみち)を說く勿れと答へられしのみ、偶々歸りて卿に聽く「友遠方より來る、亦樂しからずや」といふも愚よ。今日の會話我は吾滿足によりて卿の滿足をも思ふなり」と。

渠は眼を瞬きつゝ釋然たる顏色、暫時は無言ありけるが、漸くにして笑み且つ曰ふ、

「今こそ斯く弱りてあるも、父か素志は卿等四兄弟の細君を世話するとに在りて、常に曰ふ、酒家(吾家兄の婚儀)と宮野(吾少兄の聟入)には、既に吾一臂を致したれば、是よりは卿の爲に宮野の妹娘を得、卿の弟氏の爲めには甘木の季娘を得まはしと、去れと卿は都の人なれば、田舍よりは娶られまじきや」。

秘想の鍵を打ちたる突然なる此質義に、赤面動氣一時に襲ひ、眞實臨終まで吾兄弟を思ふ此老人の心底に感謝したり。去れと自ら氣を靜めて何知らぬものゝ如く問へり、宮野の妹はまた何方へも緣づかざるや」。「然り彼家は皆卿の歸省を待たれしなり。卿一家殊更母上の素望も亦然るなり」。我は唯瞞眼の喜を以て答へぬ、「吾妻の爲斯はかり親族帶の滿足に入らば、唯々老人の意のまゝ(こゝろ)」と。此話を聞きて病人は再び咽べり。實に我が此返事は、渠の爲には死出の土產にありしぞとよ。

此時家の少女は刻限なりとて午飯を出しぬ。吾は快樂の此家に蘇生せしを感して思はず强食せり。椽の外、放朗なる空庭を隔てゝ、綠芋青蕪遙かに竹樹に連なりつゝ、廣く涼しく眺められ、樹間に吹きける清風も、其青羽を椽側に拂ひしなり。我は此家の安

すきに安んじ、日の暮るゝまでは去らざりき。

此夜吾同年の友は、我爲に牝鷄を割き好酒を置き、村の逆旅に我を歡迎しければ、我は唯其好意の故のみならず、久しく疑ひし吾荒破村を觀るは、此交際場なるべしと思ひければ、定刻に逆旅に入りぬ。渠等の員は點燈時分に滿ちしが、皆手織の厚く地味なる單衣を着、甚た低く帶を結びぬ。其頰は新なる汗の湛へて、浴湯の晩きを示し、其顏色の黑きを以て、野外の生活をトせしめたり。博多語は今忘れられて、純粹なる土音滑稽は滴々頷を解き、或は其健腕を燈下に較べ、日中の勞力を誇り、到る所田舍漢の眞面目を洩したり。我は竊かに渠等の一人に、今年の桑苗如何なるやを問ひしに、渠等は顏を顰めつゝ「是は一場過眼の夢にして、二年以來皆農事に復りぬ」と、殆と忘れしものゝ如く答へ、我をして頓に安堵せしめたり。坐定まり宴初まり、遂に東京なる質問の繼出しければ我は左の如く答へたり。

「然り吾友、實に東京の繁華は卿等の問ふ所の如く、淺草觀音の耳は、處女の願言に眠る間なく、新富座の演劇は、食頃に巨萬の富を擧げ、神田祭に死人あり、夜毎に火

事の花は咲き、チャリネの曲馬は都人の金庫を靈ひ、花苞には不夜城あり、銀座には暗夜なきも、我は敢て告白す、都は寥しき社會なりと。煉瓦の大厦、四壁の長家櫛比して空地なく、屋上ならずば、物置場なき程なれとも、其合壁は萬里の長城、其敷居は絶處の關門なり、百萬の都人は勿論同じ管より飲み、同し天より呼吸するも、其交際は唯一家内た快樂なり。毎朝顏を其隣人に對するも、其隣人は日に異なれり。其家に昨日は貸家の札張られ、今日美麗の店張られ、明日は又賣家の札張らる。亦何人にか打ち解くべき。是故に渠等の快樂、憂苦、戀愛、親切、皆家の奥に疊まりて戸外に溢れす。其れ然り、變化多き土地には、永久なる交際ある由なし、吾友よ卿等は知れり、鄙にありては、二里三里の他鄕より情人を得ることを、然れども東京にありては、唯家内主從の戀あるのみ。大坂のお染久松、江戸のお駒才三、京都のお仲清八等の活劇は、是れ都會に於る常情のみ。蓋し都會の聲は個々亂れ彈く音樂の如く、賑かなるに似て騷がしく、村家の聲は合奏したる調子の如く、淋しきに似て甚た温かなれば、都會は一時の滯留に適するのみ、永久の住處は村落にこそあれ」と。

解せるも解せざるも、渠等は一同感嘆の辭を爲し、猶ほ二三の質問を爲し了へて、行酒急き放歌溢れ、初めには流行遲き都の調、次に耳新らしき田舍歌、最後に全く知るに及へる古謠歌はれ、絃聲一夜一村を傾け、相散せしは鷄鳴の頃なりき。

第四　戀人

青年不重來、一日難再晨、
及時須勉強、歲月不待人。……陶淵明　雜詩

陌頭楊柳枝、既被春風吹、
妾心正斷絶、君懷那得知。……郭振子夜春歌

我が故鄕の快樂は、今や戀の幻影によりて高まりぬ。嚮に向家の寡婦が語りし宮野の妹なる一言は、吾情奥の琴を彈じければ、胸を環る血線は宛も美妙なる音樂の如く、滿身に響き亘りぬ。今は宮野の訪問の、片時も猶豫なり難ければ、歸省の第三日の未明に出て往きたり。昨朝眺めし故鄕の幻影も、今日は又今日の景色あり。昇る朝日を樹蔭に回顧し、綠蕪の間に秋風を受け、遠くの森に豐なる炊烟を認め、太古に似たる青墓をも、我は爽かに歌ひて過き、猶ほ積翠を溪流に收め、尾花の靈を山路に拂ひ、三叉の途に孤屋を殘し、行き行いて太と寞しき此地方の幽靈場なる七曲の野に出てぬ。其第三曲の衝に當れる、古石の靈佛は、依然として立ち老ひたり。

抑も此の慈悲ある地藏尊は、何か故に茲處にありやは、久しく解けざる疑問なりき。迷ふ由なき一線路に路標の要もなく、妖怪なき日中には守護の功力もなく、衆生濟度の大願を以て、徒らに月下の影法師と化し、雨夜の迷狸狐と顯はれ、來るものには敵となり、遁るゝものには追手となる、佛者の功德は焉くに在るや。是に於て乎、近所の古老は其の由來を想像し、或は是處は昔怨靈幽鬼の場なれば、佛像を以て其魂魄を調伏せしなりと云ひ、或は非業の死者を埋めし處なりと傳へ、相附會して其記憶を怖くせり。鄙青年等も亦、或は祈願應驗の感謝の爲め、白布を佛の肩に纏ひ、或は草葉の衣の冷たき上に、猶ほ二三の樹木を加へて、轉た其眺望を淒くしたり。

我は嘗て半月半雨の夜に此處を過ぎたることありき。我は第一曲の端に慄へる足を、一歩一歩に進めつゝ、暗光ある佛像に變化の機會を與へざる爲め、一心に凝視せし間に、忽焉佛頭より迷ひ出でたる白光を認めぬ。其恐しさに我が脚根は地に沈み、生氣は全身を棄て、眼は腦中に埋もり、呼吸は心底に潜みたりき。數分の間我は吾邊に何がなりしかを知らざりしが、漸くにして耳復り脈開き、恐怖の流瀨を踰へたる時に、我は

猶ほ白光の人高の空に釣られ、其緩く飜り來る調子に、細なる響遠く聞えて地に傳はるを覺えぬ。白光は廣かりつゝ、眺むる程に天蓋となれり。是は吾目の迷ひならんと、幾回か瞬せしも、渠は猶ほ近く我に寄りたり。我は寒たき身を移さんとて自ら奮ひたるも無益なりき。猶ほ悽かりしは浮べる布の端に、佛像の見へ隱れつゝ、睨むにありき。我は慄き佇みつゝ、屹立黙に固着せし間に、白光と地の音とは益近く、悽影凝りて一個の陰形を題したるを、熟見れば、是は如何に傘さし來る夜行人なりき。嗚呼我も亦傘を持ちたりき。我が渠の傘を恐れし如く、渠も我が傘を恐れたりき。唯渠は慣れたる夜行の實驗に於て、幽靈場は緩く過ぐべきことを悟りたるが故に、たとひ我を恐れつゝも、徐々に此方に進みしなり。渠は今我爲に守護の活佛となりて、恐怖に對する吾後楯と思はれければ、我も亦此の悽き死佛の影を、後に見て安然に過ぎ行きたり。然れども爾後我が暗夜の旅行に於て此一場を追懷する毎に、白光の天蓋は、常に吾眼前に幻影を叙へたり。

去り乍ら今日の我は早や昔日の我に非す今は血氣の壯年なり。曾て玄界の怒濤を乘り、

遠州灘の大瀾を過ぎ、荒凉なる武藏野に寢ね、幽邃なる日光の深壑を伏仰し來り、亡魂に疎き理學を修め、文明國の信仰を銘し、新に凱歌を歌ひて歸り、故鄕の快樂愛の望に充されつゝ、滿眼の視線天下を小にする意氣を以て、此の小徑を過くるに當り、何物か亦我を蠱惑すべき。地藏尊の顏は我に對して笑ひ、周圍の靑草の優しく迎へて送るを見し時、我は人なき里の英雄の如く、長き七曲を短かく過ぎて、得々として宮野村の境に踏入れり。樹林の裡に奧床しく、吾往く家は見られつゝ、壁堊の光は再び思の鍵を敲けり。我は謂へり、抑も宮野の家族は、宛も深き淵の如く、如何なる喜怒哀樂の風も、一人の顏たに波たつ能はざれども、此處に投げたる石は、常に底深く落るを見ると、蓋し渠等は疎き形容に篤き眞情を含め、感投詞痴き割には、强く働詞を響きしなり。我は昔彼等の仰天を得んとて、無益に工夫を凝らしたりしも、吾一言一行たに渠等の記憶に失はざるを認めしなり。

去れは今突然なる吾歸省も、出現も、遂に渠等を驚かし得ざるべし。然ればなり、渠等は多分冷淡にあり得べきも、其の一人――吾訪問の最初の主眼、最後の主眼、――

吾意中の幻影、――理想の天女、情人たる褒似は、恐らく笑顏を藏す能はざるべし。渠は今吾歸省のことを夢幻にたも示されたる歟。望に輝く吾顏を思ひ及ぼすともある歟。今吾渠を訪ふの路にあることを、渠に報する由はなき歟。今吹き出す吾氣息は、渠の思に斯はかり愚痴を重ねつゝある吾情を渠の胸には音づれざるや。我嚮きに吾村に於ける多くの變化を見たり。知りたる人は老い、親しき友は長け、忘れし童子は成人し、知らざる兒女は多く生れたり。然れども最も華かに最も著るきものは、處女の花嫁となり、標有梅となることなりき。我は其を吾兩妹の上に見たり、長妹より一春長けたる吾情人の幼なき容貌は我能く知りぬ。去れど今は我を迎ふる如何なる紅顏ぞ。日の熱きに汗は流れて喉渴きぬ。渠の家には甘き梨と冷たき井あり、イザヤ急がむ、早や家の衝宇の見ゆれば。

我は今家の閾を踰えたり、吾少兄は玄關に來客と語りつゝ、我を瞥見したる儘又客の面に向きぬ。納戸に聞ゆる機織る聲は、吾入來の爲に止まざりき。我は直ちに家庭を通りて井の端に至りけるに、傍なる職事部屋に叔父は隱居職の一事として、放大なる

團扇の骨に紙を肉つけつゝありき、渠は我を見て一笑せしのみ、又も團扇に餘念なかりき。渠能く我より團扇を愛するなるか、今は接待の人なきに困りて、直ちに奥なる客室に來りしに、思ひきや吾戀人の此椽先に縫ひつゝあらんとは、實に戀人は美はしくも年長けて、轉た可憐の兒となりぬ。不意の對面に紅花を散し、忍び得ざる喜悅の笑顔に坐を起ちぬ。然り此の急遽の際にも、渠は猶ほ容止を保ち、極めて靜かに極めて優しく往き消えつゝ、間もなく見えて亦隱れ、其母は出て來れり。此時叔母は溢るばかりの滿足を以て云ふ「卿が歸省のとは其日に傳ふる人ありて、卿の來訪も昨日よ今日よと待ち居たり。此度は母上の如何許喜はれつらん、今年歸るか來年はと春、夏、秋に待たれし甲斐あり、母上の健しき裡に、卿も無事の顔見せて、滿足の程察し入る。一時は黄疾を病みしと聞きしが、左したる事もなかりし乎、去るにても愛憎なき他人の中にありて、平常たに心細かるを病中左こそ不自由なりしならん、吾家も今は主人の隱居せられ、何事も碧氏(吾少兄を謂ふなり)に任せたれば、以前よりは身も樂になり、仲妹も婚嫁して殘るは季娘一人になりぬ。渠も早や卿の妹よりも一年長けし年頃なれば、言寄る方も多けれど、父は所存ありとて皆斷りぬ」と。

叔母の談話は娘の入來に遮られたり。渠は今手つから落せし梨子を冷水に浸して運ひ來り。薄紅に光る顔もて、庖丁操りて無言に皮剝き初めたり。叔母は「日頃卿が愛たりし此梨子、何時も好く實りしが、今は五年、然なり卿が上京せし後一秋も實らず、漸く今年になりて、枝の折るゝ程實りぬ」と云へば、

「宛から卿を待ちしに似たり」と母の語尾より戀人始めて物云ひしが、忽ちに心付きてや、耳熱して再び語を改めつゝ、「去るにても此間の風にて三分一も落ちつらん」と云へり。

我は心底に叫ひたり、渠が胸の音を早や聞きたれば梨子幾個落つとも遺憾なしと。今は梨子多く剝かれぬ。我は果實の裡に、最も梨子の美食家にして、黄疾の日に煩熱のため絶食せし時にも、梨子は絶好の糧なりし。人は夏より冬を好めと、梨子、清水、冷水の一ある里には吾は夏日を愛せしなり。去れ共敢て告白す、此家の梨子の味の如きは、我嘗て味ひたる最も甘味のものなるとを、況して今日は苦熱の後と云ひ、殊に秘密の味

あるをや。

叔父は張り了へたる大團扇を採り、緩く扇きつ出て來れり、母と乙女とは趣向の爲に厨に去れり。叔父は相變らず悠然として座を取りつゝ、我に謂へらく

「如何に如何に、都と鄙とは孰れか樂しき。東京の生活は苦しと人皆云ふ、卿も却て我止めし如く、故郷戀しくならざりし乎」。

我は答へり、「然り叔父よ、叔父の言果して當れり、此家の梨子と叔父の言をば、我事毎に思ひ出てぬ、然れども今は動き出でたる玉なれば、重ねて止みなん由もなし」。

叔父曰く、「然り、卿も今は操觚の業に就けりと聞く。生れ得たる素望達せり。去れど餘まりに故郷疎きも賴もしからねば、今よりはせめて年毎に歸省すべし、母上も早や老てあれば」。

「然り故郷の道も漸く今年開けたれば、縱令毎年ならずとも、三年毎には歸省すべし」と、我は答へぬ」。

叔父は甚だ機嫌よく、大團扇を以て吾言を扇ぎ消しつゝ、否とよ三年に一度ならば尊

ろ歸らさるこそ宜けれ、學問の時ならば兎に角、最早や一人となりたる上は、身も少しは自由なるべし」。

頓て母娘は酒肴と共に出て來り一場の宴會は開けぬ。母曰く「近頃の肴なきとよ、折角の賓客に唯有合の酒肴を出しね、唯口に適ふものを食へよ」、叔父微笑して曰ふ「好食も口に馴れては味なし、都より偶ま歸らば、鄙の味も亦時にとりての饗應ならん。」

叔母曰く「定めて東京とは、聞しに勝る都ならん、首途の折の涙も、都に着けば乾くと聞く」。

「誰も然か云はるれど、故郷の人は宛も鏡に寫る吾面の如く、古びもせず疎くもならず、何時も懷かしく思はる」。

「去れど斯ばかり永く都に住まば、知邊も多く交際も廣く、昔しを思ふ時もあるまじ」

「然り叔母よ、晝は我東京を歩み、夜は故郷を夢みてあるなり」。

「東京は貌(みめ)好き女人も多かるべければ、早や相契る妻もあるべし」。

「否とよ叔母」と此突如たる屬受の問に、答ふる所此の一言のみ。餘は唯赤面のみなり

しか、遂に又口を開きて「都には好き娘は宵の星ほど多けれど、好き妻は晨の星ほど少なきなり」と。

斯く答へつゝ心中竊かに默思す、叔母若し其故を問はゞ、我は答へん「町家の娘は童女の如く遊食し、學校の女子は男子の如く議論せり、當世に於て教育の第一義は、女性の顏色を男性の人相に變るに在り」と、若し吾妻故郷にありやと問はゞ、猶豫なく然りと云はん、然れども猶ほ何處にと問はれあば、我如何か吾思を告ぐべき乎と、胸中既に定まりしも生憎叔母は別に問ふ事もなかりければ、今は却て「阿孃の眼病は今如何に」と。我より問ひ起す事とあれり。

此時叔父は得意氣に盃を揚げつゝ、「去ればあり實に面倒なる眼病なりき。最初卿の家に遣りて、其地の醫師に通はしめしは、卿が在郷の日にてありき。當時一度は癒へたれと、間もなく再發し、遂に福岡醫院に入療せしめしに、博士は病根を躰驅の羸弱なるに歸して、肉食だにせば癒ゆへき由證明しければ、農家なからも姫君の生活、未だ半年も立たされど、眼も癒えて此の通りに肥え立ちぬ」と。

我は戀人の方を向きしに、渠も面はゆげに俯きつゝ、談話暫らく途絶へたり。既にして又浮世話の快樂に移り、吾少兄も來り加はりて、其頓妙なる滑稽を以て坐を新めぬ。時亭午に近けれは、我は此地より三里遙けき洪水の迹を觀んと云ひしに、叔父も未だ其落零の全斑を見さればとて同伴したり。

我等は酷熱にも拘らず、筑後川に沿ひて上り、行々新なる沙場を經て、古川と云ふ一村落に至り、天より落ちたる洪水の迹、地より失せたる世界の礎を巡回迂曲し、村落の荒敗、深淵となれる桑田一夜に成りし墓場、生還りて死を求むる餓莩の慘狀等、他の嘆息の時に發すべき一歎線を、腦裡に留めて歸りしなり。

時移り暮近くなりぬ。母と娘とは他の趣向を整へて疾くより吾等の歸るを待ちにき。井の軒に猶豫せし、落日の紅線も漸く銷へて、梨樹の葉末より蒼然たる夕闇は立ち迷へり。今は雷宛も陰暦の七月十五日ありければ、露けき瓦屋の上なる滿月は、黃昏より輝き初めぬ。裏門の方に嘶き歸る馬も聞へ、馬子が歌ふ馬子歌は軒端を繞り、人語の響に俄かに家族の殖えけるは、爭ふ方なき農家の日暮、人は急はしく戸を出入り、犬は

人の後を慕ひ、猫は厨に駈廻り、夜啼虫も暮の戸に啼き初めぬ。

露に濕れつゝ娘は梨子を落して來れり。渠は今清く濯はれ端しく髪も結はれて、露の後なる花の如く、一入少き乙女となれり。其の濃化粧の鄙風俗を止めて、素顏の儘に出てたるは、其氣質の高尚なるを證し、渠が唯ある如くあるは、轉た其品性を高めたり、宴場の會話は他語おかりき。叔父は曰く、吾家の梨子は東京にも少なからむ、叔母は曰く、今年實りて卿に遇へり。叔父は曰く一年一度は歸省すべし。叔母は曰く此娘も早や嫁期あり。戀人の無言なりしに代へて、我は甚た能辨なりき。殊に東京の疑問に及びし時我は云へり。

「否とよ叔父、首府の生活は宛も極樂往生に似て、難易の兩道即ち他力と自力とあり。他力に縁りて車を進むるは易く、自力に由りて鞋を行るは難し。是に於て他力を頼む拜人宗と云ふもの起りぬ。拜人宗とは人より下りて人を崇ふ者、己れの汗を以て他の油を添ゆるものにして、我常に思ふ渠等は生れさるの勞苦少なきに如かずと、盖し大臣の提灯を持ちて洋行し、長者の財囊に入りて濶歩するも、自家何の誇る處かある。

負債主に役せられて促催法學士となり、借金家に養はれて言譯代言人となる、滿腔の學問も亦何爲れぞ、叔父よ我淺學にして名號なきは、固より隨ふ所を重からしむるとも能はさるも、而も自から立つに餘あり。我に君なし僕なし。我唯一個自由の民、宛から沙場の一小粒に似たり。然れども我確かに信ず、たとひ吾名は一個となるに足らざるも、吾事業は一個の事業なるとを。叔父よ、我此迂路を取るは、失脚茲に落ちしに非ず、唯々安全の道を思へばなり。靈界の他力の舟は、覆る事なからんも、見よ俗世の他力は、百面相、疑惑、仇に綯ひたる繩の如し、主人公の心一日の裡幾晴雲しつ、危き事の限なり、未來に於ては蓮華に坐すべし、現世に於て蓮華に坐すれば即ち落つ。故に多くが波上の花を慕ふて、不測の淵に臨む間に、我は我が起せし吾石上に座せんと欲す。是れ我が築ける九仞は、我棄てずば一仞も他の爲めに低くせられず、其處に起臥するも亦皆吾意の如くなれば。

叔父は遮る事なく我言を聞きしが、其終尾に於て「フム」と頷きたる其單咽語、宛も石深淵に落つるの響ありき。

側に侍れる戀人は、父母の指揮により瓶皿の間に手を出す外、何の言語も擧止もなかりき。渠は宛然美術の肖像の如く、靜かに其處に坐れるのみ、亦た見るべき意志の活機なかりき。然れども吾信念は確かに證せり、京孃の愛と村娘の愛とは、眞反對の活機を現するを、京孃の愛は目より光かり、唇より傳はり、手より移り、舌より溢れ、筆より通ずるも、村孃の頭を圍める嚴父母の目の下には、何等の通信をも容されず、渠等は唯熱くもなく冷くもなく、尋常一樣の擧動の裡に、脈々たる戀の線を送らねばならぬ故に、田舍の愛は一種の宗教の如く、愛の生靈を受けざれば感ずる能はず、又た容易に他の冷眼にも發かれざるなり。然れども一たび機微に感ずる時は、情の潛熱、涙の伏流は、相思の幻影となりて、夜毎の夢の鏡に寫る、今や吾情人も亦何氣もなく我に献じ、我に酌みて無言ありしも、屋上の明月二人の影を壁上に寫しぬ。

短か夜は更け易く、樂む時は疾く流れて、何來の遠鐘も午夜を語りて、唯默思の室、幻影の座、戀の夢の時間のみぞ殘れる。

我は翌朝日の熱せざる間に家路に上らんとせしも、叔父は曉來新らしき鮎を得しとて我を滝留し、叔母も亦偶に來りて歸るの速きを咎め、乙女も始終所要ありげに客室に出現しけれは、さても我は花の葛に捲かれし如く、心脆くも止まり、夕刻に及び再來を約して立ち出てぬ。

第七　山中

嬴氏亂天紀、賢者避其世、黃綺之商山、伊人亦云逝。
往迹浸復湮、來逕遂蕪廢、相命肆農耕、日入從所憩。
桑竹垂餘蔭、菽稷隨時藝、春蠶取長絲、秋熟靡王稅。
荒路曖交通、雞犬互鳴吠、俎豆猶古法、衣裳無耗弊。
童孺縱行歌、斑白歡游詣、草榮識節和、木衰知風厲。
雖無紀曆誌、四時自成歲、恰然有餘樂、于何勞智慧。……陶淵明桃花源詩

幼時我吾母の膝下に聞けり、吾里は山家なれども、故郷の如く懷しき家はあらずと。此語今も猶ほ忘るゝ能はず。誠に母の故郷は三里遠き隣郡上座の山中佐田村、其家は奥家と呼はるゝ最舊家なり、此處には猶ほ吾母の母なる祖母存らへ、吾母の兄なる伯父も尚ほ壯に、別けて其子なる吾友は、今當代の主人となれり、其古き支族も二三家ありて、皆其地に聖別されてあるなり。

昔我久しく此地に居りにき。我田家を愛するの思想は半は此處に生れし吾母の遺傳にして、半は居に氣を移せしものなり。當時我は此村を桃花源と呼び、其家を五柳の居と稱へたり。蓋し其山巒の秀麗なる、其泉流の清冽なる、其境界の隱逸なる、其居民の淳樸にして篤實なる、既に浮世の枝に非ざるのみか、吾祖母の愛の手多くの孫の頭に分たれし裡にも、我は殆と一身之に當れる思を爲し、善人ある伯父の德は、一年間の客寓の間、一日の如く我を容れ、吾友は我に懷づき、村民は咸來の少賓として敬愛したればなり。去れば愛の夢の爲に。一時忘られし此の極樂の訪問は、今宮野より歸りて吾母を見れば、一日も遲々すると能はざりき。其日若し餘れる夕陽もありしならば、更に明朝を待たざりしものを、生憎にも日は暮れ居たり。

翌朝未明、我は吾母に從ひ慣れし近處の憧を伴れて啓行したり。茫々たる曉色の裡、晨露幾處の村落を圍み、日出て烟の消ゆる頃、大佛山の麓を繞る白水を認めたり。此の大佛川の源甚だ遠くして五線あり、皆吾行方なる佐田より落ち、流れの美觀は隱れもなし。清岩寺の鐘の響に、忽焉として朝暉開け、歩々流に近けば、淅々として瀨を往く水

の、宛然たる舊知の音を歌ふを聞きたり。

猶有仙流在、　山村未鎖門、　扁舟渡落花渡、　横棹訪桃源。

山路は高峰と回溪の間の棧道に入りぬ。時維れ秋は猶ほ淺く黄落の期もまだ近からねば、緑葉露に滴たりき、河身は露に隱されて、溪聲は他の世界より來たるが如く、峨嵯たる絶壁面前に高ければ、山上の出日を認るとも遲かりき。自然の景象愈深くして愈奇なり、百巒水を束ぬれは、水は其根脚を斷ちて駛せ、溪に躓く石あれば、波は嚙み且つ圍みて下り、石巖々として流れを歇むれば、一瀉千里の波も少時留まりて淵となり、圓きは甕の口に似て、曲れるは弓張月の如し。或ものは蓮華の如く開き、或ものは春の柏の葉に似て伸ひ、孰れの淵も澄み湛へ、夕烟林を罩ふ如く、積翠空に憑る如く、亦天蓋の飾せるに似たり。縹徊紆餘せる一綿路は、宛然たる木曾の棧道武夷の九曲の如く、過くる旅客は蜘蛛の網を緣るが如く、童子が亂絲を緒つる如く、坂を上り坂を下り、溪に背き溪に向き、一天地を卷きて他の天地を叙べたり。境盡くれば源流も亦窮まり、忽焉として峰旋れは路開けて潭聲聞えぬ。其間大巖巨角は、參差として石の

世界を組織し、立ち、坐り、顧みつゝ、跪きつゝ、或は其友と相呼ひ起き、或は其敵と相背きて軋り、夫婦は懷抱し、親子は接吻し、兄弟は相馴れ、主從は高低せり、其高古なるものは此世界の帝者の如く瞻回し、中者は公卿百官の如く、他の累々たる者は其臣民として偃したり。月日と漬沫其上を犯せば、不滅の石も亦太古の苔の衣に老いぬ。其前崕には密樹、修竹、青々として山に登り風に靡き、搖々として翠羽を曳きたり。路に當る土橋を經て、山緩く水舒ひたり。群かる村女は淺水の邊に立ちて葛根を擣ち、古風の擣歌は前代の遺音の如く聞えつゝ、桃源村も早や近かきを覺えたり。山稍平夷なる處に一樹の蔭の休憩場ありき。我は首府の徒行に於て、時に車夫と遲速を爭ひしかば、今二里の山路に靴を馳せて、未だ疲勞を感せざりしも、今此處に休みて主人なる老媼と語るも、故郷の快樂の一興ならんと、さては且らく留まりぬ。

「祖母よ如何に涼しき家ならずや」と云ふ我に祖母は答へり、「孰れの旅客も然か宣ふ、去れと此處に明し暮す身には、今日も甚暑と存するなり」と。猶ほ孰れにも問ふ如く、何處より何處に往きます旅なるや、何時頃に出立しませしやと我にも問ひたり。渠は吾答

を得て顔より足まで我を伺ひし後、再び曰く「貴客は奥家に往き玉ふならずや」と、我は此老匹婦が都人を相する慧眼に驚きぬ、曰く「然り祖母よ、去れぞ如何にして其を知れるや」。老母は曰く「貴客の下向は此處を過くる旅人の噂なれば、又貴客の從者は常に母堂氏の從者なれば」。

我は今渠の健康を祝し、拾ふに似たる此地多少の舊知に關して二三を問ひ、滿足せし後再び歩めり。此より北方愈上りて愈奇なる自然の裡に、廻溪を過ぎ、遠林を穿ち、嶮峰を攀ぢ、深壑を俯し、村閭なる獨木橋を過ぎて、晝猶ほ冥き洞道に入れり、五十歩を過ぐると思ふ頃、豁然として路開くれば、眼中の烟村、是れぞ我武陵桃源なる佐田村、吾母の故郷なりける、久しく沿ひし大佛の源流も此處に分れて、五線宛から掌を啓くが如くなり。第一の藪溪は最も大にして拇指の如く其次は瞽婦、曰く田代、鵜溪最後には郷の浦、其大相若く流なり、東北の遙けき空に聳ゆる諸峰は、崛峰巒蹯、迫ひ重りつゝ其裡に疊まりて一際勝れし幽谷の景色を、旅人は必ず想像に畫く。嗚呼もし遊覽の暇給はりて其を窮め得は、是や吾勝遊の初なるらん。

落々たる寒村落、點々たる茅屋舍、依稀として人影少に、蕭條として煙火疎なり。短く長き石逕を經て、奥の家に入りしまては、我に對する行人の佇立、戸内の耳語、窓角よりの窺き、童兒の追隨、到る處に見えしなり。

吾歸省亦既に此家にも傳へられてありき。然れぞも祖母は我入來の爲に其洗濯の谷より呼はれて、我を見し時隨喜の涙をぞ浮へぬ。彼れは今曲りし腰を打ち伸へつゝ。

「扨ても能くこそ歸りたれ、能くも故郷を忘れすして……三年も四年も一向に歸省せざれば、今頃は故郷をも忘れつらんと思ひしなり、東京にありて……六年とよ……能くも目出度歸りたり。我も命あればこそ卿の顔をも見たるぞや、此の春の紀元節會に、御上より褒美を戴く老の身、最早や我世も長からねば、復とは逢ふこと能はざるべし、願ふは日長く滯留してよ」と。

慈愛の祖母よ、涙に涙を報ゆる外我には何等の言葉もなかりし、迷流して故郷を忘る る識者生活を說き、吾上京を止めたりしは、まこと此の祖母なりしなり。あゝ有がたき吾神よ、爾は祖母を老いて益壯ならしめ、我をも其面前に遣り玉へり。

「如何許達者に在することよ、去り乍ら最早や浮世を肩より卸して、氣樂に身を休めらるべし、猶ほ何時まてか働き賜ふ」。

「何の働くと云ふとやあるべき、昔の癖の老いてもやまで、家内の邪魔をするはかり。」と今は午餉の時となり、伯父も歸り、從弟も亦其花嫁も、顏色依然たる此家の僕等も、一同に山より歸り來りしなり。花嫁は其表顏を都人に見られましとて頻りに隱れ潛む樣なりしが、沐浴し更衣したる後出で來りき。里の童兒の好奇心は、何時の間にか相呼ひ傳へて宅前に群來れり、其兄妹の舊友を異人の如く眺めたり、遠く吠ゆる路頭の犬、後ろに下す山風、門頭を下る澗流、我を續りて盡く故音を發せり。語る我が言葉の端に、祖母は唯驚愕を答へつゝ、始終吾顏を打ち守りしなり。

我は今家族の初對面を經たれは、直ちに此裡の天然を見んとて出て往きぬ。此の屋後は豐後英彥の高峰に連る大山脈の第一峰にして、是より奥は嵯峨幾層なるを知らず。門頭の澗流は五線の一なる鵜谿なり。我は此谿より歩き初めて、午前に經過せし天地より、一層、深黑、幽邃、蕭條なる穹谷を踏み、前年にも尋ね得ざりし喬木、偃樹、密枝、大葉の間を過ぎ、低迷、往復、隱見したる山路を縺綱し、他の四指の源線を窮めて、自然の妙、景色の美、實に此の山中に極まることを悟りしなり。到處の水、或は絶壁に懸りて立ち、或は竹樹の間に臥して流れ、或は深潭に坐して湛へ、或は低く瀨を走り、洄りて且流れ、別れては亦委流に合ひ、急きたる後には暫らく緩めり。蓋し水を變するものは石、石を移すものは水、誰か云ふ流水に情なく巖石に命なしと。波上の白泡は岩石の實、石頭の碧苔は流水の花、如何に水石の契久しき。山中の寂莫なる、其聲や唯禽獸草木の音、其象や唯茂林老樹の積翠、天上虛空の色のみ、然して此深き谷間にも、猶ほ我が外に來る人あり、薪を負ふて時に往還する、最と幽邃なる此峽底の風情よ、山高く水長き、天地最と悠久なる此の山中の景色よ、願くは魚に生れて此の裡の主人とならむ。

老子曰く、常に無慾にして其妙を觀、有欲にして其徼を觀ると。我今水に於て此語の至理を解き得たり。蓋し水の靜かに江湖に湛へ、無動、無色、無聲の儘にあるに當りては、正に本來眞如の面目、所謂ゆる無欲にして其妙を觀るの時なり。忽焉として溪門

を下り、一瀉千里、混々として晝夜に注き、崖圓き處に旋り、岩石高き所に折れ、瀨を上ぼり瀨を過ぎ、淵に落ちて淵を下り、石を懷き石を棄て、變幻百出して流れ行くものは水の至動なり。其瀨を下る時に皓如として白羽より白く、麗乎として白雪よりも白く、洒然として白玉よりも白く、赫焉として直ちに白日の白きに擬し。其淵に湛ふる時には、空彩を翡翠に寫し、峰影を扉風に疊み、春花、秋葉、落日紅を流に留むるは水の色なり。崖に鳴り岩に叫ひ、波に咽ひ、流に囀り、遠く管あき笛を吹き、近く絃なき琴を彈じ、宛も谷神終夜に躍りて清越の音滿溪に戰ぎ、天女終日歌ひて波上に珠沫を散するものは、正に是れ水の聲なり。蓋し無心の水にして、活如し來れは至動、至色、至聲を發し、動けば緩急の時を得、色には濃淡の影を得、聲の高下も亦相宜しきものは、欲ありて其徼を觀るの時なり。妙活きて徼となり、徼藏まりて妙に歸し、何等の痕跡をも留めさるものは、抑も亦如何なる至理ぞ。是理固より悟り難からず、然れども試に之を人事に求めよ。孔子曰く「喜怒哀樂未だ發せざるを中と謂ひ、發して其節に當るを和と謂ふ」と。然れ其其洗季今日の世。中に復る既に難し、況んや和に當

るをや。其涙は濁り其笑は苦く、其容は曇り其語も亦澱む、泣かで濟む所に泣き、笑ひ要せぬ時に笑ひ、叱るべきより聲高く叱り、喜ぶべきより意長く喜ぶ、此人間の樣より轉じ、暫時來りて無心の水を觀る、我亦心を改めざるを得ず。

我日の夕に歸り來れり。其過來し方を顧れば、早や朧ろげに暮烟は曳きたり。百峰の間に疊まる里なれば、宛然盆の底の如く、緣高くして底低く、奥家の向ひは青く平たき壠畝にして、猶ほ其向ひなる村路に傍ひて、參差たる茅屋斷ち又續けり。門前の澗流は濺き去りて此等の屋後より相分れたり。此分派の衝端に最と新らしき藁家あり、面背水流に迷ひ、樹木の裡に隱見しつゝ、如何許涼しき觀よ。曰ふ是れ奥家の舊交の分家なりと、猶ほ其左右を眺むれば。孤屋は淋しき山腰に粘し、兩簷は溪流に臨み、三四軒は獨木橋を隔て、七簷八家は長き畔路を夾みつゝ、此處彼處に散在したり。到處の溪流に飲みて、家より低き小屋の窓に、夜毎に唐碓架れり。宛然たる歸去來の山中、隣家遠きが故に淋しきならで、住居稀なるが故に緩くりたるなり、村民寡きが故に靜けきならで、事なきが故に穩なるなり。光り輝く白壁なきも、足るとを知る里は、皆自ら

富める觀あり、形を勞するか爲や壽命長く、心を役せざるが爲めに日月長へなり。童子の心は質朴にして、少年の言葉は明白なり。乙女の愛情は深濃にして、老人の胸宇は放朗なり。義理、人情、道德、宗敎、都會に賤み掃かれし心理は、皆來りて玆に隱れぬ。一夜の宿にも情を享くる、此村を過ぐる旅人ぞ幸なる。

今炊烟は茅茨を蒸し、山路の樵夫は落暉と枯薪を負ひ還り、溪下の牧童は地を捲く暮色を曳き來れり。見ずや村落晩景の生物は、恰も天上の星斗の如く、眺むる程に其數殖ゆるを。何れを牛馬と分たねと、人影前に引くは馬、後より驅るは牛なり。幾世傳ふる野歌を歌ひ、百歲期すべき顏色を笑まし、遙に屋上の烟を眺めつゝ、何れの途にも農夫は歸れり、戶々の前庭、或は明日の天氣をトする翁佇立し、或は歸る父老を待つ童遊べり。是れ此夕ぞ、陶淵明は田園に歸り。李愿は盤谷に入り、王維は網川の幽居に退きつらん、嗚呼此夕に、我も他界の我の如く、悠々俯仰して此景色と冥合したり。頓て此の闇夕の裡に、歸るを告くる犬の聲、廐を窺く馬の嘶、牧草臭ふ牛の鳴音、水を吸み去る山女の足音。遠くに繰る雨戶の響の、最も床しく聞ゆる間に、我も亦夕餉に

呼はれて家に歸りぬ。坐敷の襖に昔讀みたる、「山路日暮、滿耳樵歌牧笛聲」の古文字は、今猶ほ讀まれて殘りぬ。

嗚呼浮雲よ流水よ、吾行方も亦常なし。前週の日曜日には十九世紀の大都會に在り、後週の日曜日には、島の果なる山中に客たる、是れ將た如何の變化ぞや。洛陽の巷を飛ひ去り、葛天氏の民に還へる、其間一旬を出てず、吾形迹の定めなき、浮萍と孰れ果なき。首府に於て別れを告けし友少なからねど、今ま我此の太古の村にあり、原始の時に遠からぬ、アダム、イブの遺風觀るべき故老と共に、爐火、行燈の下に飲食せると を夢想するもの幾人あるや。聞く陶淵明か歸去來る時、滿天下之を知るものは唯淵明と其家族のみと。祖母は親愛なる笑顏を點して。

「此山中に肴なき事卿は能く知れは、別に調ゆる所もなし、何なりと唯吾滿足を味ひてよ」と。

誇るには足らざれ共、千歲の學問を修め、一世の智識を貯へ、出て當世の名流に交はり、入りては古代の賢者に遇ひつゝ、身を智識の戰場に置き、畢生名なくば止まずと期し

たる吾意氣も、懐かしき祖母の前には、依然たる孫にてあるなり。吾心に適へんとて老を忘れて立ち働らき、吾强食に滿足を感ずる慈愛の祖母に對しては、我は唯其掌中の珠に返れり。

山高ければ十七夜の月の出つるも遲かりき。然れども我晩食を了へて、門頭の溪流に架したる納涼架に出てし時は、早や圓月は兩峰の間に三竿まで昇れり。眼前の青田、微茫として空翠の如し、仰て天を望めば、一輪の秋の外目の落つるものもあらで、穗末に置ける露の玉は、熒々として星を地に貫き、其間亦行人の疎影も觀えたり。既にして月天心に來り、原の霧も亦晴れ亘れば、萬象は形を藏め得ず、透明躰は光を燈し、充實躰は影を落したるは、邵康節が清夜吟を。

月到天心處、風來水面時、一般清涼意、料得少人知。

と歌ひしも斯る夜とこう思はれたれ。

日の間は村の喘と空の搖きは鎖されたりし唐碓の音は、今手に取る如く聞えたり。其の痴鈍ながらも合奏し、粗放ながらも床しき響の、宛から疲牛の歩みに似たるは、實

に此の太古の村の音樂に適ひて、長閑なる里の休眠を靜かに囃せり。聞くほどに渠に猶ほ他の音あり、其舟に水の溜まれる太と緩き低き音なり、猶ほ他の聲あり、其舟より落つる水の太と急き强く彈く聲なり、猶ほ他に響あり、舟下り脚の上る拍子には長く、舟上り脚下る折に鋭く響く軋々是れなり。

夕暮まで四山を震ひ大木を動かしたる谷風も、今は無聲空壑に藏まりて、溪往く水のみ涓々として鳴り射々として濺けり。日中の熱にまた鎖ぢあへぬ遠家の戸より、男女の罪なき笑聲は傳はり、奥山に端なく響きて、宛も寢後れたる獸の叫ひと思しき山彦も、一聲二聲月下に落ちたり。我は今寢んとして、此景色を目に捲く折に、正面なる都屋山瀑布の想像の聲、忽然耳に活きて忽然消えたり、

一頭を枕に寓せ、六身を褥に委ね、我早や我を支へず、夜靜に意藏まる其時、善をも思はず惡をも思はず、正に是れ本來の面目と云はんも善し。喜怒哀樂の發せざる中と云はんも亦善し。我は正悟す、太初に吹注かれたる吾靈魂は至聖至妙にして神と連鎖してあるとを。微かに痴き唐碓の響に、吾躰は悠然として眠る其時、靈魂は戸外に忍

ひぬ、天上の月を採らん爲に、地上の星を拾はん爲に、清き流を嘗めん爲に、圓かの夢を捉へん爲に。

翌日我は新家の家族より呼はれたり、抑も此裡に於て、家釀の村酒は靈液と呼はれ、山雞、菜根の雜煮及び古素麺は山肴と稱せられ、葛粉團子と山芋汁は、其名既に山村美食家の垂涎を曳きぬ。今家族は料理の爲めに盡日勞せり。器具借る爲め奥家に來りし女中に聞けば、朝來主人は山芋を掘る爲に山圃に往き、主婦は清水汲まんと溪路に下り、阿娘は葛粉を圓め、阿童は雞羽を拔く爲に多忙に、一家混雜の裡にありしと、さては吾饗應のため、家靜かなる山村をも動きしなり。

我奥の家族と共に新家に至りし頃は、日は猶ほ山上にありしも、叔父なる我母の弟及び其妻、此家の分家の主人等も、今日は農事を早く終へて、先つ饗應の坐に在りき、吾影の見ゆるや否、一家の歡迎諸客の祝辭等、暫時は言語の波立ちつゝ、衆賓の坐定まるまで互讓の爲に時移りぬ、吾は推されて正坐に進み、吾右には奥の伯父、叔父、此家よりの分家の主人、吾左りには吾友なる奥の少主人、祖母、伯父の妻、叔父の妻、分家の主人の妻、及び吾友の妻等、男性女性相對坐せり。此家の主人を初め。其妻娘等は修飾美しく行儀正しく、半日の勞力を此坐に運ひぬ。

早や半時間餘立たるも、會話は唯冒頭より冒頭に移り、一個の東京疑問は他の東京疑問に打消されつゝ、諸人の心全く解けず、何となく圭角ありと覺えられたり。我謂へらく、是れ我が田家人たるの足らざる故に、渠等未だ心の戸を開かずと、去れば折々吃る村語を混せつゝ、

「都の生活は父老が羨まるゝ如く快樂あらず、父老よ、我も亦一たび各位の如く思ひたり、然れども今にして都人を知る、宛も外飾り内朽たる墓の如きを。渠等の顔は朝夕に磨かれ、渠等の衣服は春秋に更へられ、其目は眼鏡に突出で、其齡は枝によりて若くなれども、唯其外觀然るのみ、其實は苦焰を隱す爲めの笑顔、冷情を掩ふ爲めの涕淚のみ。歎息、心配、恐怖、失望、及び陰謀、殘酷等陰府の毒に、肉も銷え骨も解けぬ。問へ何故に爾かあるかを、虛空の名譽に馳せ、不義の富貴を追へばなり。其快樂は唯旅人を欺き遊女を漁し、他の不運より我好運を作るにあるのみ、塵よ

り出で、塵を蒙り、又塵に返らんと急きつゝ、自ら智慧ありと思へる一種の動物と云はん外、都人とは抑も何人ぞ。我嘗て此村を田舍と思ひたるも、今は只平和の地、慈愛の里、長壽の世と稱賛するなり」。

斯く語る言語の裡に、我は一座の顏怕の漸く消えゆくを認めしが、頓て吾言の了る頃に、笑の影は凡ての眉目に上ぼりぬ。主人は盃を我に献して、

「卿の如く話さるれば、誰か分らぬと云ふとなく、艸深き吾等の耳にも、仲間の話の如くに聞ゆ」と。

祖母は始終吾言を聞きてありしが、一座に向ひつゝ「都に居りしと誇りもせず、……學問ある丈け分りてある」と、猶ほ我に向ひつゝ「去り乍ら左程難儀の場所ならば、卿も年老いば故郷に歸られよ」と。

我は此の情餘れる一言に擊たれたれど、事皆定まれる運命なるべきことを叙へて祖母に答へ、會話の連鎖を一座に與へぬ。主人は其手の勞力の好く味はるゝを喜ぶが如く、一座も亦酒氣に因りて心開け、數年前の本願寺參詣、及び伊勢參宮の物語を以て互に興

せり、或ものは蒸氣船の龍宮の浮べる如きと、世の開けて海も亦聞きし程怖からざると、或るものは大坂、京都の家屋櫛比し、人行の騷擾なると、或ものは田舍の訛音の解し兼ねて、旅館の女中屢買物を達へしと等を述べ、過去の苦しき追懷を以て、各々現時の快樂を取れり。彼等は猶ほ當村に於ける祭禮、誕生、緣談等に關する諸々の珍事を語り出て、全村を繞れる話頭は、轉た座興を佑けたれは、歡を盡して散せし頃は、夜深く月落ち卿樹も眠る頃にてありき。

其翌朝我は又溪の中岐なる分家の主人に呼ばれたり。渠は我に來り請ふて曰く、三年前に新に張りし屏風あり。未だ誰か黑染をも經ざりし白地は、宛から卿を待ちしに似たり、願くは一筆を揮はれよと。我は嚮に眺めし涼しき家を喜び、躊躇せずして往きたるに、酒肉先づ吾前に陳べり。其客室の額には、水哉亭の三文字を書したり。都會に於て文字は今美術の名を失ひたるも、文明の世に詩の村落に漂留するが如く、此家の主人も亦古來の賓、自家讀めざる文字を以て、屏風に得んとを好みしなり、去れば我は暫時の後一絶句を得て、大文字を左の如く書きぬ。

人在溪中屋、且言脫俗寰、不知窗下水、浮夢入人間。

主人は頻りに妙と稱し、殆ど詩を解するものゝ如く稱嘆し、價なく得たる寶物なりと珍稱せり。さて又我は殆ど供養の本尊の如く、此日叔父も亦我を招けり。我は既に二日間の飲食に飽きたるも、客の辭退と主人の勸酌とは、此村の舊式なりしが故に、我も亦他の辭退の如く思はれ、殆ど帶を解く迄に强ひられたり。

嗚呼吾叔父、親愛なる吾母の弟よ。我は公言す、彼は實に目に一丁字なき人なり、此山中の代表の民なり。渠は奥家の一支なるにも拘らず、又其亡父の習字師なりしにも拘らず、學齡に於ける疾病の爲に今日まで假名をも讀み得ざるなり。渠は其手の無筆なるが如く、其心にも亦智識の首石(おやいし)ある差別の思想を有つことなし。其生涯の中、目に見耳に聞きたる此村の歷史、習慣、生活及び日毎の珍事の如き低き智識は、宛も五十音の童子に於ける如く、少しくも其思想を高むる具とならず。其れ然り、渠は實に好奇心の第一階を有たざるが故に、我は如何なる話頭を以て初むるも、渠が心を動かす能はず。渠は一顰一笑を惜しむに非ず、一喜一憂を隱せるに非ざれども、唯吾言の渠が心の鍵を

打ち得ざればなり。渠は恐るゝ所もなく、憂ふる所もなく、唯莞爾として初まり、莞爾として終りしなり。渠吾言を否定せず怪疑せず、亦質問をもせず、柔順なる耳、唯々より初まり唯々に了れり 恰々たる渠の容貌は、宛も胎內より彫られし者の如く、凡ての聲の其村と其身に懸らざる間は、我思ふ其平易なる心底と、快樂なる眉目を變ふる能はざるべし。親愛なる吾叔父よ、我は吾生涯の裡に、目に一丁字なき人の安心と快樂を吾叔父の顏に見しなり。

然れ共渠は唯識らざるのみ愚者には非ず。所謂ゆる學はされは忘るゝことなく、浮世の塵に汚れざる、天の成せる麗質を有てるか故に、事の曲直、人の善惡を判つに於て、掌を指すか如くなり。其の農業に於ては、嘗て前人未發の實利を開き。大に村民の稱讃を博し、最も有名なる悍馬を馴して、近處の壯丁の驚愕を牽きたり。其の行爲に於ては、秘密に信心するものゝあるが如く、恐懼、忌避、深慮、勇憤、各々其の時に應せるなり。渠か前年よりの願ひは、天の恩賜として良妻を得ることにありしか、今や昔し位地ありし武家の遺孤の中より、美にして慧なる、而も貞淑なる良妻を得て、相樂しめり。是

に於て三千世界の寶と云ふ文字なきか爲に、渠には他の不自由もなく、簡易なる此土の生活に、若し文字の必要もあらは、渠は忠實なる其妻の學問に賴り、妻の學問の及はさるとは、果して渠に關係なき事なり。其道德に於ても經濟に於ても、夫婦の所思密に一致し、同一心体の家族を爲せる此快樂なる夫婦は、唯久しく望みて未だ得ざる、繼嗣の出產を待ち居るなり。

我嘗て謂へり、エデンの生活は迦南の生活より平和に、無何有鄉の民は神農虞夏の民より安穩に、無爲の世界は文明の世界より快樂なりと。今や吾叔父の境遇を觀るに及びて、亦竊に無識者の生活の智識者の生活よりも幸福なるとを觀したり。孔子曰く「蔬食を食ひ水を飲み、肱を曲げて之に枕するも樂亦其中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と。蘇東坡も亦曰く、「人生字を知るは憂を知るの始め」と。蓋し世は字を學びて智識に入り、智識より空望に入り、空望より失望に入り、失望より不平憂愁の門戸に迷ふ。吾人若し字を知らずば學者たるの望なく、字を解かざれば知者たるの慾なかるべし、吾人誤りて智慧を以て幸福の權衡（はかり）とし、智識を以て快樂の標

準とせり。然れども我觀る處を以てすれば、智慧智識の探究も、亦是れ金錢の穿鑿の如く、一個の俗情に過ぎざるなり。

神の智者ソロモン曰はずや、智慧多き處に憤激多く、智識益す時に憂怨益す。又曰く神は富、財、位を以て人に與へ、其心の慕ふ所一個も其人に缺く無からしむるも、神また其人に之を食ふを得せしめずして、他人之を食ふ事あり。是れ空なり惡き病なり」と。是れ智者と富者と異類にして同歸なるを示すものに非すや。黃金を堀るもの巨万を得て足らず、巨万に巨万を重ねて猶ほ足らず、遂に地球を洞鑿し、他の世界に到りて滿足するとも、其幸福は何處にあるや。ソロモン亦曰はずや、「神を恐るゝは智慧の始あり」と、此の智慧を離れて他の智慧に走り出て、却て其智慧の爲に捉はれて迷疑の荆棘に陷るに非ずや。智慧を探るもの古代に通して止まず、前代より後代に通して猶ほ止まず、太古原始より世界終季の日に亘るとも、ソロモンの榮華と智慧を以て、半百歲の經驗を以て悟る所何事ぞ。「汝往きて喜悅を以て汝の食を食ひ、快樂を以て汝の酒を飲め」、「日の下に汝が賜はれる汝の生命の空なる間、汝其愛する妻と常に喜ひて世

を渡れ」と、唯此一事こそ智者も無智者も、富者も貧者も賢者も愚者も、共に享くべき分ならずや、智者若し神を恐るゝを知らは、無智者は固より神を恐れん、智者の信仰も天の花園に生れ得ば、況して無智の渇仰をや。嗚呼世は生活し得るより餘分に得ん事を望み、滔々として迷疑に往けり。眞實「神は人を正直者に造りしに、人は衆多の計略を案出せり」。渠等の智慧を辱かしむるものは、豈に吾叔父の無智に非すや。

看よ此の立て籠れる高峰の外に、何處の天地は移り、幾處の王國は變り、好運の翼、非命の羽、建焉壞焉如何に消長循環するとも、此の夫婦は星を負ひて山に上り、星を負ひて山を下り、相笑つて飲食すると、一年宛も一日の如く、同じ時、同じ處に常に同じく見らるゝなり。日は出て日は入るも渠等の業は勞働にして、夜は暮れ夜は明けるも渠等の事は休息なり、夕暖かに燒く爐火は、迷ふ旅人に路標を與へ、朝に蒸す家の烟は、竈の乏しからざるを證しつゝ、渠等は無智者の白顏を以て、貴とき奥家の支派たる尊敬を牽ゆるなり。

斯くて我は三日の時間を玆に費して後歸宅の念生じければ、翌日早朝此村と奥家と其家族、別けても猶ほ二三日の滯留を切望する祖母に別れたり。渠は暇を乞ふ我を門外に送り出てゝ、最終の離別を叙ぶる爲め、今少時と我を留めぬ。

「最早や此世に相見る事も今日限りならん。去れど卿も猶ほ屢々歸省すべし、母も早や老い近ければ、後悔せぬ樣孝行せよ、我には是れぞ今生の別れ、未來にて相逢ふまで、隨分達者に出世せられよ、卿の父と諸共に、卿葉の影より喜びてん、去り乍ら如何に功名富貴あればとて、必ず故郷をな忘れぞ、久々に相見ても束ぬ間に別るゝ、ホンニ浮世の墓なさよ」。

絶離の詞寸鐵腸を斷ちしあり。武士の裔剛健の質なる、吾祖母も今は老いぬ。然れども強ひて吾意を強めつゝ答へり。「祖母よ心安く在せ、祖母の世に在す間、必ず今一度歸るへし。願くは唯勞働と心配を棄て、心長閑に亘らせよ」。

祖母は涙を拭きつゝ、「ヲヽ卿か言ひ置く事とならば、何事も止むべければ、頼み少なき他人の中に必らず病氣と時候を厭へ。然らば此世の暇乞ひ、……早や日も出づるに嘸今日もや熱からん。……アヽ危なし田家路の危なさ、能く心して躓かぬ樣……」

我は情に泣きつゝ祖母の言を負ひて出でたり。遠くなるまで我れを見送る石堤の面影は、暫時屋頭の烏の如く佇立したり。宛から芒曳く流星の如く、我も亦村門の橋見ゆるまで、幾度か顧眄せしなり。橋上より最後の眺を回顧すれば、山の底に山は落ち、家の後に家は隱れて、都屋山より出づる朝日の影に、此美妙なる自然の書圖は織り籠められぬ。

白日青山裡、落花流水村、留連三日夢、追浪下桃源。

第八　追懷

誤背先君喪、百年唯泣天。
烏啼慈夜淚、爲落入黄泉。

斯くて故郷の快樂、慈愛の希望、自然の景色、漸く書卷の捲き盡され、幻影の醒めゆく如く移る裡に、我に父の死後、吾家の境遇のいと轉變せるを認めたり。渠は其の嚴格なる家制に由りて、室内の清淨、書冊の保存、庭園の掃除等、一一其規則を把りたりしも。今は兄の代となりて、諸々の床の間に手巾の及はぬ隈あり。古道具は往々毀れ、四五の冊子書庫を洩れて蠹魚と雨風に暴露せられ、毎年に剃られし松葉も蘇鉄の莖も、四人の髮の如く伸ひて、落葉拂ひし迹も久しく絶えぬ。是等不取締の觀は。痛く我情を曇らしたるが、吾母は我を慰めて、父は家内の經濟を旨とし、兄は戸外の慈善を專らとす。且つ前代の家より後代の家になるまでは、必ず沈落の日あるとを語りぬ。吾意猶ほ釋然たらざりき、何となれば吾陰氣は家内の沈落の爲ならずして、吾父の追懷にあればなり。吾父は去年にぞ逝きぬ。死者もし生者の追念より消ゆるともあらば、

此世は如何許憂なからん。生憎にも寂寞たる吾母の顔、端なく祖父を尋ぬる孫女の口、昔を忍ぶ父老の語に、吾父の面影活如し來り、生前に愛てられたる器具、養はれたる園樹、散歩の道なりし青柳茂れる河塘、夏日禾田を巡視したる涼しき樹陰に於て、渠は猶ほ生けるか如く、其慈愛なる音容、到る處に追隨せしなり。

或日我吾少弟を伴れて郊外に散歩せしが、時は早や薄暮に近く、遠山に落暉を餘し、樵夫は遙かに歸路を急ぎ、野流の裳は遠く闇み、前に連なる稻の青焔は、此晴夕を陰氣ならしめたり。此淋しき景色の裡に、我は唯無言に歩けり。吾幼弟も吾愁色の爲に默しつ、唯落日のみ轉た春きぬ。抑も兒童に逢ふ毎に、唱歌を聽きて其童心を察るは、吾習慣なりければ、今日も務めて吾意を強め、唱歌を誦せんとを幼弟に求めたり。彼は平生の怯避にも似で、吾首唱の下に「君が代」と「來子供」とを歌へり。猶ほ一曲を強ひければ、渠は歌ひぬ左の如く。

父こそは、歸りましたれ營の、暇なき身も朝なげに、
我を愛ます畏こくも、慈しみます其朝なげに、

其父如何にと我問へば。さなきだに歌の尾に涙もちだる歌者は、今は溢れて叫び出でたり。其慰藉なき絶望の悲嘆は、嘗て父か臨終の夕に哭せし聲と思へば、泣くまじと忍びし我も、天を仰ぎて落涙しぬ。弟は兄に身を投げ、兄は弟の頭を抱きつゝ、此世界に唯兄一個弟一個の如くに覺えしなり。

頓て八月十六日の夜となりぬ。我は前川の納涼に身を冷し、更闌けて退きぬ。是は我が舊時の讀書室にして、吾父は此室に於て、去年の今夜正午より二時間過ぎて眠りしと云へり。朧ろに白き圓行燈は遠く此室の四隅を闇めぬ。我は廣き蚊帳の中に、一身徒然に寢んと更衣すれば、眠けなる影法師は蚊帳の向ふの方に動けり。戸の外は凄きほど靜にして、唯天井に殖へたる鼠の族の、物に驚きて遁ゆく聲のみ、恐ろしくも礎に響きつゝ、異象を誘ふ心に事ありけなる此夜半に、不思議にも去年の今夜夢みし夢の後段を夢みぬ。

廓北の門より百武を歩みし青邱は、吾村落の菩提所なり。今日は八月十七日、吾歸省の目的の日、吾父一年後の命日なりければ、吾母諸共此處に詣てぬ。百畝の平地を圍

む林樹は、奥妙として淒陰を布き、此處に窺しこむ日影は、春日も秋日の如く、朝日も夕日の如く、況て悲しき秋の夕は、昨夜の行燈の闇光よりも、微白くして陰氣なりき。邱頂より樹梢を亘る風は地に下りさるも、太古より墓場を纏へる空氣は、冬の日よりも靜けく冷へたり。今日は猶ほ盂蘭盆會の生靈送る夕に近ければ、孰れの墓場も幾分淸淨の觀はありしも、墓前に捧けし女郎花、盆花、桔梗等、嘗て此死蔭の國を裝ひし花も萎みつ仆れて、一際陰悽の氣を加へたり。累々として立ち列びたる古墓は、誰や先誰や後ある。月日の久邇は異るも、同じく一抔の土に歸しては、唯人世の無常をぞ告る。

吾父は今此門頭に當れる新墓となりぬ。紅字に彫られし「釋善邦」なる三文字の、活如として我を眺めし有樣、抑も如何許善き名なるよ。我は吾文字の斯許生きて彫られんとは想はざりき。渠は此世に其迷兒を見殘したるも、今は其手跡の下に晏然として眠れり。さるにても眺むる間に、無明、無動、無聲の觀は、林中より暗羽を擴げて吾父の墓をも掩へり。吾母は携へたる蓮華を我に授けて曰く、「卿親しく此花を捧げよ、父は終りまで卿を呼びたれは」と。我無言の涙を以て享け、慇懃に墓前に奉じて、爲に前溪の流を汲みたり。

一　あらたにむすぶ小柴垣、
　　是ぞ世になき父がおと。
　　後にしげるはこやなぎ、
　　當世にまもる夜見の宿。

二　さびしくしほむ花かむり、
　　環に暮るゝ日ぞのこる。
　　今朝燒きうめし香の烟、
　　夕しつかに立ちのぼる。

三　父が植えたる小川より、
　　採りてさゝぐる蓮華。
　　愛たき色とその馨、
　　永く留むべき水もかな。

四　旅に六年をすきこして、
　　歸れば父の聲も名も。
　　昔語と早やなりて、
　　石を此世のしるしかも。

父子相逢はざるの怨の爲に、母も悲しく袖しぼりぬ。冥目して墓頭に座すれば、見慣れたる寫眞の顏は記臆の鏡に浮びつゝ。慈愛より慈愛に高まり、宛も過ぎゆく影移らふ花の如く。留めあへぬ間に捲かれ了んぬ。斯くて宇宙の我より消しか、我宇宙より

沒せしか自ら知らざる如くなり、天は烟の如く散り、地は落葉の如く飛びゆく、夕日は終り木枯風は遙かに過ぎ。吾心は蠟燭の如く融け、身は燒かれし線香の如く灰立し、手邊の墓の如く枯着しつゝ、茫然として眠りに落ちにき、「日も暮るればイザ玉へ」と呼ぶ、母の聲に覺されて、遲々たる心牽かるゝ牛の如く、歸る力もあらざりき。

我謂へらく父は吾家中興の祖、宜しく紀念碑を受くべき人なり。吾兄の富亦一石碑を立つるに難からずと、之を以て母に問ひしに母は答へて、兄も亦然か計畫せしも、古來石碑なき此墓場に俑を作るは宜しからす。且つ此無益のものゝ爲に、生前友あり敵ある父をして、徒に敵の怨を益し、友の嫉すら惹しむべからざるとを說きて止みぬる旨を告げ、且つ曰く、「父の墓の奢らざる代りに、兄は他の祭主久しく絕へし荒塋を、親ら費して叢墓(よせばか)となせり。即ち此の大石碑は其なり。子の慈悲善行こそ、親の爲め無上の紀念碑」。

母の先見、兄の慈善、未だ今日の如く我を安堵せしとはなかりき。吾家は今貧しき親戚に繫りあるも、吾菩提所の容易く他の慈悲の叢墓とならざる所以、斯てこそ滿つべきなれ。遠に響く鐘の聲、邱上邱下に打ち傳へ、鳥は隱れし塒より一二鳴を相唱へつゝ、讀經の音は淸風の如く、此夕暮に穢土(えど)を掃きつゝ、頓て蒼然たる暮色は路頭に立ち迷ひたり。

吾等が家に歸りし頃は早や點燈の後にして、一週忌の弔客、父の友、近處の父老、親戚等は、數の如く集りぬ、渠等は皆式の如く飮み食ひ、去るものは去り、殘るものゝみ相殘り、他の會話場を開きたり。孰れの話頭も此日に應して隱沈到にして、孰れの心底も亦此夜の如く鬱陶なりき。嚮に好く燈されし釣燈(ランプ)も一個に滅されて、此の小き世界の夕暮は來れり。朧ろに吏かれし人影は、壁遠きほど闇く大きく薄らきゆきたり。客は折々盃より飮みしも、間には涙を拭くものありき。吾父の晩生涯は、二年以前家兄よりの手紙にて略ほ知りぬ。曰く隱居たる父の快濶なるは、主人たりし父の嚴急なりしに似ず。曰く其嗜める酒量は減したるも、下物常に一種にして足らざりし。曰く放快斯の如くにして年老ひし甲斐もありとて、近處の敬愛加はりぬと。然して其他の細目別けて其逝前の生活に於て知る事少なかりしか、今や一坐の應答に由りて、隈なく我に告け

られたり。

蓋し我父は一生の全力を少年の時に盡して、半世に一家を起したるか故に、十年老いて見えしも是非なかりき。且つ其嫡子なる家兄の已に肖さりしことを、痛く心配せし故に其退隱即日陶然として衰へしも、亦必然の理なりき。是より後父は俗界の人ならて一心宛から清風朗月の如く、唯快樂に飲み喜悅に食ひつゝ、其口よりの言葉は皆笑焉のみなりしとよ。嘗て圍碁の友の訃音に接せし時の如き、大に絶倒して悲哀の使者を一驚せしめたりき。門前に魚賣聲を聞く時は、籃諸共に買ひ盡し、家人の驚愕を見て亦啞然として大笑を發し、唯云ふ「渠買ふべく願へば」と。故に魚商等は吾家を以て生活の樹とし、相呼び傳へて日毎に來れり。家兄は竊に渠等に許すに、其不在の時は分量を定めて置くへきを以てせり。兄は亦父の短かるべき餘生を遺憾なからしめん爲に。門前を過くる村人にして、父の齡に近きものを請して、父が當坐の客たらしめたり。蓋し父の友は父の爲に來り、兄の孝道知るものは兄の爲に來りしあり。其の友の家を訪ふ時は、招かるゝにも招かれざるにも、或は一日にして還り、或は半日にして還り、

又往きて直ちに歸る時もあり。謂ゆる興に乘じて往き、興盡きて還れるとにありき。近處の父老、爲に童化仙者と稱へしとぞ。

斯かる無邪氣の遊夢の裡にも、漸く掩ひ來る死の蔭見えければ、兄は其前一年に於て、佐田、宮野を初め、親戚知己の許に父を負ひ、暗に遺憾なき訣別を了へしめ、且つ其の最も好める演劇に別るゝ爲め、家兄と宮野の少兄と、十里遙かなる博多にまで父を負ひ往き、其次に寫眞師に詣り、今日吾掌に存せる肖像をすら採りしなり。嗚呼父の生前、我は唯吾二兄の孝道に賴りしのみ、遙けき土地に何をも知らで日を過ぎしなり。」

遂に其翌年の夏、父は暑氣に中りて病みたり。是より先き父が隱居の室は定まり居りしも、童化したる心には、餘りに徒然なりしが爲めに、渠は猶ほ主人の坐に起居したり。或る太と熱き日の夕、父は常の如く酒杯を取りて口に接けしが、旨からじとて他の美酒を求ければ、兄は其盃を取りて嘗、少しも異味あるを覺えさりしかとも、言はるゝまゝに最好の酒を需めたり。父は再び嘗めたるも、盃を手より棄てつゝ、「是も亦美からず、今夕は酒欲しからす」と低語せし時、一坐始めて大事の來るに驚きしなり。斯て家兄は

「然らば父よ奥室に於て改め飲まん」と、母を請て父を奥室に扶け入れ、撒水管を取りて庭に下り、樹木に灌ぐと童兒の如くし、自ら絶笑して曰く、「父よ如何許面白からずや。」父は其を見又他を視、徐ろに答て曰く、「毫も面白きとなし、吾子よ休め、往きて卿の食事を取れ、努(ゆめ)な家業を怠りそ」と、嗚呼止んぬ、此世に在りしは五十七年、其子を愛でしは三十一年、日は落つる時に正躰を顯はし、火は消ゆる時に燈心を現し、人は死なんとする時其言や善し。今此世と其子を棄る時に、笑に狂する父とても、如何で一度本心に還らざらんや。是れより後父は一變して涙の人となり、今日の對(むかへ)家の老父の如く、言語みな泣くはかりなりき。別て我を聞き、吾音信を得るときに咽びしと云へり。

我下總にあるの秋、家兄は我に書きて父の病を告け、且つ輕症なれば憂ふるに足らずと言ひ贈りぬ。其書中に云へり、若し暑氣引ともならば歸省すへしと。讀過して謂へらく、父若し暑氣の退くと共に逝く事もあらばと。再讀して轉た心動されは、是を以て此地の友に示したるに、我か爲に說きて云ふ、避暑の日來らば、他行せずして歸省すへしと是のみ、別に疑義あるとなしと。實に然り、我如何なれは斯る迷疑を生せしやとて相共に一笑せしとなりき。然して當年我に暑引なかりし故に、歸省し得さる旨を家兄に返事せしなり。嗚呼此間故鄉に於て、父は一たび臥して復起たす、吾名を呼ひて臨終に至り、訪客は事の哀れなるに面を背け、母は父子相違ふの不幸を歎き、兄は唯爲す所を知らざりしとよ。去れと此世の念去り、天國の光見へし時、父は安然滿足して、宛から無心の童子の如く、豐かに眠りに入りしとよ。

父の生涯は斯くして終へぬ、一座悲しく默しつゝ、此の涙の室に於て涙なき人はなかりき。暫時して兄は曰へり、「父の怨卿の哀、是れ皆吾落度にして今更申譯もなし。去り乍ら我徒らに卿に怠りしに非ざりき。我は當鄉の甚六父子に起りし、不思議の例を確信したり。卿も亦知る如く、夫の西南の役に、甚六は輜重に徵されて戰場に往きし後、其子己太も跡追ひ往きぬ。田原坂落城の夕、己太忽然として歸思を生じ、暇を乞ひて徹夜に急ぎ、歸り來りて其家に父の訃音に遇ひしは亦卿の知る所。故に骨肉相別れて死する時は、死者の不思議必す存者の身に顯はるゝを信じたり。今は吾意到らずして、家庭の憂を貽せしと遺憾至極」と。我曰く「吾、兄固より定まれる運のみ、今更何ぞ心を痛め

ん。聞き給へ我も不思議を語るべし」と。今や一座の目我に向ひて怪しみ待てり。我曰く「當時我は何故なりしや知らざれども、自ら訝るほど涙脆くなりし。天の色、地の聲、日中の喘き、夜間の休みも、皆我が爲に默思すべき一大問題となり來りぬ。別けて夜の夢は晝猶ほ幻影を浮へ、烏啼の一聲すらも世界の變故を告る如くに聞えしなり。去年の昨夜は、吾寓居も太と淋しき夜にて、我は何事にも慵しとて宵より寢ねたり。然れども夜間の殘熱、默思の頭腦、煩悶の爲に、睡りもせず覺もせず只管轉輾反側したり。我は殆と自ら茫じ、起ちて窓押して夜の空を怨じたるに。今入る月の僅かに殘れる景色、宛然たる舊時の看に、客地にあるを忘れつゝ、轉た暗愁の淵に沈み。「故郷も今頃月は落つる哉」と古吟しつゝ、何となく落膽の思に嘆息せしなり、漸くに眠に就き、既睡夜忍ひて父の掌上より吾長妹を奪ひ去りしと見れば、此は是れ一場の夢なりしかとも、覺め來りて實事の如く、心動きて止まされは、翌朝我を愛したる其家の老母に語りけれは、老母も亦事變の豫言なるべしとて、故郷に書くべく勸め、遂に公然夢物語を端書と爲して、耻ぢざる次第となりしなり」。

兄は我を遮りて曰く、「さて其書狀よ、父は早や柩に在り、親戚相圍みて歎きし時に、其の書狀の着きたれは、さてこそ「卿歸れり」と、讀みもせて柩の前に捧けつゝ涙に巾を濕したり。

今は當時の悲哀の復活せし如く、一坐の客或は咽ひ或は面を背け、或もの は默して死せるが如くなりき或は繼きぬ。

「十七日の夜は一際隱氣勝りき。家の老母は徒然に堪えずとて我を其坐に請じ、少母も亦相集ひしなり。夜は早くも九時となり、老主人は眠り少主人も寢ぬ、多くの女中も亦各其夜綯の室にて假睡し初め、唯吾等三人の聲音のみ此深夜に響きぬ。浮世話終へたる後の話頭は、唯我が過去の履歷、現在の地位、未來の軌道、別けても事業の去就細君の撰擇等の問答なりき。追懷すれば當時失笑すべき愚痴と、絶倒すべき妄念を語りたりしも、吾陰沈なる口調と熱心なる言語の爲に、能く聽者の耳を動かせしなり。夜は既に前夜の夢の頃となりしも休まず。偶々老母に故郷の母を問はれし時、我は端なくも涙の滴を浮ふる其時、全身に栗を生し、悲哀心中より溢れたり。老母は我が涙

を認め少母も亦俯(うつむ)きて涙を出だせり。老母は吾哀情の鍵を打ちしことを悔ひ、悲哀の極度に到らぬ前に夜話を了へたり。我は吾室に退きて熟思したるも、故郷の母なる語の、何故に斯はかり悲しきかを解せざりき。既に臥床に就きたるも、數日前より熱しつゝありし腦の、今や夢を容れざる程に燒け、休み少なかりし目も疲れ過きて睡眠を絶つに至り、影暗き燈すら瞑目せる睫を徹りて、瞳子に寫ること白日の如く、眼の暈(かさ)は目を開く壁に現じぬ。起きては落ちたる月の餘芒を眺め、坐しては隣家の鷄鳴を聞き、復た臥して時計の音を數へ、眠らんとしては遠寺の鐘聲に呼はるゝ、其は猶ほ忍ふべかりしも、我は理由を知らざる愁歎の爲に、其夜も徹宵眠らざりし。果せる哉其後の手紙によりて、我も亦旅なから父の喪に通夜せしなり」。

坐の人々は我に言はんとして言ひ得ず、折々顔を揚けては又俯きたり。我亦續きぬ。

「此頃の天氣は日毎に晴れて雲なかりき。然して腦病者の腦は宛も晴雨計の如くなるに、十八日の晴天にも拘らず、我は殆と囚人の如く鬱(ふさ)ぎたれは。自ら强めん爲に快樂の塲なる野外に出でたり。其は夏去ると遠からざれは、森の景色も猶ほ青く、秋にはあ

れど野邊の水は猶ほ歌ひて流れぬ。鳥の聲は樂しく誘ひ、相識る農夫は敬禮しつゝ過ぎゆきしも。何處にも吾顔を拭く色もなく、痛める心を拂ふ聲もなかりき。遂には秋日の熱に腦を燒かれ、我は其光線に目を眩まされて、邊りの丘の古社に避けたるも、樂しかるべき風の音も、涼しく寄する樹の蔭も、我には魔力を失ひたり。近頃の憐れの素振に、慈愛深き老母は轉た憐みを加へて、或は我爲に眞紅の西果を截ち、或は寶庫に古書畫を取り、或は葡萄の美酒を酌みしも無益にして、我は宛も蜉蝣の如く日暮に近きほど暗恨に沈み、食事は咽を下らざれは、此夕も未だ宵なから臥戸に入れり。老母は我に睡眠藥を與へたるも眠らず、按摩を呼びしも眠らず、遂には醫師を迎へんとまでしければ、我は泣つゝ其厚情の身に餘るを謝し强て辭せしも老母は聽かず。我を起して共に語らしめしが、我は只泣くばかりなりき、猶ほ記す老母の言に曰く、卿の我家に來りしより我は實に卿を吾子の如く思ふなり、曰く卿の兩親の日夜卿を懷ひますを察しつゝ、吾子に勝りて卿を思へば、欲するまゝに言ひ告けよ。曰く近頃聞けは父病みますと、卿の憂の程も知られぬ、去れど苟且(かりそめ)の事ならば、さのみな心傷め玉ひ

そ、あゝ卿の如き優しき人を如何で子とする緣はなきや。儘ならぬ浮世と云ふとも斯ばかり心やさしくは、などか出世の途なからむ、我は卿の出世と果報の爲め、疾くより神佛に祈念したり」と。一語は一語より深く、恩愛肝に徹する程、我には答ふる語に難く、唯悲しき涙のみ答へぬ。老母は殆んど慰め兼て聲を作て、熟々我を起しく曰く、三百里とは耳に聞くたに遠きものを、斯ばかり弱き心を以て、如何あれば故鄕を出られし。卿もし他鄕に病まは、父母は其病を憂ふとは申さずや」と。兄よ母よ、我は此一語の爲に蘇生して、其夜より安く寐ねしが、是の夜は葬式の夕なりしとよ」。

此時一人の父老は曰へり、「抑も不思議とは吾等無學のもの、事とのみ思ひたるに、久しく都に學問せし身に、不思議あるこそ不思議なれ、實に親子の緣の深さは、さても學問の外ならん」。

我曰く「猶ほ此に止らず、昨夜の夢に、去年盜賊の爲に奪はれつる、長妹の門前に歸り來るは何の祥ろや」。

一坐皆默せり。夜の月は既に落ち、唯時々青線を曳く流星のみ空を飛へり。地は漸く

冷へて殘る螢の淋しく過き、唯虫の鳴音のみ遠く聞えぬ。老母の一人曰く、「失はるゝは死の日にして、歸るは一年後の死の日、抑もや如何なる祥なるへきか」。

是の秘密なる疑問に於て、一座の心は一變し、或ものは長妹の父の生命なりしとを云ひ。或ものは長妹未來の浮沈を兆するを信し、或は其歸るは死してか生きてなるかを問ひ、各其思ふ儘に判斷せんとせり。吾母は涙を拭きて口を開きたり。

「世に仇なきを今ろ知る、卿か旅に出てしより、卿と云へは皆涙なりし、聞けは卿は悲しき日にも、母より優しき情に慰められしとは、亦有難き幸なりき。再ひ其方に逢もせは、吳々も卿か母の感謝を傳へよ」。

既にして又曰く

「袖ふり合ふも多少の緣と、況して親子は三世の緣と聞けは、今相去りて千里なるとも、生死の際如何にろ不思議なからずやは。手紙の誤解、落月（おつろつき）、幻影（まぼろし）、端書、及ひ通夜の涙、皆是れ不思議ならぬはあらず。去れども其の一端の不思議なるか故に、全端に事實を求めば、迷を重ぬるものに非ずや。娘は今厨にありて働かすや、世は去過を

尋ねんより、未來を待つこそ宜けれ。」

第九　離別

青山横北郭、　白水遶東城。
此地一爲別、　孤蓬萬里征。
浮雲遊子意、　落日故人情。
揮手自是去、　蕭々斑馬鳴。……李白送友人

已ぬる哉浦島太郎の龍宮の三百歳も三日に覺め、リップの山中の一百年も一夜に過ぎたる如く、我も亦た二週間の故郷の幻影を、一呼吸の如く暮したれば、今は唯た上京の用意として四日五日の餘りしのみ。親切なる吾友は、此の時間をさへ長からしめんと、酒瓶及び村落不時の用意にとて、學び置ける樂器を携へつゝ、交る〳〵訪ひ來りぬ、三味線の音は陽氣にして揚り、横笛の聲は清越にして朗かに、洞簫の響は陰氣にして籠りつゝ、各其の人と其の嗜好の儘に奏せられて、皆我が爲めに名殘の曲とはなりぬ、

然れども吾心底に思はず忘れず繫ける約束は、吾戀人との再會にありければ、今猶ほ

日子のある間に、一時も永く留別し、一時も遥く訣別せんと急ぎ出てぬ。家族は平生の靜着なるにも似ず、今日は我歡迎の爲に動き、叔父は親ら座を起ちて、禮儀の座なる客室ならで、親愛の場なる其臺所に我を容れぬ。曾て獨孤なりし大團扇も、今は子孫大に殖へて、我も亦其一個を把りにき。叔母は酒を温める爲に立ち、娘は織女星の如く織れる二階を降りて梨子の下に走れり。數日の間に梨子の味の勝りしとよ、未だ熟するに至らざるも、熟せざる他のものよりは甘美なりし。

叔母は問へり、「何時上京する」と。我答へり、「多分三四日の後ならん」、曰く「去らば又何時歸省すへきか」と。吾前途の運命若し我に毎年の歸省を許すを豫言せば、我は好んで明年を約して、屢請はるゝ一年一回の望を滿たすへきも、さもなくは我は苟且の言を以て、當座を濟す能はざりき。渠等か屢一年一回と云ふに由りて、我は知る、此の兩親の心に明年若くは明後年に於て、成就さるへき秘密の目的あるとを。然れとも此の望多き明年と吾歸省と、果して一線上に落ち合ふへきや否。是は我知る所にあらざる故に、我は眞情を以て答へたり、「成るへくんは明年も亦必す」と、父母は熟々我首

府の事に多忙なるを察し、又我が故鄕の愛と此家の快樂に疎からざるとを觀てければ、今は强て再度の歸期を以て我を責めざりき。去り乍ら此日は何とおく淋しく、前日の宴に溢れし笑顏、好言、光れる眼、今欠くる所はなきも、悲しきものは離別なり。詞の谷なる情より言葉の泡の浮き盡せは、底は則はち涙の谷、波たつものは暇乞の名殘にて、一座は漸く無言となりぬ。

日も熱し初めければ、叔父は我に假睡せよと、先つ坐を起ちて眠りに往き、叔母は用事ありて隣家に立ち出で、後には處子と處女のみ殘りぬ。戀人は器皿を藏する爲に。我は默思を取る爲に。我若し渠に問ふ事あらば、但しは渠より請ふ事あらば、語るは今ぞ其時なりき。然れども我は渠を知り、渠も亦我を知る故に、今更に相問ふ事もなく、唯々無量の愛の裡に、此無言の時をぞ過しぬ。

日は未た亭午ならざるも少兄は野より歸れり。渠は此吉夢の中たる我等を窺きつゝ足濯ひ、然る後我を客室に呼ひ、吾上京の日と再歸の期とを問ひ、併せて日子の許す限り滯留すへきを求め、然る後我に曰へり。

「我は古き端なき約束を、守るべきものとし記臆せる、卿の信實と節義に感す。當時我卿を博多に送りて歸りしより、一層の注意を以て吾妹を看護し、唯卿か歸省の日を快樂ならしむるの念より外なかりき。今渠は年立ちて卿に見ゆる所の如し、然れ共卿は唯其一週間の妹を見て、未た一年間の妹を知らす。渠は今健かに見ゆるも、其眼は未だ全く癒えす、其身も亦脆く寒暑に堪へず。斯く云へは吾意甚た無情にして、大に卿の信實と妹の貞操を傷むるに似たれど、二人の幸福より云ふ時は、我は卿の胸より妹を放たんとを望む、唯此のみに非ず。卿と妹と遂に好配偶にあらず、妹は固より村落の智識、吾鄉の有筆たるも、要するに農家の妻にして、決して首府に筆執る人の內助にあらす。今日に於て渠は唯卿か弟の妻にして、卿も亦首府より娶るべきを宜しく思ふなり。

今や天上に上らんとして疾くも梯子を外されつゝ、我は唯胸裂くばかりに震ひたり。今日まで我は唯今年の夢の、明年の實となるべきとを期し、吾戀人の隱れし光の陽はに照らす時來ぬべきを待ちしあり。吾心情の他なきが如く、渠の心情も亦一圖に我にあ

りとのみ思ひき。今聞けば其容貌は紅葉の如く冬に枯れ、其美目は露の如く風に消ゆき、其心さへ亦我より外にも向くへしと。嗚呼是れ何等の語ぞや、焰ゆるばかりの熱心に、斯かる言葉を聞くならば、誰が腸か斷たさらん、誰が琴か裂けざらん、忠告を謝する涕は出でゝ、身を絞る血こそ流るれ、叔父の歡迎は何ぞ、叔母の心配も將た何ぞ、戀人の無言の情波は、果して何の光ぞや。皆是れ當坐の挨拶、吾情を釣りて喜ぶ都人の輕薄か。其れ然る乎其れ將た然らざる乎。斯くて我は迷疑より迷疑に下り、殆ど暗鬼を呼ばんとする時、漸くにして我に歸り、少兄に問ふて曰く、

「親愛なる我兄よ、卿の注意の至れると忠告の辱なきを謝す。我は益卿の賴るべき骨肉の情斜ならざるを知る。然れども今直ちに卿の忠告に從ふ能はず。吾決心を爲す前に、願くば二三の疑點を明めんと欲す。」兄は曰く「固より腹藏なく問はるべし」。是に於て我は問ひぬ。

「叔父は其娘を愛し賜ふや」。曰く「問はるゝまでもなし、今に殘るは渠のみなれは、父母は一粒玉の如く愛てたり。然れはこそ其眼病の爲に憂ふるなれ」。曰く「叔父は亦

我を愛し賜ふや」。曰く「然り父か卿を見る他と異るは、前日に於ても知りぬ。渠は既に飽まて洪水の跡を觀たり、然れども猶ほ夫の熱き日に卿を案内せり。古風なる吾父か故なく費さぬ時も汗も、皆卿の故に流せるなり」。曰く「叔父既に其娘を愛せば、必ず其を健かなる花嫁とも眺めらるゝこそ尋常なれ、如何に之を墨染の尼とせらることあらん。其愛にして、又我にあらば、固より我に病人を負はせんとは思はれさるへし、卿は然か思はずや」。

兄は未た服せざるの顏色を以て言へり「然か言へは然るへくも思はるゝなり。然れ共首府に娶らは才學ある美人もあるへく、且つ里近けれは、往來にも便利多きを思へはこそ」。我答へぬ、「卿は渠を才なき色なきものゝ如くに語るも、我は決して爾か思はず。唯渠に欠くる處は學問なるのみ、然れとも我を以て渠が心を見るに、宛も穿たざる井の如し。唯少しく金錢を懸けなは、無量の水は湧き出へし。我嘗て學問を思ふ、「妻たるに太と小き事なり、才と色とも亦甚た誇るに足らずと」。

「蓋し妻を撰むには其妻の人巧を擇むより、寧ろ天賜を擇はざるへからす。何となれは

人巧は買ふべきも天賜は變ふべからざればなり。世人は多く金錢、門閥、地位より妻を求むるを非り、乞食婚姻と名けて賤しみ、學問に娶るを以て賢しきとと思へるも、我か見る處を以てすれば、學問を娶るは金錢を娶るに異ならず、學問は形變はれる金錢にして、之を娶るは他の門閥、地位に於けるに均しく、人巧を娶るものなればあり。色を求むるは世の笑ふ處なるも、色の天賜なるは賤しむべき金錢の比にあらず、才を擇む亦人巧の學問を採るよりも勝れるなり。然れども天賜の最も美なるものは、才と色とにあらず、唯愛即ち是なり」。

「兄よ我が竊かに喜ぶ處は、吾妻に求むる吾は愛にして。吾妻に與ふる所も愛なるにあり。愛は天賜の極美にして、才と色を求むるよりも遙かに罪なく、遙に幸あるとなればなり。吾戀人の學問なき、我に於て何んかあらん。若し世間隔たる他人の裡に、故鄕の快樂、家族の快樂、朋友、親戚の快樂を棄て、親しく我に從はんとならば、是れ其性命を我に懸けたるものにして、唯我は其愛に居るべし。我も亦學位、位地、富有其一あるに非ず、未だ家を成すにも至らず、吾手未だ物あらざるも、吾贄は常に在り、

即ち我身と魂と是なり」。

「吾兄よ身と魂とを輕しと謂ふ勿れ、世は黄金の贊を有つ、此の贊を以て此の妻を買ひ、他の贊を以て他の妻を買ひ、贊盡るまでは妻を易ふるにあらずや。我吾生命を以て吾妻を買ふ、吾生命に二なければ、我も亦妻を易ふる能はざるべし」。

「我等の世若し波上の旅ならば、我は吾妻の船とならん、但しは沙漠の道ならば我は芳草とも香花とも清水ともなるべく、若し烏羽玉の闇ならば、我は杖とも柱ともなるべし。若し天我等を祝せば、我は我園の樹となりて、吾戀人を花冠に飾るべきなり。縱令ひ事吾口と違はんも、吾眞心は然るなり、愛は汝を玉にする其愛をたに吾衣にせば、學ばざるとも何の疵ぞ。吾生命さへ渠にあらば、渠が學びの費は、生命の裡に含まずやは。我等不幸にして貧あるとも、人間の生命は神の國の言葉、其は價なしに受くべきものと讀みしものを」。

「吾兄よ仰ひて楣間の額を看よ、太とも便なき破船の書ならずや。我は常に人世の行路難を嘆するとなるか、兄よ許せ、未だ此家の如く廻瀾怒濤に夾まるものを聞かず。嘗て富有なりし親戚の秋月なるは仆れ、堤おるは衰へ、咸宜なるは絶へさること縷の如く、入地なるは朽ちたる繩に似たり、唯此家のみ今岩の上に立てるも、而も叔父は秋月に嫁ける長女、咸來に適ける三女の非運の爲めに痛めり。唯々卿の妻の無難なると、吾戀人の未た運命の書なき白紙なることの爲に、幾分か其心慰めらるへきも、渠をして遠く音容の外に取りては、叔父の徒然果して如何。若し吾非運の爲に此の鳥をさへ傷むるとあらば。其悲哀も亦將た如何。兄よ吾は能く過去に、現在に於ける、叔父の嘆息と其心配を知る。然り過去、現在の痛苦の爲には、叔父か笑ふ時に叔母は顰み、叔父か言なき時に叔母は怨し、父母默する時に、我は破船の下なる二女の涕を認むるなり。二女既に運命に棄てられ、今父母の悲みとなる。我も亦之を知りつゝ、僅に殘る此の家の光、最後の望なる其の愛娘を捉らんとす、我豈に其心せすして可ならんや」。

此の時兄は微笑して答へり、卿の思慮の周到なるを謝す。斯はかり深く心を寄する吾妹を、卿が手より誰か奪はん。然れ共注意せよ、是等の言多くは少年血氣の焰にして、他日自から消ゆる時あらん。唯々今より心して責任を帶を緊めよ」。

二人相默すれば一家靜なり、少女は其機にあり、叔父は正に眠りに沈み、叔母は尓だ他より歸らず、唯兄嫁が晩食を支度する厨の音のみ響きぬ。頓て日は暮れ、戀人は復た機より下り、叔父は醒め叔母は歸り、其の夜の酒宴は前夜の酒宴の如く、尋常の話頭より起しも。亦今日の酒宴の如く再ひ涙に了りしあり。

翌朝我夢より醒めし時、喟然として初めて思ひ當るとありき。竊かに謂へり、我在鄕の日は少なくも十五日以上、燭を秉りて遊ふ古人の如く時を愛せば、確かに一ヶ月の事業を爲すへくありしなり。若し我今少しく我と戀人の境遇を思ひ及ぼさしめば、此十五日間は實に畢生の大時期、記臆すべきの時となるべかりき。嗚呼我何故に吾戀人を携ふる心を生せざりしや。何故に其父母を病まし、戀人の心を焦し、自からも思ひ惱みつゝ、渠等に申し出つることをせざりしや。若し優々として日を過ぎつゝ、猶ほ自から其人を愛すと云ふも、却て是れ戀の仇ならずや。嗚呼今は何事も後れたり。今は早や其日なく、事既に過ぎしなりと。我は此の殘念の爲めに宛かも好夢の醒めたる如く、茫然として途方に暮れ、戀人の顏も今は却て我が意氣なきを耻かしむる如く聞えぬ。

既にして又思ひ廻せり、吾此の行は尋常一樣の故鄕の訪問にして、若し特殊の目的ありとせば、是れ唯亡父の墓參の外なきなり、此目的を以て歸省せし事なれは、嫁娶の事に心なく過ぎたればとて、何人の前にか愧つへき、我は未だ嘗て誇言を爲さず虛飾もせざれば、今日濾かに人を欺き、自から欺くべきにあらず、事には皆時あり、人其時を作りもせん、去れど平素の所思あらで、由なき機會を恃みて畢生の大時期を作るは、何人の手か之を能くせん。回顧すれば今日まで、吾事業に於ける主義は、自から巧遲の一線を曳き初めたるに、如何でか斯る大時期を、今拙速に沒了すべき。然らば則ち今暫時別かれて時を待つこと當然なれ。去れと又考ふれば我は今謂ゆる實の谷にあるにあらずや。然り我は今實の谷を眺め過ぎて、空手に門戸に來れるなり。梨子は今年に實り、戀人は我を待ち、兩親は我に諷する時に於て、如何にか工夫あるべかりしに、無心に過きしとの愚さ。今は絶へず活如に響きたりし琴線も、忽にして音なく緩み、此家に於ける過去の言行は我を責め、嘗て端なく溢れし秋波、笑顏、好言等は、功能

ありしほど恥辱となりて、吾顔を色なくなしたり。嗽口、朝餉の折に叙ふる、叔父叔母の追從も、亦我を慰藉するの力なかりき。

幽懷不可寫、去行濤江曲」とは。斯る折の所感ならんと、家の後門を出て、洪水の餘波に壞れし河塘を歩し、僵樹の下に東山の日を迎へ、露けき草路、緑蕪、青藍の野を經過しつゝ、仰て屏風山の朝暉を眺め、古村の墓場の眠を弔ひ、歸り來りて納戸を窺がひ、叔母が親しく其娘の髪を結ふを見て、始めて豁然迷ひより醒めたり。吾戀人の髪は其手自ら結ひ得るなるに、今日は吾離別かればとて、叔母自から手を下せるなり。嗚呼我戀人は如何許、此家の秘藏の娘なるよ。然り其二人の姉の、回し難き非運に奪はれたるか故に、斯くも殘りて寶玉となれる其娘に、我如何なれば一朝夕に主たらんとするや。未た首府にかて都人たる基礎立たず、故郷には飾の錦の輝かさる吾今日の運命は、未た戀人を求むるに足らす。我か情事に迂濶なりしは、其花に手の及ふまて長せざりし故なり。花を見つゝも花折る心のなかりしは、是れ其遂に我花たるの念固く、又今こそ花に及はされ、一年立たば吾手は確かに伸ぶべしと信したればなり、嗚呼是れ愛によりて愚に歸りし思慮なるも、吾笑顔を生かせしは、此の一點火なりしなり。此の眼を以て觀し來れは、戀人の愛我を勵まし、我を耐へしめ、兩親の望みは我を興起せしめ、晴々たる秋立ち初むる朝暉に我も亦希望の人なるを覺へしなり。

我は起ちて歸京の第一歩を此家に初め、懇慇家族に別れを告け、確かならねど遠かるましき再度の歸郷を約しつゝ、「去らば」を與へて「去らば」を取り、門外に家族を殘して出て立ちぬ。我を見送る戀人か竊かに浮める涙の珠に、我面影は宿りてあらん。其の清き露には、吾生命をも浮びなん、君よ歎きそ遠からず、又會ふへけれは。

一　唯一年に一度を、　　逢ふは別れの初めぞと、
　星の逢瀬と墓なきは、　　人には言へど我ながら、
　六とせをこえて來つる身を、　　悲しきものは名ごりなり。
　あわれと君も思へかし。

三　人目の關にへだてられ、
　たのしく語る由もなし。
二　別れは易く逢ひ難く、

言なく君に逢ひぬれば、
言なく君に別るかも。

四　默すは愛のあまりぞと、
昔しも云へばもろともに、
云はぬは云ふにいやまさる、
眞心かはす外ぞなき。

五　あだし女のたはれける、
都すまひのわびしさに、
君が姿と寢る時は、
我は其日の亭午に吾家に歸り、速に出立の用意を治め、猶ほ旅中の讀料にもやと舊書庫中を點檢し、必要と思ふ者を採りし後、小弟を呼びて渠に其鍵と目錄とを讓り、猶ほ此

六　去らば戀人顏見せよ、
悲しきとてなうつむきそ、
君が面影今一度、
胸の鏡に寫りてよ。

七　路にこぼるゝ我なみだ、
枯艸そめて來ん春に、
花つむ君が手の裏の、
かほる嫁菜に生へよかし。

床あたゝかき夜半の夢。

書庫の甚だ貴き時、遠からず來るべきを言ひ聽かせ、渠を助けて曝書を爲さしめたり」。既にして吾滯留の此半日に縮まるを聞傳へて、忠實なる鄕黨は幾交替して吾家を訪ひぬ。裡に一人の老衲ありき。渠は我兄の園藝、置酒、郊遊の友にして、其愛する獨子は、首府に於て我に侍りければ、渠は常に「父子隔りて君家の恩とおると、宿世の厚き緣ならめ」とて、常に吾家に謝したりき。渠は吾家の珍客を祝し、其子の消息を得る爲に吾歸省の即時に來る魁なりき。吾滯在の間渠は殆ど毎日の如く訪ひ來つゝ。家貧しけれども屢鮮肉と美酒を携へ、常に吾家に對する赤心を寄せ持ち來りぬ。渠は實に近處に隱れなき琵琶法師なれども今は老いたり。時には輿に乘じて彈ずるとあれども、琵琶のみ彈じて親ら歌はず、其琵琶は益々古く、益々好音を發すれども、漸く近處の少年の玩具となり了らんとせり。今日渠も亦離別として、雞を割き酒を携へ前後の會者と共に一大團欒を成したり。渠が家より琵琶を携へ來りし者ありて、宴酣なる時之を渠が前に置き、「一曲所望」と先づ喝采せり。事の不意なるに法師は暫時呆然たりしが、其獨子の主人の祖道あればとて、衆客の所望の拒み兼ぬ、例の如く一二曲の短歌

を聲なく奏して喝采を取れり。宴止みて後、猶ほ他の二三曲を强ふるものあり。法師も辭せず、醉聲もて數曲を彈きたり。最後に我は今一曲を奏すべく請ひたるに、興盡きたりと辭したり、我其飽過きて情げなるへきを想ひつゝ、親ら曹達の一服と冷水の一盃とを取りて再び請ひたり。渠も今は拒み難く、琵琶執りて調子を新ため初めぬ。此日は夕立の雲空を掩ひて蒸し、且つ酒後にして人衆かりければ、我は親ら法師の爲に團扇を取り、正面に屹坐し扇きつ渠の顏を諦視したり。渠は吾熱心の爲めに生氣を蘇し、坐を直し、面を改めて、眉目明かに、胸宇より一撥下して、果然たる大音聲に彈じ初めしは、源家の兩遺臣、亡君義朝の菩提所に期せずして相會し、初には源家の不運を嘆じ、次には源家の再興を圖り、最後に二人天日を指して誓ひつゝ、宛も一人は死し一人は孤を立つるの約を確め、各手を分ちて其責任に赴く一段、痛快、豪宕、沈鬱、悲惋、忠臣の腸、義士の魂、亡國亡君の怨、四絃一聲の裡に裂け了りぬ。坐に曲中の人の如く、我も亦心の鍵胸の戸碎け、頭を擧げて落涙し、唯悵然として言葉もなく或は前日の參詣を思ひ、或は野間幼弟との痛嘆を追懷し、孤憤半は沈愁の裡に流れたり。少弟も亦悄然として唯吾顏のみ護りてありき。

默然たる滿堂未だ賞讃の聲を揚げざる間に、今迄凝滯せられし玄雲、空を捲きて晝暗く、颯々然として風地を擊ては、白雨落ち來りて地を走り、椽を打ち軒端を敲き、近樹騷き遠林搖き、須臾にして倒盆の驟雨を鼓舜しければ、坐客皆驚きて四散し去りぬ。我も亦幼弟を提へて曝書を藏めんと急ぎ、又もや渠が心の澹然無欲なるを憐み、所持なくして凡てを所持せる如くなるを愛し、大卷小册未だ一時も彼が嗜好を引くに足らざるを嘆じたり。我曰く「時は明日又都の方に往くべし、又何時逢ふべきか知らざるも勉めて學問に進み、又遇ふ時は是等の書册を讀得る程、上達して居さるべからず。其時には我は必ず卿を東京に迎ふべし、我は愈明日より都の人となるべければ、常に我か幸運を祈るべきぞ」、彼は始に悲み、中には喜び、終には例の如く背面したり。如何なれば渠は斯はかり我を泣かしめ、如何に久しく童子に似たるや。去れと尙幼なければ是非もなかりき。

琶法師は醉と疲の爲に眠りぬ、我は其醒むるを待ちて禮辭を述へしに、渠は此日我

か聽者たりしとの、千萬人の聽者に勝りしとて我に感謝し、是も渠が最後の彈曲なるへきを語りて、思はず一滴の涙を浮めぬ。明朝の首途に外客の急きと家内の喘きの爲に、日は早く暮れ、夕は早く夜となりぬ。今宵と云ふ今宵とそ、我に一刻千金の時なれども、別に著しき夢もなくして鷄鳴きぬ。此未明より、母は弟妹を起して、首途の用意の今朝迄延ばされしことを調へしめしが、全く整頓せし頃は、日既に三竿の頃なりき。母は晴れたる空を眺めて、今日も亦甚暑なるべきを嘆じたり。此時我を送るべき人々は、男性には亡父の友、家兄の友、我弟の友、女性には母、兄嫁、兩妹の友、家に満ちたり。戸外には一村の兒童、幼弟以下兩孫兒の友、遊戯の友は相呼び來り、流れを隔てゝ立並び、今出て來る我を待てり。

我は兩妹の助けに由りて奥室に衣を更へたり。裝ひ終りて長妹に言へり。

「潔く其身を持て。願くは雪よりも白かれ。聊の衣を汚さしむる勿れ」。

渠は唯其頭を垂れて無言なりき。我小妹に曰へり。

「卿の言を寡くし、卿の擧動を静かにせよ、之れ母兄の愛卿に高まる道なれは」。

圖らずも幼弟は我前に來りて、言なく我を窺きたり。

「弟よ今別るべし、勉強して都に登る時を待つべし」。

我は今渠の手を取りて玄關に出でぬ、兄は我を迎へて曰ふ。

「我嘗て父の紀念碑立てんとして止みにき。願くは父の寫眞を油繪に移して、永久我家に保存せしめよ。卿既に獨立の身となれり。願くは他鄕に父の名を汚がすと勿れ、窮通は命なり。願くは窮する爲め他人の憫みを請ふ勿れ。願くは在京の鄕人の爲めに盡力せよ。首府若し卿を容れずんば、復歸りて故鄕に食へ」。

我は語々記臆に疊みつゝ、今に最後なる母の面前に至れり。母は涕の笑顔を以て目迎へて曰へり。

「用意はよきや。最早忘れしものもなきや。久しぶりの歸省なれば、今四五日をと思へど是非もなし。故鄕には兄弟多し、我爲に憂ふる勿れ。唯卿は愛相もなく生活難き都に於て、一家の先祖となる身なれば、今後受くべき困難の程も思ひやられぬ。去れど卿が父も勞して中興の祖となりたれば、卿も亦勤めて勞せよ」。

母は默し、暫時して亦曰へり。

「漸く肥へたる其顏の、復た見る影もなく瘠すべき乎。去れど進め、母も卿の出世を禱れば」。

我は顏を隱して涕を拭き、祖道の客に心を强めて吾門を出でたり。唯維れ八月廿五日、故鄕に來りし第十八日なりけり。門前に出て、仰げば、最と高き秋の空は吾行方に向へども、天は我と相去るとなし。立ち列ぶ軒端は我を迎へて過ぎ、窗の人は後より後に隱れぬ。行々鄕人に別れを告げつゝ早くも村の門に來りぬ。回顧すれば是迄送り來りし兄弟は此より去りて空しく眠中の幻影となりぬ尙ほ。往くほどに、鄕黨も亦去りて幻影となり、我同年の友は我を送り來ると二里、亦去りて幻影となりぬ。今は吾家を出ると三里、車を停めて顧望すれば。吾故鄕も亦幻影となり、暫らく見えて亦消え隱れぬ。

一　暮れてゆく日は又明けず、
　今日も昔となるめれど、
　たのしき時は故鄕の、
　追懷(おもひいで)にぞ殘りける。

二　別れては又逢ふことの、
　ありやいつぞと知らねども、
　戀しき人は故鄕の、
　追懷にぞ殘りける。

三　雲の通路波の音の、
　及ばぬ旅に我ゆけど、
　愛でたき景色の故鄕の、
　追懷にぞ殘りける。

歸省　終

明治廿三年六月廿四日印刷
同年七月廿六日出版
明治廿三年七月廿七日再版
明治廿三年八月十六日三版
明治廿三年八月十五日四版
明治廿三年九月一日五版
明治廿四年三月廿一日六版
明治廿四年三月廿二日七版
明治廿五年三月廿八日八版
明治廿六年五月十二日九版
明治廿六年五月十九日十版
明治廿六年五月廿九日十一版
明治廿六年五月廿九日十二版印刷發行

著述者　宮崎八百吉
東京牛込區市ヶ谷富久町百五番地

發行者　垣田純朗
東京京橋區日吉町七番地

印刷人　木田川金松
東京神田區表神保町十番地

印刷所　東京活版所
東京神田區表神保町十番地

發賣所　民友社
東京京橋區日吉町四番地

定價金十五錢

版權所有

●民友社出版書目一覽表●

櫻痴居士福地源一郎著
○再版 幕府衰亡論　紙數三百四拾二頁　定價三拾五錢　郵税六錢

竹越與三郎著
○七版 新日本史 上　紙數三百八拾餘頁　定價四拾錢　郵税六錢

竹越與三郎著
○再版 新日本史 中　紙數三百拾餘頁　定價三拾錢　郵税六錢

德富健次郎纂譯
○再版 グラッドストン　（美麗なる肖像入り）　定價貳拾錢　郵税六錢

德富健次郎纂譯
○四版 武士雷　（美麗なる肖像入り）　定價拾五錢　郵税四錢

德富健次郎纂譯
○三版 格武電　（美麗なる肖像入り）　定價二拾錢　郵税四錢

田口卯吉、肥塚龍、尾崎行雄、三氏序
德富猪一郎著
○九版 新日本之青年　定價二拾錢　郵税四錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
○四版 誕生日　定價拾五錢　郵税二錢

平田久著
○再版 伊太利建國三傑　定價二拾錢　郵税四錢

人心の明鏡處世の秘寶
○五版 一語千金　定價五錢　郵税二錢

德富猪一郎序文　竹越與三郎纂譯
○三版 格朗空　（美麗なる肖像入り）　定價二拾錢　郵税四錢

湖處子宮崎八百吉著
○九版 **歸省** 定價拾五錢 郵税四錢

德富猪一郎著
○再版 **國防論** 定價拾五錢 郵税貳錢

梶原保人著
○**政論** 定價二十五錢 郵税四錢

ゼームス、ブライス著、人見一太郎譯
○**平民政治論** 合本貳冊二千九百三十頁餘正價四圓運賃二拾錢

當分の中は特別を以て二圓五十錢に減價運賃社辯

○第一 **國民小說** 定價拾四錢 郵税貳錢
○第二 **國民小說** 定價拾五錢 郵税六錢
○第三 **國民小說** 定價拾五錢 郵税四錢
○國民叢書 **青年と教育** 定價拾五錢 郵税四拾五錢

○國民叢書 **人物管見** 定價拾貳錢 郵税五錢
○國民叢書 **靜思餘錄** 定價拾四錢 郵税五錢
○**撰舉實錄** 定價貳拾錢 郵税貳拾錢

近刊

徳富猪一郎著
○**吉田松陰** 定價二拾錢 郵税四錢

ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯
○**懷舊** 定價拾錢 郵税二錢

文學博士元良勇次郎著
○佛國不換紙幣發行始末并信用論 定價拾錢 郵税二錢

佛國法律博士本野一郎述
○**多數撰舉之弊付矯正策** 定價拾五錢 郵税二錢

佛國ブーミー原著　深井英五譯
○佛英米**比較憲法論** 定價二十錢 郵税四錢

毎月一回發兌

平民叢書

一冊讀切、十卷完結、毎卷紙數百五十頁位

平民叢書は目下我か平民社會の急需に應じ平易適實の文字を以て世界の新思想新智識新現象を紹介するもの也

一冊定價拾二錢郵貳錢
十冊前金壹圓稅廿錢

平民叢書 第一卷 **十九世紀之大勢** 定價拾二錢 郵稅貳錢

平民叢書 第二卷 **世界經濟上の變動** 定價拾二錢 郵稅二錢

平民叢書 第三卷 **國家と政府** 定價拾二錢 郵稅二錢

平民叢書 第四卷 **教育之目的及方法** 定價拾二錢 郵稅二錢

人見一太郎著

○第一之維新
國民之友自第一號至第八號社說及特別寄書
○國民之友第一集 紙數三百二頁 定價二拾四錢 郵稅二錢

國民之友自第十五號至第廿四號社說
○國民之友第三集 紙數二百二十八頁 定價拾五錢 郵稅四錢

國民之友自第廿五號至第卅六號社說
○國民之友第四集 紙數二百六十八頁 定價拾八錢 郵稅四錢

自第十四號至第廿四號十一冊合本
○國民之友第二卷 改正四拾錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
○國民之友第四卷 同五拾五錢

自第五十五號至第六十八號十三冊合本
○國民之友第五卷　改正五拾錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
○國民之友第六卷　同六拾錢

自第八十七號至第百四號十八冊合本
○國民之友第七卷　同六拾錢

自第百五號至第百二十二號十八冊合本
○國民之友第八卷　同七拾錢

自第百二十三號至第百四十號十八冊合本
○國民之友第九卷　同七拾錢

自第百四十一號至第百五十八號十八冊合本
○國民之友第十卷　同七拾錢

自第五十九號至第百七十六號十八冊合本
○國民之友第十一卷　同七拾錢

國民之友

毎月三回三の日發兌　定價一冊半ヶ年前金六錢　金一圓二錢　市外郵税五厘宛

國民之友は我が雜誌世界の王を以て目せられたる雜誌なり吾人自ら其果して然るや否やを知らずと雖も敢て竊に期せんと欲するなり平民主義の喇叭たらん事を革新軍の牙旗たらん事を政海の警笛となり社會の寫實鏡となり經濟界の羅針盤文壇の最も清麗なる長春園とならん事を

發行所　東京市京橋區日吉町四地番　民友社

國民新聞

定價一枚金一錢五厘　一ヶ月金三拾錢　市外郵税拾三錢

國民新聞は確乎たる平民主義を執り卓爾として社會の地平線上に獨立獨行する大新

明治廿七年一月求之
田中良馬

聞にして活眼看じ去り麗筆說出し來りて政界の眞相紙上に躍如たり社會の活勢一讀の下に瞭然たり看よ活きたる眼を以て世を看去らんと欲する者は看よ我が國民新聞を

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

家庭雜誌

毎月一回發兌　定價金五錢　一ヶ年前金五十錢　郵稅五厘宛

家庭雜誌は社會の地盤を改革し、和樂光明なる新家庭を作らしめんと欲するものなり、其論評は平直、其觀察は警拔、史談あり今古東西の烈女偉人を清秀なる筆もて寫し、科學あり最も愉快なる方法を以て物質的文明を說き、文藝には高妙なる小說詩歌音樂繪畫批評詩話文話あり、家政には家事經濟育兒法衛生談看病術調理法社交一斑日用品物價裁縫編物婦人の職業案內家內の取締奴婢の使ひ方及ひ衣食住に關する諸事あり、雜錄あり、時事一斑あり、寄書投書あり、普通雜誌外別に一種の生面を開けり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社